

# 中国横断自動車道尾道松江線建設 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(5)

曾川1号遺跡(G～J地区)

2008

財団法人 広島県教育事業団

## 例 言

- 1 本書は、平成16(2004)年度に調査を実施した中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う曾川1号遺跡(広島県尾道市御調町大町字曾川・米田所在)の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は日本道路公団中国支社から、また整理作業・報告書作成は平成17年度に日本道路公団中国支社(10月から西日本高速株式会社が業務継承)及び平成18・19年度に国土交通省福山河川国道事務所から委託を受け、財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が実施した。
- 3 発掘調査は次のものが担当した。
  - G～I地区  
青山 透(現・広島県立歴史民俗資料館)  
梅本 健治  
伊藤 実(現・広島県教育委員会文化課)
  - J地区  
梅本 健治  
沢元 保夫(現・財団法人東広島市教育文化振興事業団文化財センター)  
山田 繁樹
- 4 出土遺物の整理・復元・実測・写真撮影、図面の整理は鍛冶益生を中心に埋蔵文化財調査室の職員が行った。
- 5 本書の執筆・編集は鍛冶が行った。
- 6 本書で使用した遺構の表示記号は次のとおりである。
  - S B: 竪穴住居跡・掘立柱建物跡, S K: 土坑, S D: 溝状遺構, S X: 性格不明の遺構
- 7 出土した石製品の石材は、考古地質学研究所 柴田喜太郎氏の肉眼鑑定による。
- 8 図版の遺物番号と挿図の遺物番号は同一である。
- 9 本書に使用した北方位は平面直角座標系第Ⅲ座標系北である。
- 10 第1図は国土交通省国土地理院発行の1:25,000地形図(府中・埴内・甲山・三成)を縮小して使用した。
- 11 出土遺物・発掘調査資料については、広島県立埋蔵文化財センターで保管の予定である。

## 目 次

I はじめに	(1)
II 位置と環境	(4)
III 調査の概要	(7)
IV 検出の遺構	(10)
V 出土の遺物	(24)
VI まとめ	(52)

## 挿 図 目 次

第1図 曾川1号遺跡周辺遺跡分布図 (1:50,000)	(5)
第2図 曾川1号遺跡位置図及び周辺地形図 (1:2,000)	(8)
第3図 曾川1号遺跡グリッド配置図 (1:1,000)	(9)
第4図 SB11実測図 (1:60)	(10)
第5図 SB12実測図 (1:60)	(11)
第6図 SB13実測図 (1:60)	(12)
第7図 SK13・15・16・18・21・22実測図 (1:40)	(15)
第8図 SK25・26・29・30実測図 (1:40)	(16)
第9図 SK17・37・38実測図 (1:20, 1:40)	(17)
第10図 SK45・48～51実測図 (1:40)	(19)
第11図 SK53～56・68・81実測図 (1:40)	(21)
第12図 SK71・87・89実測図 (1:30, 1:40)	(22)
第13図 出土遺物実測図1 (1:3)	(30)
第14図 出土遺物実測図2 (1:3)	(31)
第15図 出土遺物実測図3 (1:3)	(32)
第16図 出土遺物実測図4 (1:3)	(33)
第17図 出土遺物実測図5 (1:3)	(34)
第18図 出土遺物実測図6 (1:3)	(35)
第19図 出土遺物実測図7 (1:3)	(36)
第20図 出土遺物実測図8 (1:3)	(37)
第21図 出土遺物実測図9 (1:3)	(38)
第22図 出土遺物実測図10 (1:3)	(39)
第23図 出土遺物実測図11 (1:3)	(40)
第24図 出土遺物実測図12 (1:3)	(41)

第25図	出土遺物実測図13 (1 : 3)	(42)
第26図	出土遺物実測図14 (1 : 3)	(43)
第27図	出土遺物実測図15 (1 : 3)	(44)
第28図	出土遺物実測図16 (1 : 3)	(45)
第29図	出土遺物実測図17 (1 : 2, 1 : 3, 1 : 4)	(46)

## 付 図

付 図 曾川1号遺跡地区及び遺構配置図 (1:300)

## 表 目 次

第1表	中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う発掘調査報告書一覽	(3)
第2表	曾川1号遺跡調査地区名称一覽	(6)
第3表	曾川1号遺跡 (G～J地区)出土遺物(土器)観察表	(47～51)

## 図 版 目 次

図版1	a G区調査前近景(南東から)	図版6	a SK17遺物出土状況
	b G区調査前近景(北西から)		b SK17掘り下げ状況(北西から)
	c G区調査後全景(南東から)		c SK17完掘状況(北西から)
図版2	a H区調査後全景(南東から)	図版7	a SK26・28～30完掘状況(南東から)
	b I区調査後全景(南東から)		b SK26完掘状況(南西から)
	c J区調査後全景(南東から)		c SK29・30完掘状況(南西から)
図版3	a SB11炭化物検出状況(北から)	図版8	a SK37・38完掘状況(北西から)
	b SB11床面検出状況(東から)		b SK37完掘状況(東から)
	c SB11遺物出土状況		c SK38完掘状況(西から)
図版4	a SB12床面検出状況(北西から)	図版9	a SK25完掘状況(北から)
	b SB12床面検出状況(南東から)		b SK45完掘状況(北西から)
	c SB13検出状況(南西から)		c SK50完掘状況(南から)
図版5	a SK13・柱穴群検出状況(北から)	図版10	a SK51完掘状況(南から)
	b SK13遺物出土状況		b SK71遺物出土状況
	c SK15・16完掘状況(南東から)		c SK87遺物出土状況

圖版11 出土遺物 1  
圖版12 出土遺物 2  
圖版13 出土遺物 3  
圖版14 出土遺物 4  
圖版15 出土遺物 5  
圖版16 出土遺物 6  
圖版17 出土遺物 7  
圖版18 出土遺物 8

圖版19 出土遺物 9  
圖版20 出土遺物10  
圖版21 出土遺物11  
圖版22 出土遺物12  
圖版23 出土遺物13  
圖版24 出土遺物14  
圖版25 出土遺物15

## I はじめに

曾川1号遺跡の発掘調査は、中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係るものである。本事業は、瀬戸内海側の尾道市から日本海側の松江市を結ぶ高速道路を建設し、沿線地域の交通事情の改善を図るとともに、物流の改善を図るものである。

日本道路公団中国支社尾道工事事務所（以下「道路公団」という。平成17年10月からは西日本高速道路株式会社が業務継承。）は、広島県教育委員会（以下「県教委」という。）と平成11（1999）年7月から事業予定地内の文化財等の有無及び取扱いについて協議を始めた。

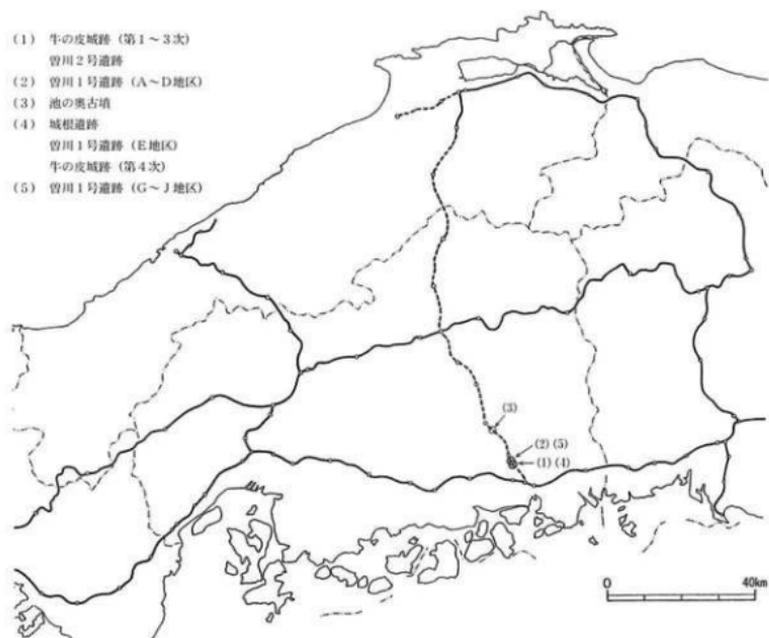
その後、県教委は現地踏査及び試掘調査を順次実施し、尾道市御調町（旧御調郡御調町）内の事業予定地内で曾川1号遺跡、曾川2号遺跡、牛の皮城跡、城根遺跡が存在することを確認した。これらの遺跡の取扱いについて道路公団は、現状保存の可否等を県教委と協議した上で、平成14年7月から工事の優先する箇所ごとに文化財保護法第57条の3に基づく埋蔵文化財発掘通知を県教委に提出し、県教委から発掘調査が必要との通知を受けた部分については、発掘調査の実施を平成14年9月以降財団法人広島県埋蔵文化財調査センター及び平成15年4月からはその業務を継承した財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室（以下「事業団」という。）に順次依頼した。

事業団では、牛の皮城跡（第1～3次）を平成15年度に、また曾川2号遺跡を平成14年度に発掘調査を実施し、平成17年3月に発掘調査報告書を刊行した。また曾川1号遺跡のA～D地区は平成14・15年度に発掘調査を実施し、平成18年3月に発掘調査報告書として刊行した。

本報告書は国土交通省福山河川国道事務所から委託を受け、曾川1号遺跡のうち、平成16年度に発掘調査を実施したG～J地区の調査成果をまとめたものであり、当該地域の歴史解明のための一助となれば幸いである。

なお、発掘調査にあたっては、西日本高速道路株式会社中国支社尾道工事事務所、尾道市教育委員会及び地域の方々の多大な御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

- (1) 牛の皮城跡 (第1～3次)  
曾川2号遺跡
- (2) 曾川1号遺跡 (A～D地区)
- (3) 池の奥古墳
- (4) 城根遺跡  
曾川1号遺跡 (E地区)
- (5) 牛の皮城跡 (第4次)  
曾川1号遺跡 (G～J地区)



中国横所自動車道尾道松江線路線図 ((1)～(5)は報告書番号)



第1表 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う発掘調査報告書一覧

報告書	遺跡名(第 次)	地区名等	調査期間	所在地	時期	内容	
(1) 第12集	曾川2号遺跡		平成15年1月20日～ 3月7日	尾道市御調町 大町字西川	古代末～中 世	集落跡	
	牛の皮城跡 (北郭群)	(第1次)	畝状整堀群	平成15年1月20日～ 3月14日	尾道市御調町 大町字二の丸	中世	城跡
		(第2次)	1～4郭	平成15年7月7日～ 10月31日			
		(第3次)	西整堀	平成15年11月10日～ 11月28日			
		(第4次)	5郭	平成18年1月30日～ 2月24日			
(4) 第22集 (本書)	城根遺跡		平成15年1月27日～ 3月7日	尾道市御調町 大町字城根	古墳時代か	箱式石棺	
(2) 第18集		(A地区)	(旧・平成14年 度調査区)	平成14年10月21日～ 平成15年1月17日	尾道市御調町 大町字曾川	集落跡	
		(B地区)	(旧・P2第一 調査区)	平成15年4月7日～ 5月23日			
		(C地区)	(旧・P2第二 調査区)	平成16年1月6日～ 2月5日			
		(D地区)	(旧・P1)	平成15年12月1日～ 12月19日			
(4) 第22集	曾川1号遺跡	(E地区)	(旧・P4)	平成15年12月1日～ 12月19日	尾道市御調町 大町字米田	縄文時代後期 ～中世	遺物包含層
(5) 第23集 (本書)		(G地区)	(旧・P3)	平成16年6月7日～ 8月6日	尾道市御調町 大町字曾川 ・米田	集落跡	
		(H地区)	(旧・P3側道)				
		(I地区)	(旧・P4側道)				
		(J地区)	(旧・P2)				平成17年1月11日～ 3月4日
		(K地区)					平成17年4月11日～ 7月1日
(3) 第19集	家ノ城跡	(第1次)	南東郭	平成15年9月16日～ 10月31日	尾道市木之庄町 木梨字家城東平	中世	城跡
		(第2次)	南東郭	平成16年5月7日～ 6月11日			
		(第3次)	北郭	平成17年10月17日～ 11月11日			
		(第4次)	北郭	平成18年4月17日～ 7月21日			
		(第5次)	北郭	平成19年4月16日～ 5月25日			
(3) 第19集	池ノ奥古墳		平成16年8月23日～ 10月28日	世羅郡世羅町 宇津戸字天神	古墳時代後期	横穴式石室	

註(報告書)

- (1) 財団法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曾川2号遺跡 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』2005年
- (2) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2) 曾川1号遺跡(A～D地区)』2006年
- (3) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(3) 池ノ奥古墳』2007年
- (4) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(4) 城根遺跡 曾川1号遺跡(E地区) 牛の皮城跡(第4次)』2008年
- (5) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(5) 曾川1号遺跡(G～J地区)』2008年

## Ⅱ 位置と環境

曾川1号遺跡は、尾道市御調町大町に所在する。御調町は平成17年3月に尾道市と編入合併した町で、町域は旧尾道市の北側にあたる。町の北側と南側は標高300～600mの山々が東西に連なり、その間をほぼ東西方向に1級河川の芦田川の支流である御調川が流れている。

**旧石器時代～縄文時代** 町域内では、旧石器時代の遺構及び遺物は確認されていないが、福山市新市町所在の宮脇遺跡では細石器が出土している。縄文時代のものについては、曾川1号遺跡のE地区から後期の土器が出土しているが、包含層に伴うもので遺構からの出土ではない。

**弥生時代** 御調川の北岸を中心に弥生土器や石斧の出土地が知られている。曾川1号遺跡においても弥生時代後期から終末期にかけての竪穴住居跡や土坑などが確認されている。

また、曾川1号遺跡と御調川を挟んだ北岸には貝ヶ原遺跡があり、同遺跡からは吉備地方特有の古式の特殊器台が出土しており、墳丘墓の存在が想定されるとともに吉備地域との繋がりを窺わせている。

**古墳時代** 古墳時代になると御調川北岸の丘陵地帯を中心に古墳が営まれるようになる。交通の結節点となる市地域には箱式石棺や横穴式石室を埋葬施設とする古墳の存在が知られているが、古墳の多くが未調査であるため、その内容については明らかとしたい。また、集落遺跡についても明らかではないものの、曾川1号遺跡では6世紀の竪穴住居跡が確認されている。

**古代** 古代において本地域は、備後国の国府があったと推定されている府中市から安芸国へと通じる古代山陽道が通過していたものと推定されているが、その位置を具体的に明らかとする遺跡は確認されていない。

調査された遺跡としては本郷平庵寺があり、四天王寺式に類似した伽藍配置を有する7世紀末頃に創建された備後南部地域では古い形式を有する寺であったことが明らかとなった。

集落遺跡については曾川2号遺跡があり、掘立柱建物跡・土坑・柱穴などを検出し、出土した遺物から12世紀代の遺跡と考えられている。

**中世以降** 中世になるとこの地域は備後国の守護大名山名氏の勢力下であり、丘陵山頂部に多くの山城が築かれるようになる。このうち、発掘調査が実施された遺跡としては末近城跡、牛の皮城跡がある。このうち末近城跡では郭や堀切が確認され、小規模な中世の山城であることが明らかとなった。また、牛の皮城跡は南北の郭群からなり、北郭群の北西側に14本の畝状堅堀、東側に9本の畝状堅堀、南東側に堀切2本、西側に堅堀1本を確認した。

### 参考文献

- 瀬見 浩 「貝ヶ原遺跡出土の特殊器台形土器」『広島県文化財調査報告』第17集 広島県教育委員会 1991年
- 広島県御調町教育委員会『本郷平庵寺』1989年
- 財団法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曾川2号遺跡 中国横断自動車道尾道松山線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』2005年



第1図 曾川1号道跡周辺道跡分布図(1:50,000)

- 1 曾川1号道跡
- 2 牛の皮城跡
- 3 曾川2号道跡
- 4 本郷平庵寺
- 5 高尾1号道跡
- 6 高尾2号道跡
- 7 高尾西道跡
- 8 上木屋道跡
- 9 後口山道跡
- 10 神西道跡
- 11 大慶寺道跡
- 12 後呂谷道跡
- 13 貝ヶ原道跡
- 14 天神山古墳群
- 15 高尾古墳群
- 16 後口山古墳
- 17 高神古墳群
- 18 正尺山古墳群
- 19 高尾西古墳群
- 20 明神山古墳群
- 21 梅ノ木古墳群
- 22 小墳古墳
- 23 中倉谷古墳
- 24 七つ塚古墳群
- 25 神古墳群
- 26 神西古墳群
- 27 貝ヶ原古墳群
- 28 ムカデ岩山古墳群
- 29 河崎古墳
- 30 粟谷山古墳
- 31 城の東古墳
- 32 市山古墳群
- 33 東中倉古墳群
- 34 大明谷古墳群
- 35 隠れ道楽跡
- 36 城根道跡
- 37 合山大火葬墓
- 38 末近城跡
- 39 上田城跡
- 40 福元山城跡
- 41 正尺山城跡
- 42 福丸城跡
- 43 丸山城跡(津賀城跡)
- 44 峠山城跡
- 45 丸山城跡(駒場山城跡)
- 46 雲雀城跡
- 47 古城跡
- 48 古城跡
- 49 天神道跡
- 50 明神沖道跡
- 51 上千堂道跡

第2表 曾川1号道跡調査地区名称一覧

調査期間		調査時名称	報告名称	事業名	報告書
年度	月 日				
平成14年度	10月21日～1月17日	平成14年度調査区	A地区	中国横断自動車道尾道松江線建設事業	2
平成15年度	4月7日～5月23日	P2第一調査区	B地区		
		P2第二調査区	C地区		
	12月1日～12月19日	P4	E地区		3
	1月6日～2月5日	P1	D地区		2
平成16年度	4月14日～4月28日	防火水槽	F地区	大町地区防火水槽設置事業	1
	6月7日～8月6日	P3	G地区	中国横断自動車道尾道松江線建設事業	4
		P3側道	H地区		
		P4側道	I地区		
	1月11日～3月4日	P2	J地区		
平成17年度	4月11日～7月1日	K地区			
	7月11日～10月7日	L地区		一般国道486号道路改良工事	
平成18年度	9月11日～12月22日	M地区			

## 曾川1号道跡に係る発掘調査報告書

- 1 財団法人広島県教育事業団 『曾川1号道跡 大町地区防火水槽設置事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』 2005年
- 2 財団法人広島県教育事業団 『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2) 曾川1号道跡(A～D地区)』 2006年
- 3 財団法人広島県教育事業団 『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(4) 城根道跡 曾川1号道跡(E地区) 牛の皮城跡(第4次)』 2008年
- 4 財団法人広島県教育事業団 『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(5) 曾川1号道跡(G～J地区)』 2008年

### Ⅲ 調査の概要

G～J地区の調査区は、平成14・15年度に調査を実施したA～D地区の北側に位置(第2図)し、背後の牛の皮城跡からのびる低丘陵の先端方向にあたる。A～D地区においては弥生時代から古代・中世にかけての遺構が確認されたことから、G～J地区にかけても同様な時期の遺構が検出されるものと考えられていた。また、G～J地区のさらに北側に位置する平成15年度に調査したE地区で縄文時代後期の包含層が確認されていたことから、同期の遺構が確認される可能性も考えられていた。

調査にあたっては、従来の調査を踏襲してグリッド名(第3図)を付けることとした。また、A～D地区の調査の成果に基づいて、遺構面と考えられる面近くまでは重機によって表土等を掘削した後、遺構精査を実施した。

G～J地区はいずれも近年まで民家の宅地部分であったり、その付属施設等が建てられたりしていたことから、遺構面は後世の攪乱を著しく受け、大きく改変されていた。以下、各地区の概要を記述する。

今回の調査では北側に位置するG地区(P3)では、弥生時代後期の円形の竪穴住居跡(SB11)1軒、隅丸方形の竪穴住居跡(SB12)1軒、掘立柱建物跡(SB13)1棟、その他多数の柱穴などを検出した。とくにSB12からはガラス製の小玉や鉄鏝、石鏝が同時に出土した。一般的に弥生時代後期には、鉄器の普及が進展する時期とされており、曾川1号遺跡検出の住居跡から石鏝と鉄鏝が共伴して出土したことは、当該地域の鉄器への移行過程の実態を解明するうえで貴重な資料となった。

G地区の南東側に当たるH地区(P3側道)からは、弥生時代後期の円形や方形の貯蔵穴と考えられる土坑や柱穴のほか、2次堆積と考えられる土器片が集中して出土した土器溜り2か所などを検出した。

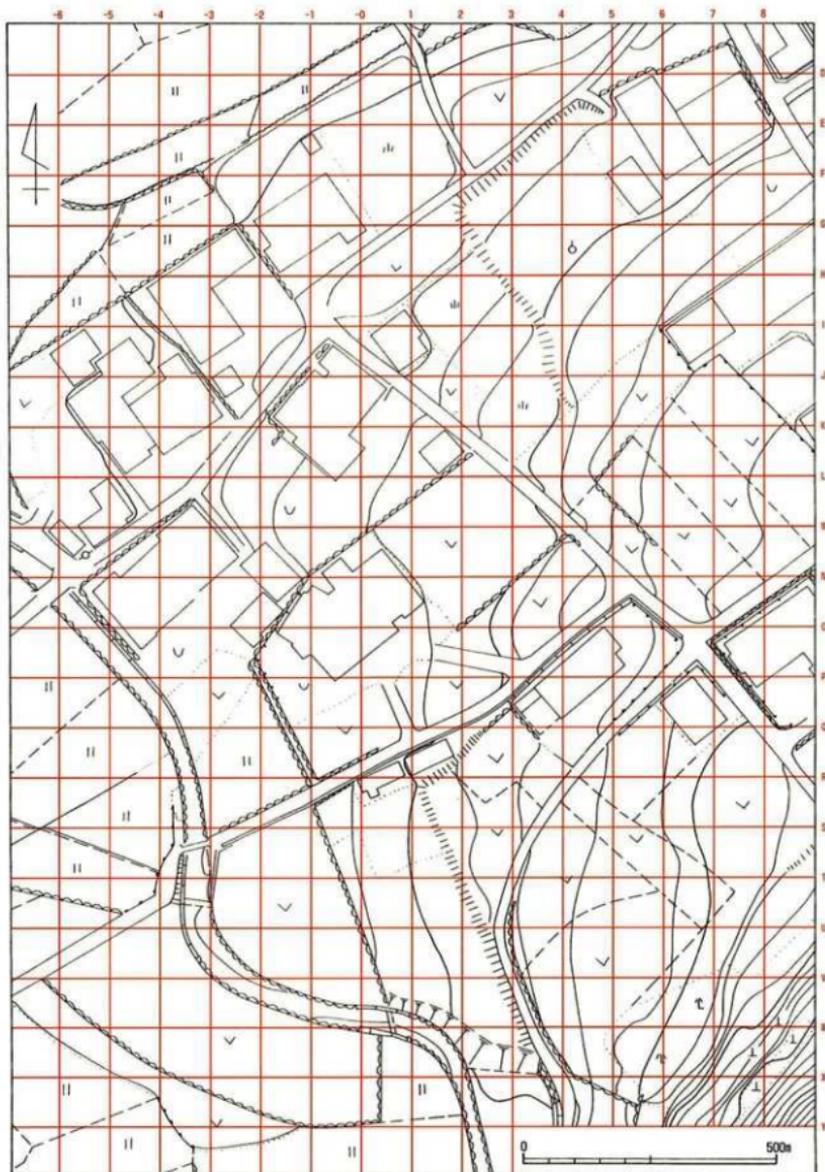
今回の調査においては、もっとも北側に位置するI地区(P4側道)では、遺構は確認できなかったが、少量の土器片が出土した。

一方、H地区の南側に連続するJ地区(P2)は南側から北へ下がる緩やかな斜面であるが、北側の約半分を宅地造成のため削平されて平坦となっていた。このため、北側の遺構は近世から現代にかけての水溜土坑や溝であった。また、南側については弥生時代後期後半頃の土器溜土坑1基と掘立柱建物跡等の柱穴群を多数検出した。

以上のように今回の調査においては、後世の攪乱が著しかったにもかかわらず、弥生時代後期を中心とした遺構を確認することができ、曾川1号遺跡がA～D地区のさらに北側に広がっていたことが明らかとなるとともに、さらにG地区の北側に位置するE地区とI地区において包含層のみが確認された調査結果から考えて、曾川1号遺跡の北限がG地区付近にあると想定できよう。



第2圖 曾川1号遺跡位置圖及び周辺地形圖(1:2,000)



第3図 曾川1号遺跡グリッド配置図(1:1,000)

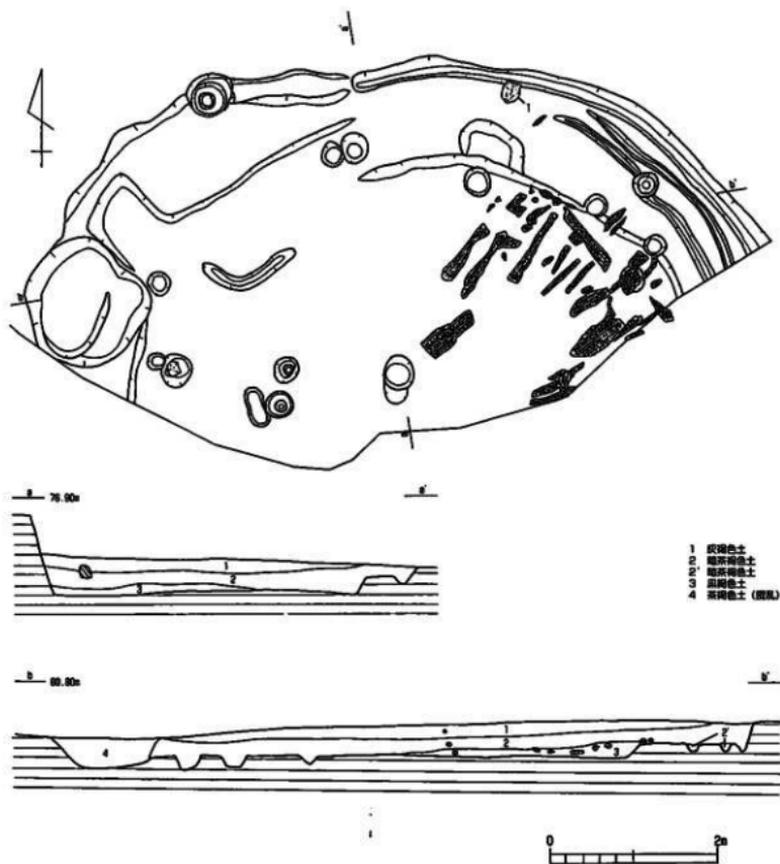
## IV 検出の遺構

### 1 住居跡・建物跡

G地区から竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟を検出した。

SB11 (第4図、図版3-a~c)

L(-1)グリッドで検出した円形の竪穴住居跡で、全体の2/3ほどが調査区外に延びていることから、全容については明らかとしたいが、規模については直径8.5m前後と推定される。住居跡の壁は約50cm残存しており、壁際に幅約15~20cm、深さ約10cmの壁溝が廻っている。

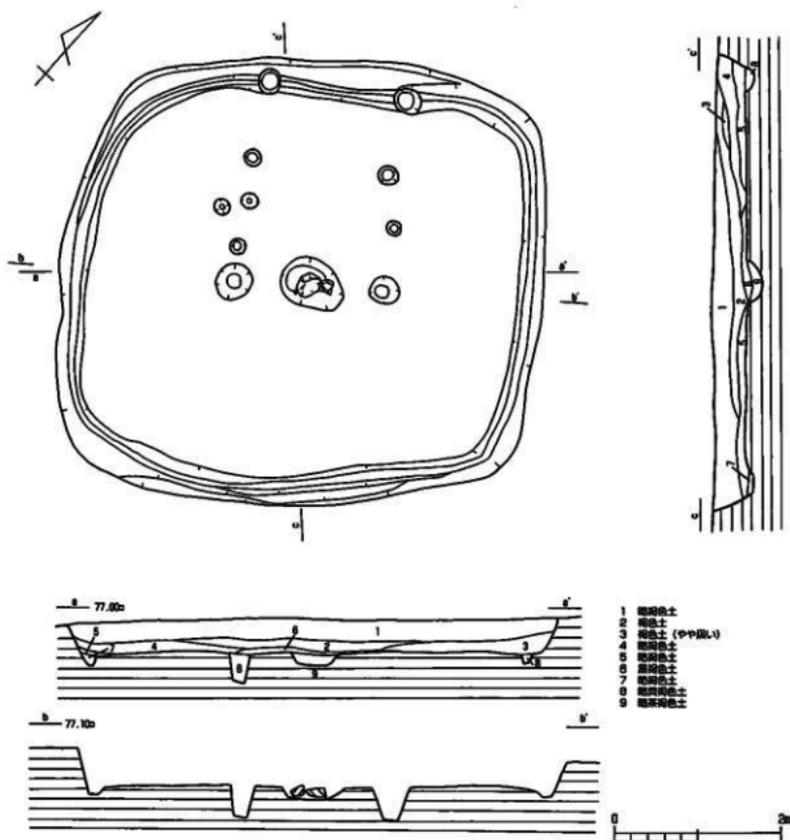


第4図 SB11実測図(1:60)

住居跡の北東側には、壁溝より内側に2条の溝があり、数回の拡張があったことが窺われる。床面はほぼ水平で、北側の壁側は1段高くなっている。柱穴と考えられるピットを数個検出したが、対応関係は明確ではない。また住居跡北東側床面より炭化した柱材が検出したことから、本住居跡は焼失家屋と考えられる。この住居跡からは弥生時代後期後半の土器片が出土している。

SB12 (第5図, 図版4-a・b)

L( - 1) グリッド付近で検出した4m×5mの2本柱の隅丸方形竪穴住居跡である。住居跡



第5図 SB12実測図(1:60)

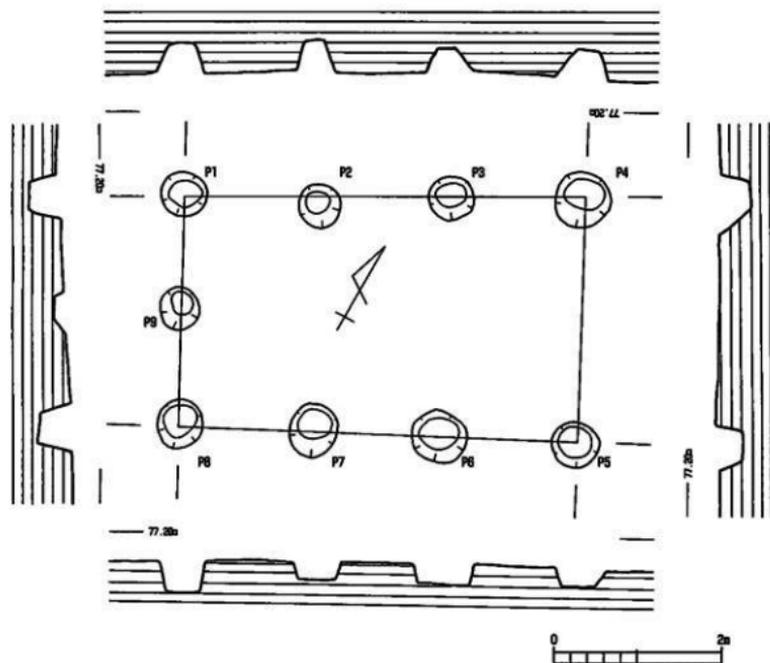
の壁は残りの良好な箇所約45cmあり、壁沿いに壁溝が全周する。壁溝の規模は幅30~50cm、深さ6~10cmである。床面はほぼ水平で、床面中央には長径80cm、短径60cm、深さ10cmの炉跡がある。この炉跡を挟んで東西に支柱穴があり、規模は東側の柱穴が直径35cm、深さ40cm、西側が直径40cm、深さ35cmである。

また、この住居跡からは弥生時代後期後半の土器片をはじめ、ガラス製の小玉、石鏃、鉄鏃などの遺物が出土した。

### SB13 (第6図、図版4-c)

K(-1)グリッドで検出した掘立柱建物跡である。規模は3間(4.75m)×2間(2.75~2.95m)で、柱穴間距離は桁行：P1~P2-1.60m、P2~P3-1.60m、P3~P4-1.55m、P5~P6-1.65m、P6~P7-1.50m、P7~P8-1.60m、梁行：P4~P5-2.95m、P8~P9-1.50m、P9~P1-1.25mである。

棟方向はN65°Eを指向する。この掘立柱建物跡から少量の弥生時代後期の土器片が出土した。



第6図 SB13実測図(1:60)

## 2 土坑

G地区から19基、H地区から24基、J地区から31基の土坑を検出した。

G地区やH地区検出の土坑の中には、弥生土器を伴ったものがあり、貯蔵穴と考えられるものもある。また、J地区検出の土坑の多くは近世から現代にかけてのものも多く、その大半は漆喰を塗った水溜土坑である。

### SK13 (第7図, 図版5-a・b)

J地区Q3グリッドで検出した方形の土坑で、規模は長軸1.80m、短軸1.10m、深さ0.30mである。壁は底面から長軸方向は緩やかに、また短軸方向は急に立ち上がり、底面はほぼ水平である。底面の西側に楕円形のピットがある。

### SK15・16 (第7図, 図版5-c)

J地区Q4グリッドで検出した2基の円形土坑で、SK15は木桶の土坑、SK16は漆喰を塗った土坑である。規模はSK15が径1.35m、深さ0.65m、SK16が径1.45m、深さ0.82mである。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、底面は水平である。前後関係はSK15→SK16である。

### SK17 (第9図, 図版6-a~c)

J地区P4グリッドで検出した不整形の土坑である。規模は長径1.40m、短径1.28m、深さ0.43mである。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ水平である。土坑の中層位から大量の弥生時代後期の土器片が出土した。

### SK18 (第7図)

J地区P3グリッドで検出した長方形の土坑で、規模は長軸1.15m、短軸1.00m、深さ0.25mである。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、底面は水平である。

### SK21 (第7図)

J地区の南半部と北半部との境のP3グリッドで検出した不整形な楕円形を呈する土坑である。規模は長径0.95m、短径0.85m、深さ0.35mである。壁は底面から緩やかにカーブして立ち上がる。底面は中央部がややくぼむ。

### SK22 (第7図)

SK21の北東側に近接したO3グリッドで検出した不整形な土坑で、北西側はJ地区南半部と北半部との境の段差のため、失われている。残存する規模は長軸1.10m、短軸0.65m、深さ0.25mである。壁は底面から斜めに直線的に立ち上がる。底面は中央部がややくぼむ。

**SK25 (第8図, 図版9-a)**

J地区O3グリッドで検出した方形の土坑である。規模は長軸1.30m, 短軸1.20m, 深さ0.30mである。壁は底面から緩やかにカーブして立ち上がる。底面は中央部がややくぼむ。

**SK26 (第8図, 図版7-a・b)**

J地区北半部と南半部との境付近のP2グリッドで検出した円形の土坑で、底面が確認できないほど深く掘られていることから素掘りの井戸と考えられる。規模は直径1.75mで、壁はほぼ垂直に掘られている。

**SK28 (図版7-a)**

J地区P2グリッドで検出した円形土坑で、壁に粘土が貼られている。規模は直径1.00~1.57m, 深さ0.64mである。壁は底面から斜めに直線的に立ち上がり、底面は中央に向かってくぼんでいる。

**SK29 (第8図, 図版7-c)**

J地区P2グリッドで検出した不整の円形土坑である。規模は直径1.57m, 深さ0.95mである。壁は底面から斜めに直線的に立ち上がり、底面は水平である。また、底面の壁際には直径1.25m, 幅10~15cm, 深さ3cmの溝が廻っていることから、木桶を埋置したものと考えられる。

**SK30 (第8図, 図版7-c)**

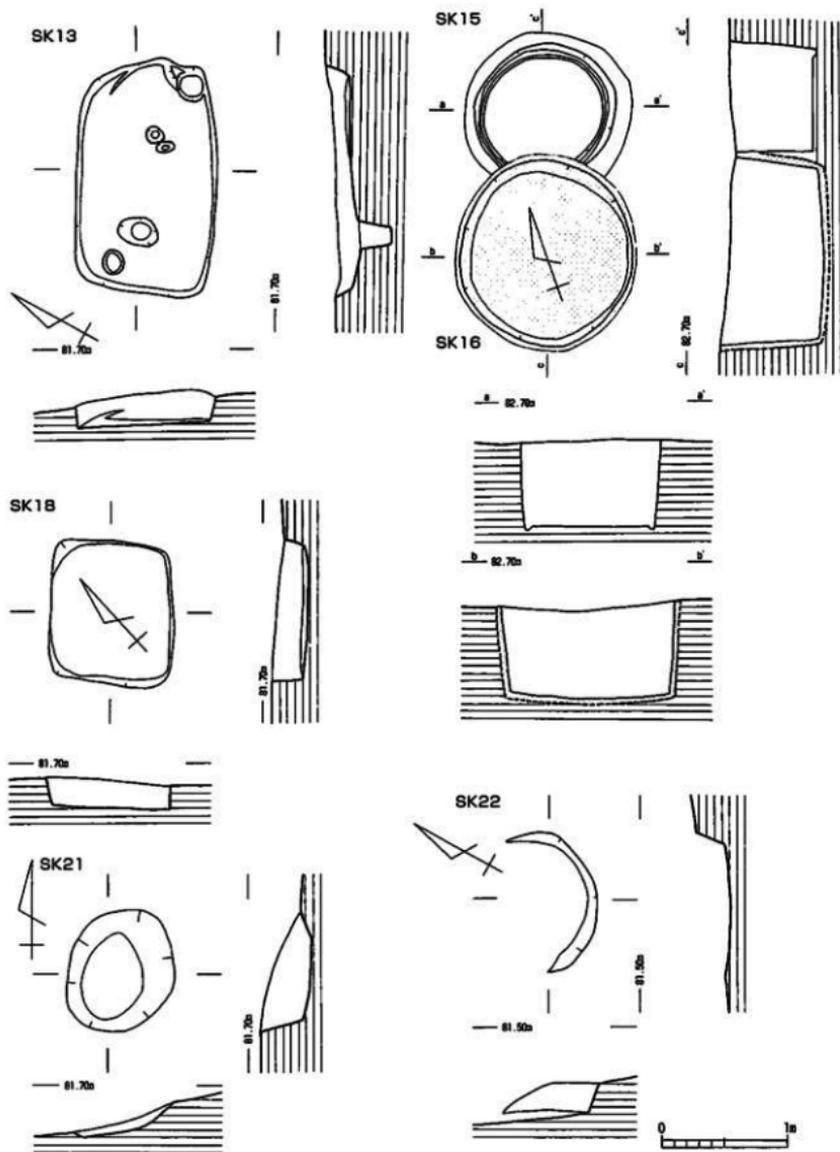
J地区O2グリッドで検出した不整の方形土坑である。規模は長軸2.00m, 短軸1.75m, 深さ0.95mである。壁は底面からほぼ斜めに直線的に立ち上がる。底面は中央部がややくぼむ。

**SK37 (第9図, 図版8-a・b)**

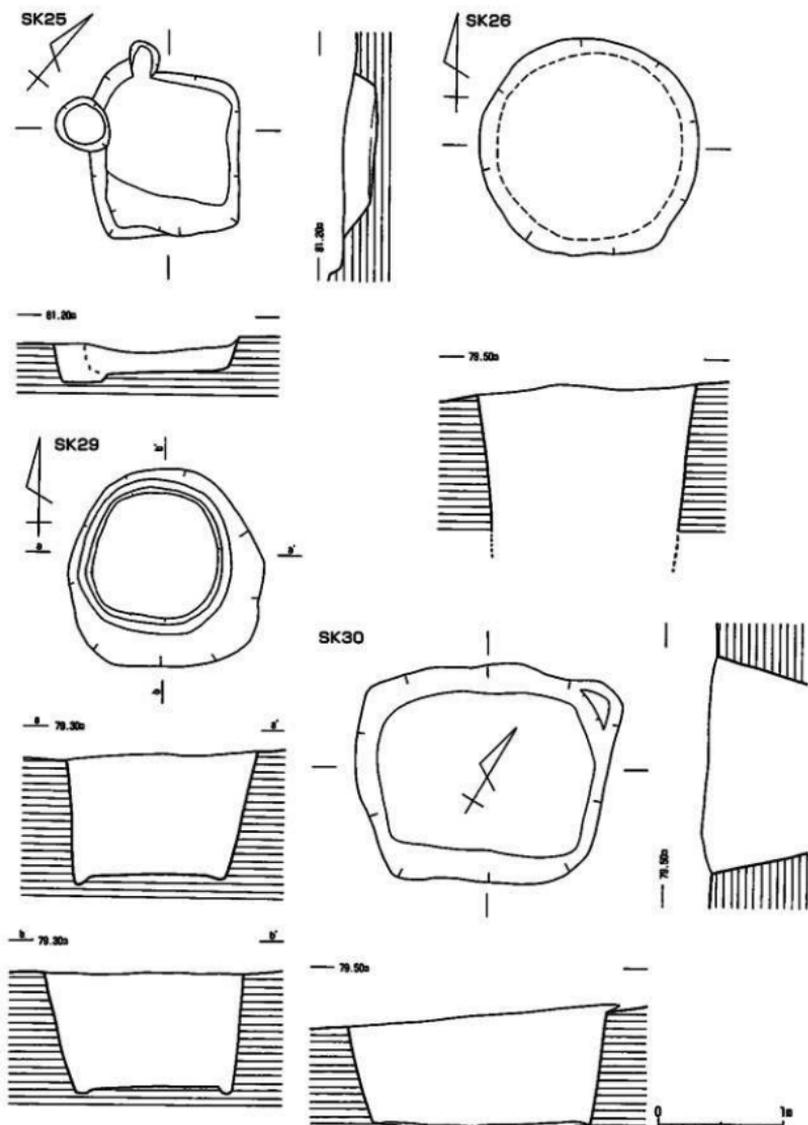
J地区P1グリッドで検出した漆喰を塗った方形の土坑で、西側に接して同様の漆喰土坑であるSK38がある。規模は長軸2.00m, 短軸1.70m, 深さ1.00mである。漆喰の壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、底面にも漆喰が塗られていた。漆喰の厚さは3~5cmで、底面で直径15~20cmの3個のピットを検出した。遺物として近世陶磁器がある。

**SK38 (第9図, 図版8-a・c)**

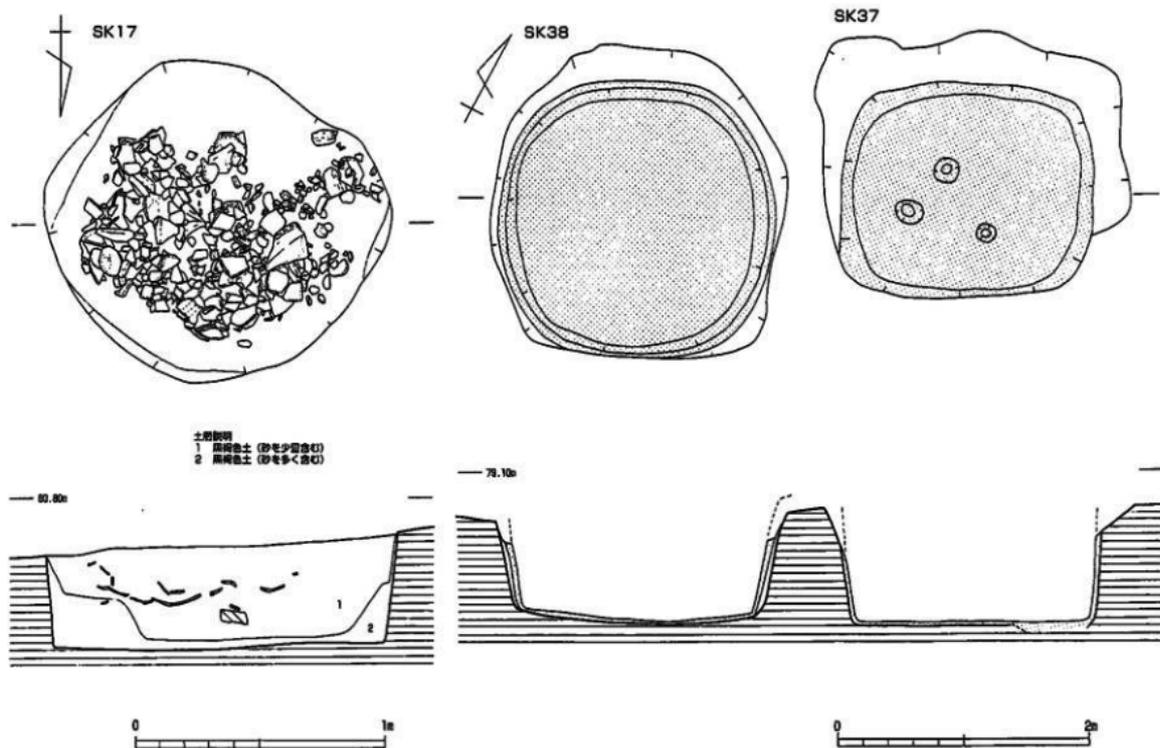
SK37の西側に接したJ地区P0グリッドで検出した円形の漆喰土坑である。規模は直径2.20m, 深さ0.80mである。漆喰の壁は底面からやや斜めに直線的に立ち上がり、底面は水平で、底面にも漆喰が塗られていた。漆喰の厚さは3~5cmである。



第7圖 SK13・15・16・18・21・22実測図(1:40)(アミ目:漆喰)



第8图 SK 25·26·29·30尖刺图(1:40)



第9図 SK17・37・38実測図(1:20, 1:40)(アミ目:濃噴)

#### SK45 (第10図, 図版9-b)

H地区M2グリッドで検出した円形の土坑である。全体の半分ほどが調査区外であるため、全体の状況は明らかではない。規模は直径1.55m、深さ約0.20mである。壁は底面からほぼ直線的に斜めに立ち上がり、底面は中央部にかけてくぼむ。底面中央部には直径25cm、深さ10cmの円形のピットを検出した。

#### SK47

H地区N2グリッドで検出した長方形の土坑で、西側は調査区外に延びている。規模は長さ2.15m以上、幅1.45m、深さ0.86mである。壁は底面から直線的に斜めに立ち上がり、底面は北西部がやや深い。土坑の覆土中からは弥生土器が出土している。

#### SK48 (第10図)

H地区M2グリッドで検出した円形の土坑である。遺構の1/3ほどが調査区外にあるため、全体の状況は明らかではない。規模は底面の直径1.30m、深さ0.60mである。壁は底面からほぼ直線的に内側斜めに立ち上がり、底面は水平である。土坑の覆土中からは弥生土器・土師器が出土しており、本土坑は貯蔵穴であったと考えられる。

#### SK49 (第10図)

SK48の北東側に近接したM2グリッドで検出した楕円形の土坑である。規模は長径1.35m、短径1.20m、深さ0.55mである。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、底面は水平である。土坑の覆土中からは弥生土器・土師器が出土しており、本土坑は貯蔵穴であったと考えられる。

#### SK50 (第10図, 図版9-c)

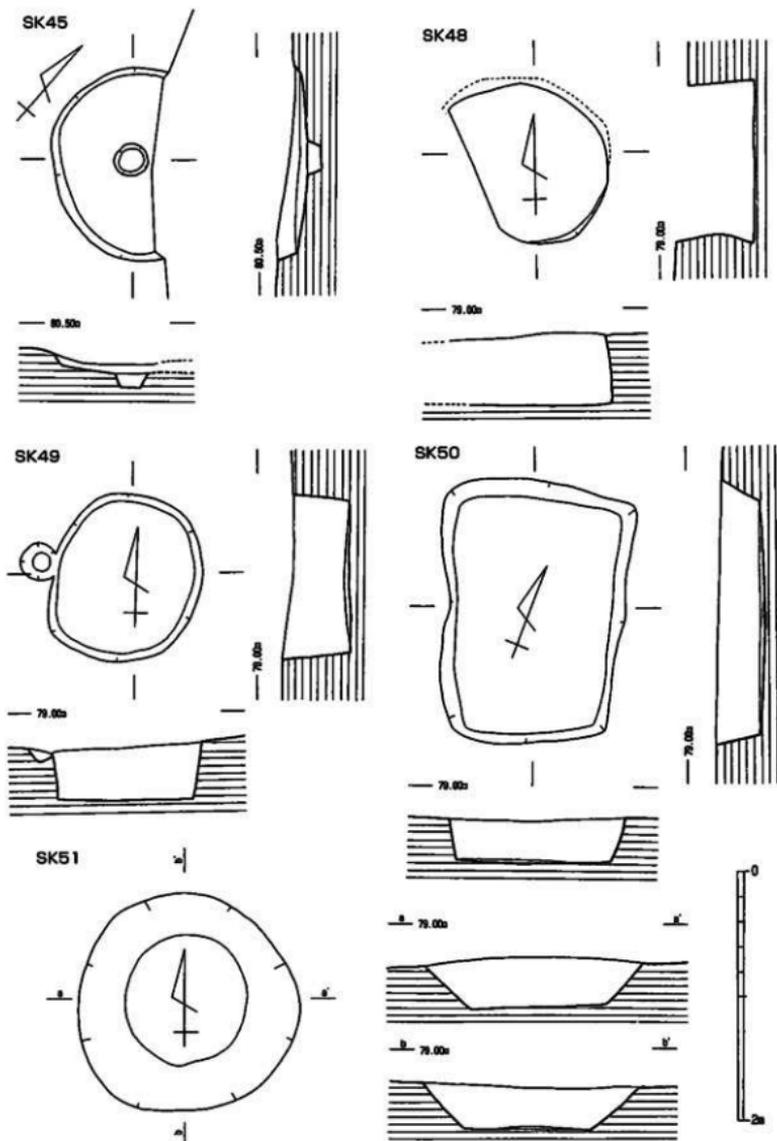
SK49の北東側に近接したM2グリッドで検出した長方形の土坑である。規模は長軸2.10m、短軸1.40m、深さ0.35mである。壁は底面から斜めにほぼ直線的に立ち上がり、底面はほぼ水平である。

#### SK51 (第10図, 図版10-a)

SK50の北東側に近接したM2グリッドで検出した円形の土坑である。規模は直径1.80m、深さ0.40mである。壁は底面から斜めにほぼ直線的に立ち上がり、底面は水平である。土坑の覆土中からは弥生土器が出土している。

#### SK52

H地区M2グリッドで検出した円形の土坑で、東側は調査区外に延びている。規模は直径0.75m、深さ0.34mである。壁の上半部は被熱しており、下半部は直径がやや大きくなっている。底面は



第10圖 SK45・48~51実測圖(1:40)

ほぼ平坦である。土坑の覆土中からは土師器が出土している。

#### SK53 (第11図)

H地区L1グリッドで検出した不整長方形の土坑である。規模は長軸1.40m、短軸1.25m、深さ0.35mである。壁は底面から斜めにほぼ直線的に立ち上がり、底面は中央部がややくぼむ。土坑の覆土中からは弥生土器・土師器が出土している。

#### SK54 (第11図)

H地区L2グリッドで検出した不整形な円形の土坑である。規模は長径1.40m、短径1.20m、深さ0.15mである。壁は底面から緩やかにカーブして立ち上がり、底面は中央部がややくぼむ。

#### SK55 (第11図)

SK53の南西側に近接するL1グリッドで検出した長方形の土坑で、遺構の南西部は調査区外に延びており、全体の状況は明らかではない。残存する規模は長軸2.20m、短軸1.65m、深さ0.60mである。壁は底面から直線的に斜めに立ち上がり、底面はほぼ水平である。土坑の覆土中からは弥生土器が出土している。

#### SK56 (第11図)

SK53の南東側に近接したL2グリッドで検出した長方形の土坑である。規模で長軸1.05m、短軸0.75m、深さ0.20mである。壁は底面から直線的に斜めに立ち上がり、底面はほぼ水平である。土坑の覆土中からは弥生土器・土師器が出土している。

#### SK68 (第11図)

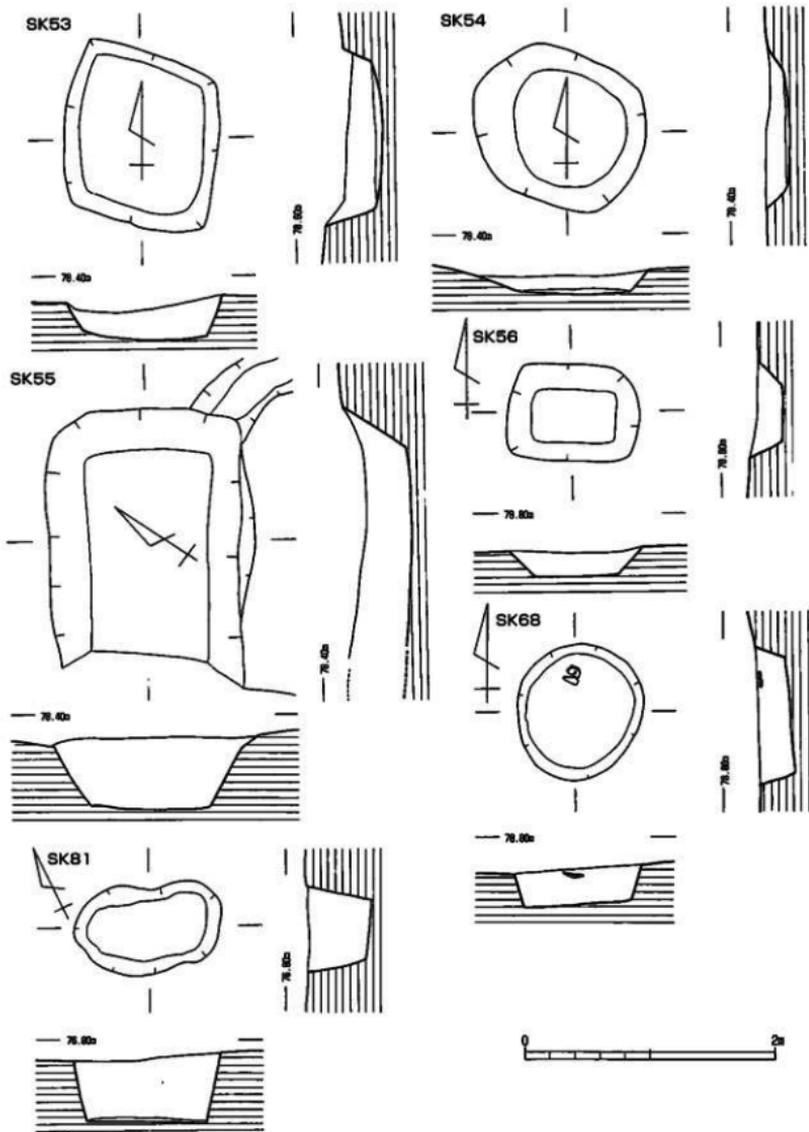
H地区J0グリッドで検出した円形の土坑である。規模は直径1.10m、深さ0.30mである。壁は底面から直線的に斜めに立ち上がり、底面は南西方向にやや深く傾斜する。土坑の覆土中からは底面より浮いた状態で弥生土器が出土している。

#### SK69

H地区K0グリッドで検出した円形の土坑である。規模は直径0.55～0.62m、深さ0.11mである。土坑の覆土中からは須恵器が出土している。

#### SK70

H地区K1グリッドで検出した円形の土坑で、底部は二段である。規模は直径1.52～1.67m、深さは浅い方が0.18m、深い方が0.45mである。土坑の覆土中から土師器、コンクリート片が出土した。



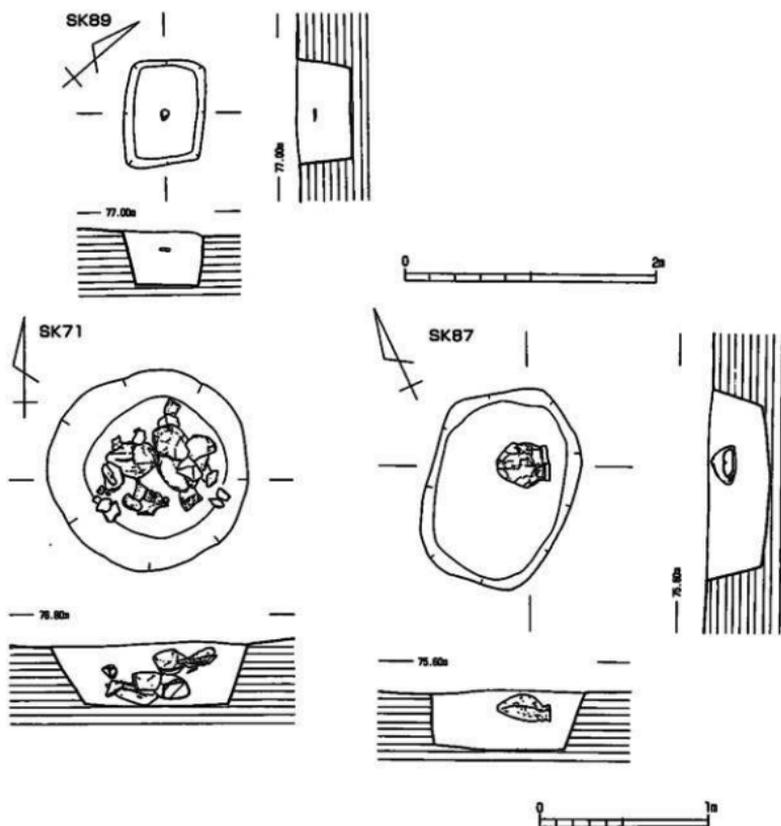
第11圖 SK53~56·68·81実測図(1:40)

SK71 (第12図, 図版10-b)

G地区K(-2)グリッドで検出した円形の土坑である。規模は直径1.60m、深さ0.50mである。壁は底面から直線的に斜めに立ち上がり、底面はほぼ水平である。土坑の覆土中から底面よりやや浮いた状態で弥生土器片や土師器片、炭などが出土した。

SK81 (第11図)

G地区J 0グリッドで検出した不整形な土坑である。規模は長軸1.15m、短軸0.70m、深さ



第12図 SK71・87・89実測図(1:30, 1:40)

0.55mである。壁は底面から直線的に斜めに立ち上がり、底面はほぼ水平である。土坑の覆土中からは弥生土器片や石鏃などが出土した。

#### SK84

G地区J(-2)グリッドで検出した長方形の土坑で、北東側は調査区外に延びている。規模は長軸1.45m以上、短軸1.32m、深さ0.15mである。底面から直線的に斜めに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。土坑の覆土中からは土師質土器が出土した。

#### SK87(第12図、図版10-c)

G地区J(-3)グリッドで検出した長方形の土坑である。規模は長軸1.60m、短軸1.15m、深さ0.50mである。壁は底面から直線的に斜めに立ち上がり、底面はほぼ水平である。土坑の底面から30~40cm高い箇所から弥生土器の甕形土器を半裁したものが、伏せた状態で出土した。

#### SK89(第11図)

G地区K0グリッドで検出した長方形の土坑である。規模は長軸0.85m、短軸0.65m、深さ0.45mである。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ水平である。土坑の覆土中からは底面より浮いた状態で弥生土器・土師器などが出土した。

### 3 溝状遺構

J地区で12条(SD5~16)、H地区で2条(SD17・18)の溝、または溝状遺構を確認した。このうちJ地区のものは調査区を北半部と南半部に区画する近世の溝(SD7)と平行して掘られているものと、これに直交するものが大半で、その多くが近世から現代のものであり、中から出土するものも江戸期以降の陶磁器類や瓦類などが大半である。

また、H地区検出の2条の溝状遺構のうちSD17の南側の調査区際(M1グリッド)では大量の弥生土器が出土したが、出土状況からこれらの土器は再堆積したものと考えられる。

### 4 その他の遺構

J地区で11基(SX2~12)、H地区で2基(SX13・14)の性格不明の遺構を検出した。J地区のものは宅地部分にかかるものが大半で、近・現代の攪乱ないし宅地に関連する遺構であろうと想定される。H地区のものについてもJ地区のもの同様に近・現代の遺構と考えられる。

## V 出土の遺物

各遺構から弥生土器・土師器などの土器類、石器類が出土したが、ここでは遺構ごとに概略を記述する。

### 1 土器類

SB11 (第13図1~14, 図版11) いずれも弥生土器である。1~8は甕で、1~3・6は二重口縁、4、5は口縁部が内側に強く屈曲する。7はわずかに内湾して立ち上がり、8は強く外反して終わる。5の外面には凸帯を貼り付け、この凸帯に刻み目を施す。9は壺で口縁部は頸部から緩やかに外反し、端部は内側に拡張して終わる。端部外面には浅い3条の凹線を廻らす。10は椀で、口縁部は体部から緩やかに内湾してのび、端部は丸く納める。11~13は底部で、11は尖り気味で底面は小さい。12は外面にタタキがある。13は上底である。14はミニチュア土器である。2・4~6・10は住居跡の床面から出土した。

SB12 (第13・14図15~24, 図版11) いずれも弥生土器である。15・16は鉢で胴部は強く屈曲し、口縁部は頸部から短く外反したのち、内側に屈曲してのびて終わる。いずれも口縁部外面に浅い凹線が廻る。17~20は甕で、口縁部はいずれも内傾して終わる。17と20の口縁部外面には浅い凹線が廻る。21・22は高杯で、21は杯部で口縁部は外側に拡張し、平坦面を作り、浅い凹線が廻る。22は脚部で、端部は下方に垂下して終わる。端部近くには円孔が穿たれている。23・24は底部で、24は小さな作りとなっている。

SK13 (第14図25, 図版12) 25は弥生土器の甕で、胴部の最大径は上半部にある。口縁部は頸部から外反し、やや内傾して上方にのびて終わる。

SK17 (第14~16図26~44, 図版12~14) いずれも弥生土器である。26・27は壺で、26の口縁部は頸部から緩やかに外反してのび、端部は強く屈曲して内傾して終わる。27の底部は平底で、胴部の最大径は上半部にある。口縁部は頸部から屈曲して短く外反して終わる。28~33は甕で、28~32の口縁部は頸部から短く外反したのち、やや内傾してのび終わる。29は倒卵形の胴部である。28・30・31の胴部外面には刺突文、30の口縁部外面には浅い凹線が廻る。33の口縁部はほぼ垂直に短くのびて終わる。

34~38は鉢で34~37は胴部上位に強い屈曲部をもち、口縁部は頸部から短く外反したのち、内傾(34~36)、ないし垂直(37)に上方にのびて終わる。39~41は高杯で、39・40は杯部、41は脚部である。39・40の口縁部は屈曲したのち内傾して短くのび端部となる。体部内外面とも細かいミガキを施す。また41は裾部が直線的に外方に広がったのち、屈曲して垂下し端部となる。屈曲部付近の外面に浅い凹線が廻る。

42はミニチュア土器で内外面とも指頭による調整痕を残す。43・44は底部で、43は大型の土器である。

SK25 (第16図45~51, 図版14) いずれも弥生土器である。45は壺と思われるもので、頸部か

ら緩やかに外反したのち、屈曲して内傾してのび口端部となる。46・47は甕で、46の口縁部は頸部から短く上方にのび終わる。47の口縁部は、頸部から短く外反したのちほぼ垂直に短くのびて終わる。また外面に浅い凹線を廻らす。48は鉢で、胴部は屈曲し、口縁部は頸部から短く外反したのちほぼ垂直に短くのびて終わる。49～51は高杯で、49は杯部、50・51は脚端部である。49は口端部が平坦となっている。50・51は裾部からやや内傾して終わる。いずれも円孔を穿つ。

SK45 (第16図52～54, 図版14) いずれも弥生土器である。52は甕、53・54は高杯である。52の口縁部は、頸部から短く外反したのち内傾してのびて終わる。外面には浅い凹線が廻る。53の杯部は口端部が平坦となっており、端面には浅い凹線が廻る。54は脚柱部で上半部は柱突となり、裾部にかけて内面にしぼり目を残す。

SK47 (第17図55～58, 図版14) いずれも弥生土器である。55・56は甕で、55の胴部は最大径付近から緩やかにカーブして頸部に至り、口縁部は頸部から短く外反し、屈曲して短く内傾し終わる。胴部外面には貝殻腹縁による刺突がある。56の胴部は最大径付近で強く屈曲する。最大径付近の外面には綾杉状の刺突が付けられている。57・58は高杯脚部で、57は裾部から垂下して端部となる。また58の端部はやや内傾して終わる。いずれも外面に櫛歯状工具による沈線が施されている。

SK48 (第17図59～64, 図版14・15) 63は土師器で、ほかは弥生土器である。59・60は甕で、59の口縁部は頸部から短く外反し、直線的に外上方にのび終わる。60は頸部から短く外反したのち、やや内傾してのび終わる。61・62は鉢で、61の口縁部は胴部屈曲点からほぼ垂直に短くのびて終わる。62の口縁部は頸部から短く外反したのち、やや内傾して短くのびて終わる。63は高杯の杯部で、ボール状を呈する。64は小型の底部である。

SK49 (第17・18図65～79, 図版15・16) 65～68・70・71・74・77は弥生土器、69・72・73・75・76・78・79は土師器である。65・66は甕で、65は胴部最大径付近から丸くカーブして頸部に至り、頸部から口縁部にかけて緩やかにカーブして外反し、口縁部は屈曲して内傾して上方にのびて終わる。頸部外面に4段の綾杉状の刺突を廻らす。66の口縁部は頸部より緩やかに外反したのち屈曲して内傾して上方にのびて終わる。67～69は甕で、67は胴部最大径付近から屈曲して頸部に至り、口縁部は頸部から強く屈曲して短くのび、さらに屈曲して短く内傾してのび終わる。胴部最大径付近の外面に刺突を廻らす。68の口縁部は頸部から屈曲して外上方に短くのび、さらに屈曲して内傾してのび終わる。外面に浅い凹線を廻らす。69の口縁部は頸部から緩やかに外反して外上方にのびて終わる。70・71は鉢で、70は胴部から直線的に立ち上がり、端部はわずかに外反して終わる。71の口縁部は頸部から短く外反したのち、外上方にのびて終わる。72は甕の胴部、73は甕の握手部である。72は直線的に外上方にのび、端部は矩形を呈する。73の断面は角が丸みをもつ長方形である。74～78は高杯で、74・75は杯部、76は脚柱部、77・78は脚端部である。74の口端部は平坦面を有し、上面に浅い凹線を廻らす。76の脚柱部は中空である。77は端部がほぼ垂下して終わる。裾部に円孔がある。78はほぼ直線的に外方へ開き、円孔が穿たれている。79はミニチュア土器で、内外面に指頭による調整が残る。

SK52 (第18図80~83, 図版16) 80・81は弥生土器, 82・83は土師器である。80は甕で, 口縁部は頸部から緩やかに外反したのち, 短く内傾してのびて終わる。81は高杯で, 口縁部端面は平坦となり, 浅い凹線を廻らす。82は鉢で, 丸底の底部から緩やかにカーブして外上方にのびる。83はミニチュア土器で, 口縁部周辺に指頭による調整痕を残す。

SK55 (第19図84~88, 図版16) いずれも弥生土器である。84~87は甕で, 84の口縁部は頸部から外反して内湾気味に立ち上がる。85の胴部は倒卵形で, 底部は小さい。口縁部は頸部から短く外反して, さらに直線的に外上方にのび終わる。86・87の口縁部は頸部から短く外反し, 口端部は短く内傾して終わる。86の口縁部外面には4条の浅い凹線が廻る。88は小さな底部で, 内面に指頭による調整痕を残す。

SK56 (第19図89~91, 図版16) 89は弥生土器, 90・91は土師器である。89・90は甕で, 89の口縁部は頸部から短く外反したのち, 内傾して立ち上がり終わる。90の口縁部は頸部から強く外反して外上方にのび終わる。91は鉢で, 口縁部は胴部から緩やかに内湾して立ち上がり終わる。

SD18 (第19図92・93, 図版16) いずれも土師器の甕で, 92の口縁部は頸部から外反して終わる。93の口縁部は屈曲したのち, 外反して外上方にのび終わる。

SK69 (第19図94, 図版18) 高台付の須恵器の杯で, 高台は断面台形で, やや外方に開く。

SK70 (第19図95・96, 図版17) いずれも土師器の甕の口縁部で, 95はほぼ垂直気味に立ち上がり, また96は外反して終わる。

SK71 (第20図97~105, 図版17) 99~103・105は弥生土器, 97・98・104は土師器である。97・98は壺で, いずれも口縁部は頸部から外反してのび, 97の口端部は矩形を呈する。99~104は甕で, 99~103の口縁部は頸部から短く外反し, 屈曲して外上方にのび終わる。104の口縁部は頸部から短く外反して終わる。105は比較的大型の底部で, 胴部は底から緩やかにカーブして立ち上がる。

SK81 (第20図106~108, 図版17) いずれも弥生土器である。106・107は甕で, 108は高杯である。106の口端部は屈曲して短く内傾して終わる。口縁部外面には凹線が廻り, 内外面に朱の痕跡がある。107の口縁部は頸部から短く外反したのち, 内傾してのびる。108の口縁部は平坦面を有し, わずかに中央部がくぼむ。

SK84 (第20図109~112, 図版17) 109は弥生土器の鉢で, 口縁部は頸部の屈曲点からやや外反気味に立ち上がって終わる。口縁部外面には凹線が廻る。110は須恵質土器の鉢で, 体部から口縁部にかけて直線的に外上方に開いて終わる。111・112は土師質土器の皿で, いずれも底部から極短く体部がのびて終わる。底部切り離しは回転へう切りである。

SK87 (第21図113~115, 図版17・18) 113は土師器の甕で, 口縁部は頸部から強く屈曲して外上方にのび終わる。114は土師器と思われる甕で, 口縁部は頸部から短く外反し, 屈曲して外上方にのび終わる。115は弥生土器の鉢と思われるもので, 口端部は内傾し上方にのび終わる。

SK89 (第21図116~120, 図版18) いずれも弥生土器である。116・117は甕で, 116の口縁部は頸部から短く外反し, 屈曲し内傾して短くのびて終わる。口縁部外面には浅い凹線が廻る。117の口縁部は, 頸部から短く外反したのち内傾してのび終わる。118は鉢で, ボール状の胴部から

やや外反して口縁部となり、上面は平坦となる。119はミニチュア土器で胴部内外面には指頭による調整痕を残す。120は平板状の土製品で、土器の胴部からの転用品である。

SD17(第21図121~125, 図版18) いずれも弥生土器である。121・122は甕で、121の口縁部は頸部から短く外反したのち、内傾して短くのびて終わる。口縁部外面には凹線が廻る。122の口縁部は頸部から外反したのち、内湾気味に上方にのびて終わる。123は鉢と思われるもので、口縁部は胴部から直線的に外上方にのびて終わる。124・125は高杯である。124は杯部で、口縁部は体部屈曲点から上方に短くのびて終わる。端面は平坦となる。125は脚柱部で、筒状となる。外面には4段に櫛描きの沈線が廻る。

SD18(第21・22図126~135, 図版18・19) いずれも弥生土器である。126は壺、127~130は甕、131~134は鉢、135は高杯である。126の口縁部は頸部から緩やかに外反して上方にのび、屈曲し内傾して短くのびて終わる。127~129の口縁部は頸部から短く外反し、屈曲し内傾して短くのびて終わる。また128の胴部最大径は上半部に位置し、最大径付近の外面に刺突文を廻らす。130の口縁部は頸部から短く外反して終わる。131の胴部は強く屈曲し頸部となる。口縁部は頸部から緩やかに短く外反したのち、屈曲し内傾して短くのびて終わる。132は胴部屈曲部から短く上方にのびて頸部となる。口縁部は頸部から外反して短くのびて終わる。133の口縁部は胴部屈曲部からやや内湾気味に上方にのびて終わる。134の口縁部は胴部から上方に短くのびて終わる。端面は平坦となり、浅い凹線を廻らす。135の口縁部は胴部から屈曲して上方に短くのびて終わる。端面は平坦となり、浅い凹線を廻らす。SD18からは92・93も出土している。

SX19(第22図136, 図版19) 136は弥生土器の甕で、口縁部は頸部から外反し、端部は内外に拡張して終わる。端部外面には浅い凹線を廻らす。

M1グリッド付近土器溜(第22~25図137~179, 図版19~21) 137~168・170・172~178は弥生土器、169・171は土師器である。この一群の土器群はH地区調査区中央付近で検出したSD17の南西端付近で出土したものであり、前述のとおり出土状況などから再堆積したものと考えられる。137~146は壺、147~152は甕、153~166は鉢、167~170は椀、171~173は高杯、174~179はそれ以外のものである。

137の口縁部は頸部から外反してのび、屈曲してさらに外反して外上方にのびて終わる。138~142の口縁部は頸部から外反してのびたのち、内傾気味に立ち上がって終わる。138・142の口縁部外面及び140の頸部外面には浅い凹線が廻る。143の口縁部は頸部から強く外反し、端部はほぼ垂直に立ち上がる。144の口縁部は頸部から短く外反してのび、口端部は内外に拡張して外面に浅い凹線を廻らす。145の口縁部は頸部から外反してのび、口端部は内外に拡張して外面に浅い凹線を廻らす。146の口縁部は頸部から短く外反してのび、端部は内側にやや拡張する。

147の口縁部は頸部から短く外反したのち屈曲して外上方にのびて終わる。148~152の口縁部は頸部から短く外反し、屈曲して内傾して短くのびて終わる。148~151の口縁部外面には浅い凹線が廻る。153~158の胴部は上半部で強く屈曲し、口縁部は頸部から短く外反したのち屈曲し、短く内傾して上方にのびて終わる。156以外の口縁部外面には浅い凹線が廻る。159~161の口縁部

は頸部から短く外反したのち、屈曲して上方にのびて終わる。162～166の口縁部は胴部から屈曲して上方にのび、端部は内外に拡張して端面は平坦となる。端面には数条の浅い凹線を廻らす。167・168の口縁部は体部から緩やかにカーブして立ち上がる。169の口縁部は体部で屈曲したのち、外反して外上方にのびて終わる。170の体部は内湾して立ち上がり、頸部で屈曲する。外面にはタタキ目が残る。171は高杯の杯部で、口縁部は体部から屈曲し外反してのびて終わる。172は脚柱部で、173は脚端部である。173の端部は内下方にやや拡張する。174～178は底部で、174～177は小さいながらも平底を有する。178は極小さいやや尖り気味の底部となる。179は土製の紡錘車と思われるもので、土器片からの転用品である。

**M1グリッド付近土器溜下層** (第26図180～184、図版22) 180は弥生土器、ほかは土師器である。180～182は壺で、180の胴部は球形を呈する。口縁部は頸部から外反してのびたのち、屈曲して短く内傾気味にのびて終わる。頸部外面には貝殻腹縁の刺突が廻る。181・182の口縁部は頸部から短く外反したのち、屈曲して外上方のびて終わる。183は鉢で、口縁部は胴部からやや屈曲して外上方にのびて終わる。184は高杯の脚端部で、端部はラッパ状に外側に広がって終わる。円形の透かしが穿たれている。

**K1グリッド付近土器溜** (第26～28図185～215、図版22～24) 185～195・199～206・209・212～215は弥生土器、196～198・207・208・210・211は土師器である。185・186は壺で、口縁部は頸部から外反してのびたのち、屈曲して185は内傾気味に、186は外反気味にのびて終わる。186の頸部外面には刺突が廻る。187～198は甕で、187～195の口縁部はいずれも頸部から短く外反したのち、屈曲して上方外のびて終わる。191～193の口縁部屈曲部はわずかに下方へ垂下する。196～198の口縁部は頸部から、196は外反、197・198は外反気味に外上方にのびて終わる。

199～208は鉢で、199～201の口縁部は頸部から短く外反したのち、屈曲して上方にのびて終わる。202の口縁部は胴部屈曲部から内傾してのびて終わる。203・204の口縁部は頸部から外反して短くのびたのち、短く内傾して終わる。205・206の口縁部は頸部から短く外上方にのびて終わる。207・208の口縁部は直線的に外上方にのびる胴部から屈曲して外上方にのびて終わる。209・210は高杯の杯部で、209は緩やかにカーブする体部から屈曲して口縁部が立ち上がり、端部は平坦となる。端面には浅い凹線が廻る。210は体部が底部から緩やかに立ち上がったのち、口縁部はわずかに屈曲して外反気味にのびて終わる。

211は鼓形器台で、受部の口縁部は外反して終わる。また、台部の裾部も大きく開いて終わる。212～215は底部で、小型の平底のもの(212・213)、やや大きめの平底のもの(214)である。215の底部には焼成後の穿孔がみられる。

**調査区出土土器** (第28図216～220、図版24) 216は縄文土器の鉢で外面に縄文を施し、太形の沈線を施したのち、縄文を擦り消している。217は土師器の甕で球形の胴部を有し、口縁部は頸部から外上方にのびる。218は土師器のミニチュア土器で、内外面ともに指頭による調整を残す。219は土師質土器の皿で、体部は平底から内湾気味に立ち上がり、口縁部はそのままのびる。220は高台付の須恵器の杯で、体部は底部から緩やかにカーブして立ち上がり、口縁部はそのままの

びる。高台部はやや長めで、外側に開く。

## 2 その他

**石鏃** (第29図221~226, 図版25) 221~226はいずれも凹基式の石鏃である。221はS B 12出土のもので、長さ2.2cm, 幅1.4cm, 厚さ0.3cmである。重量は0.89gで、石材は珪質凝灰岩である。222はS K 17出土のもので、長さ2.4cm, 現存幅1.5cm, 厚さ0.3cmである。重量は0.63gで、石材は珪質凝灰岩である。223はS K 48出土のもので、長さ2.1cm, 幅1.5cm, 厚さ0.4cmである。重量は0.7gで、石材は珪質凝灰岩である。224はS K 81出土のもので、長さ2.8cm, 現存幅1.5cm, 厚さ0.4cmである。重量は1.01gで、石材は珪質凝灰岩である。225はH地区中央の土器溜から出土したもので、長さ2.2cm, 現存幅1.4cm, 厚さ0.3cmである。重量は0.63gで、石材は珪質凝灰岩である。226はJ地区出土のもので、長さ2.4cm, 幅1.9cm, 厚さ0.3cmである。重量は1.01gで、石材は凝灰岩である。

**台石** (第29図227, 図版25) S B 12から出土したもので、平板状の石材を使用したものである。主に使用面は表側の1面に限られる。大きさは長さ23.8cm, 幅22.5cm, 厚さ5.0cmである。重量は4100gで、石材は結晶凝灰岩である。

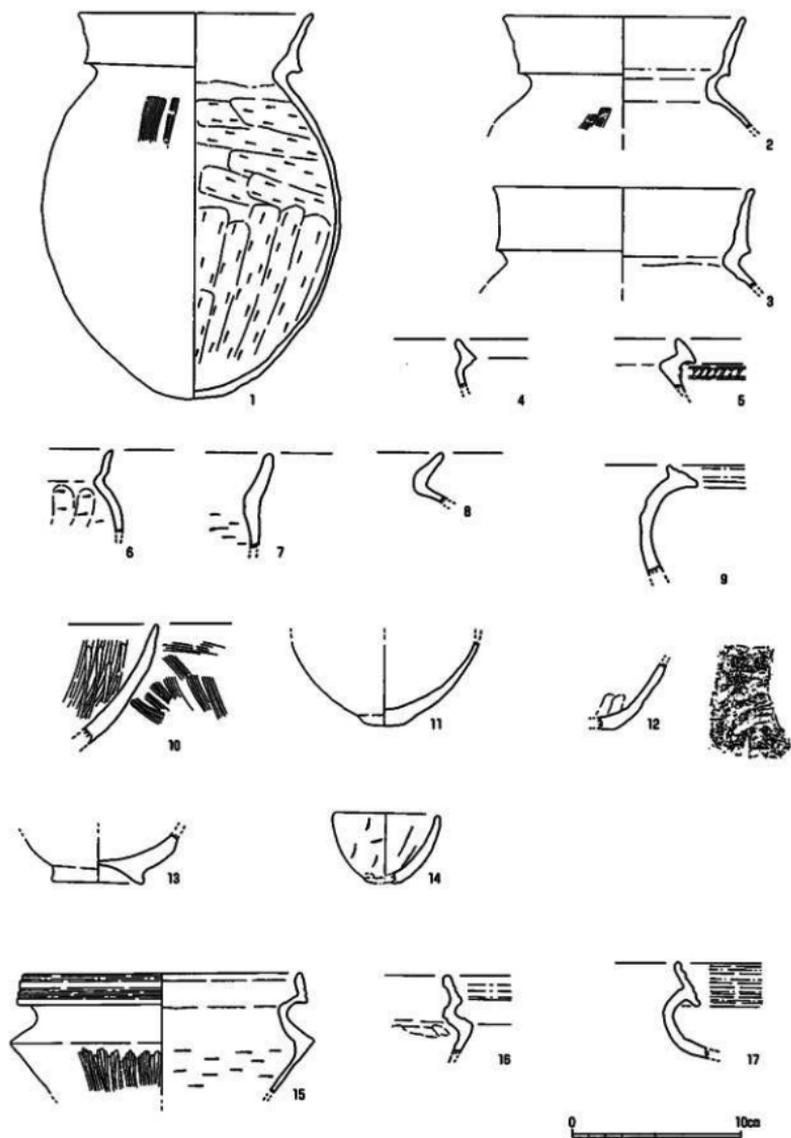
**敲石** (第29図228・229, 図版25) いずれも棒状の自然石を利用したものである。228はS B 11から出土したもので、長軸方向の2面を打面として使用している。長さは6.7cm, 幅3.8cm, 厚さ3.2cmである。重量は146gで、石材は半花崗岩である。229は調査区出土のもので、片側の端面は欠損し、反対側のみに打面が見られる。長さは9.7cm, 幅6.0cm, 厚さ4.0cmである。重量は350gで、石材は結晶溶結凝灰岩である。

**鉄鏃** (第29図230, 図版25) S B 12から出土したもので、凹基式の鉄鏃である。長さは2.4cm, 幅1.7cm, 厚さ0.4cmで、重量は2.23gである。

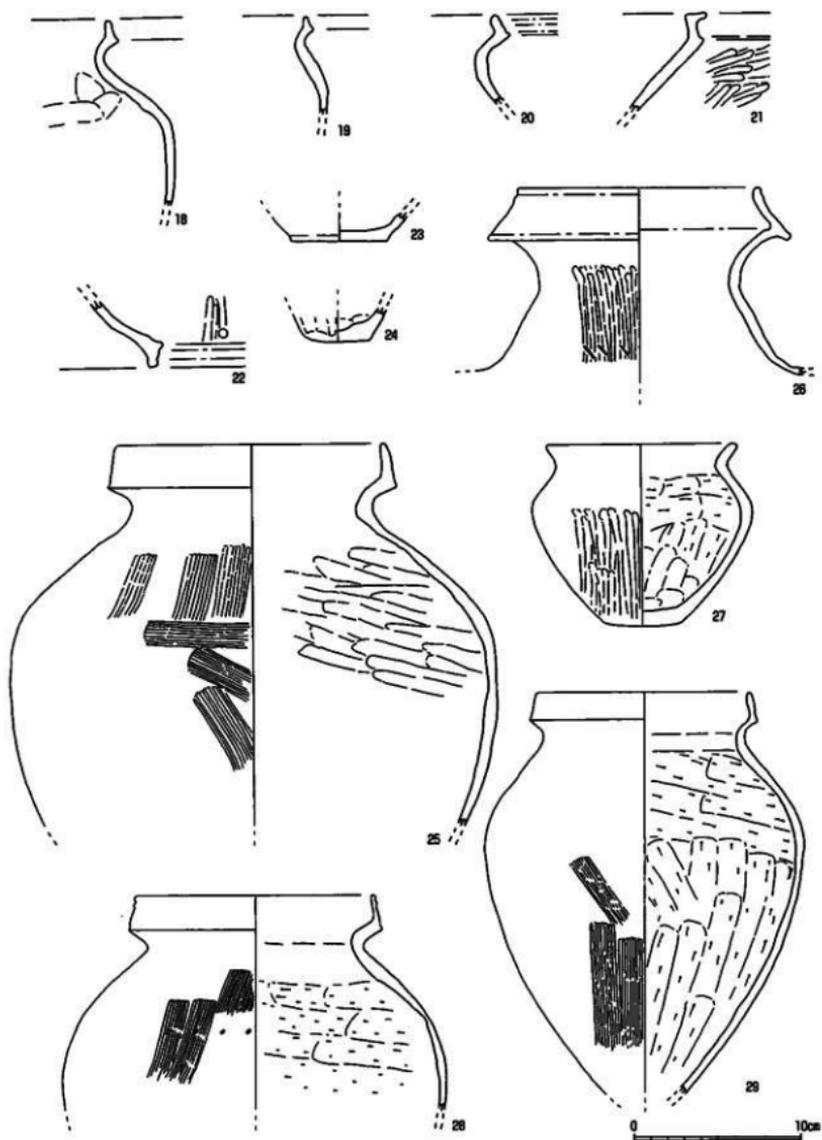
**鉄釘** (第29図231~234, 図版25) いずれもS K 29から出土したものである。231以外は身部だけが残存する。231は長さ2.6cm, 幅0.7cm, 厚さ0.6cm, 重量3.62gである。232は長さ3.7cm, 幅0.7cm, 厚さ0.9cm, 重量3.12gである。233は長さ3.1cm, 幅0.7cm, 厚さ0.7cm, 重量2.63gである。234は長さ3.8cm, 幅0.6cm, 厚さ0.7cm, 重量2.76gである。

**ガラス小玉** (第29図235, 図版25) S B 12から出土したもので、ライトブルーのガラス製の小玉である。最大径0.7cm, 高さ0.4cm, 重量0.16gである。

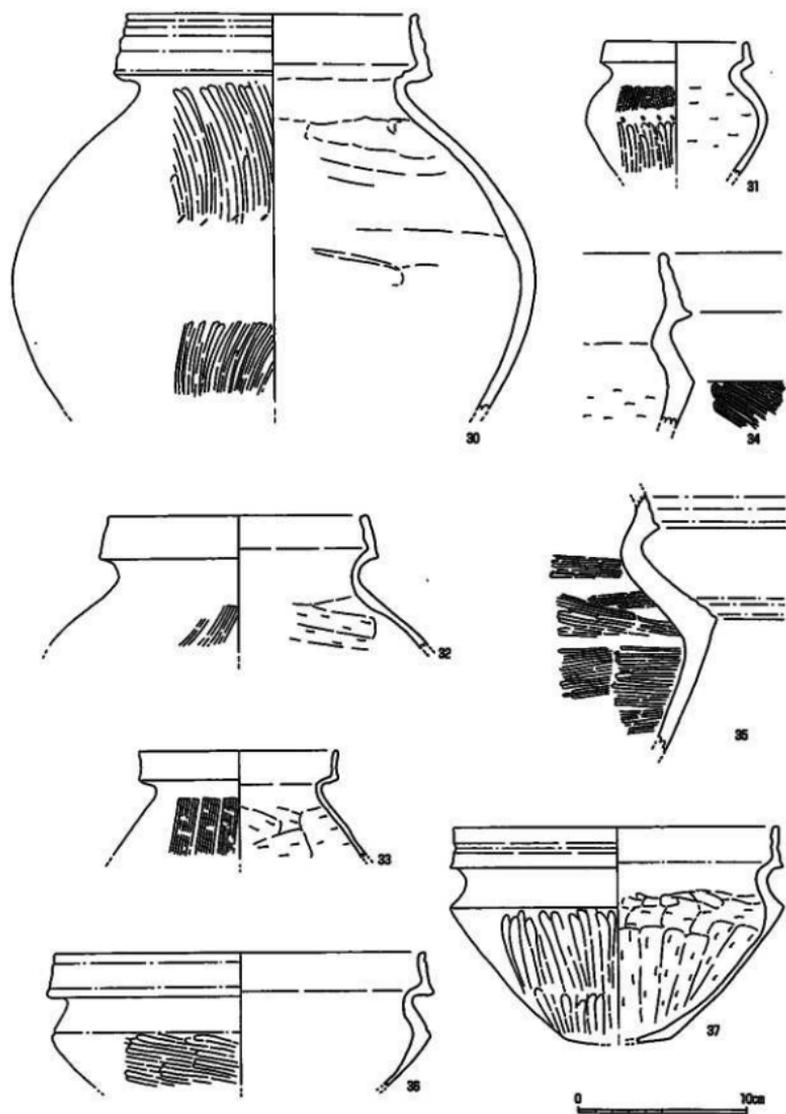
**古銭** (第29図236・237, 図版25) 236はJ地区のピット中から出土したもので、「大観通宝」(北宋銭 初鈔年1107年)である。237は調査区から出土したもので、「至和元寶」(北宋銭 初鈔年1054年)である。



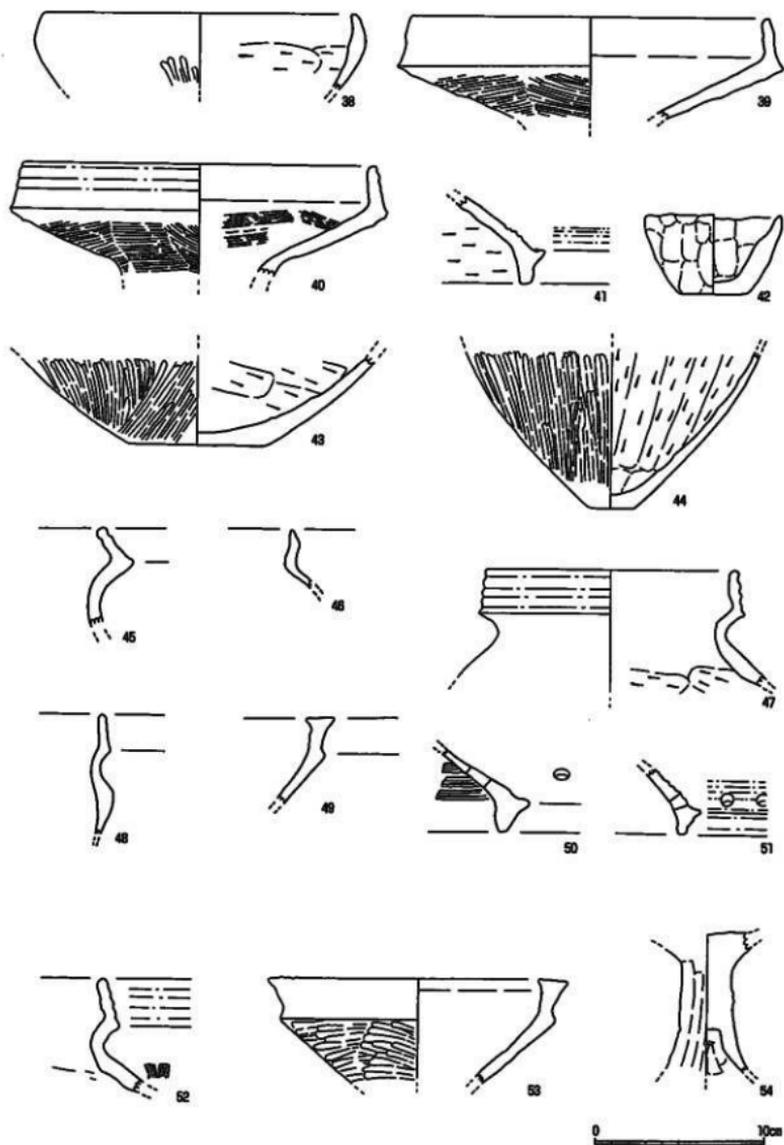
第13圖 出土遺物実測図1 (1 : 3)



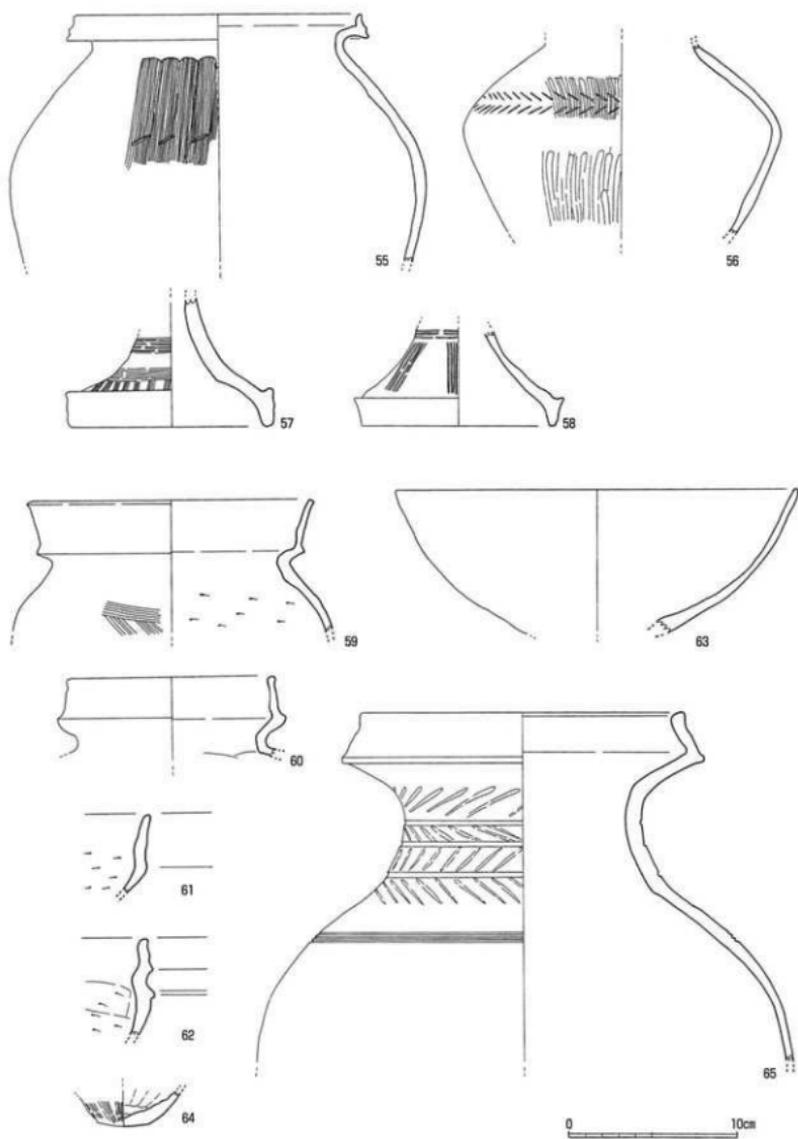
第14图 出土器物实测图2(1:3)



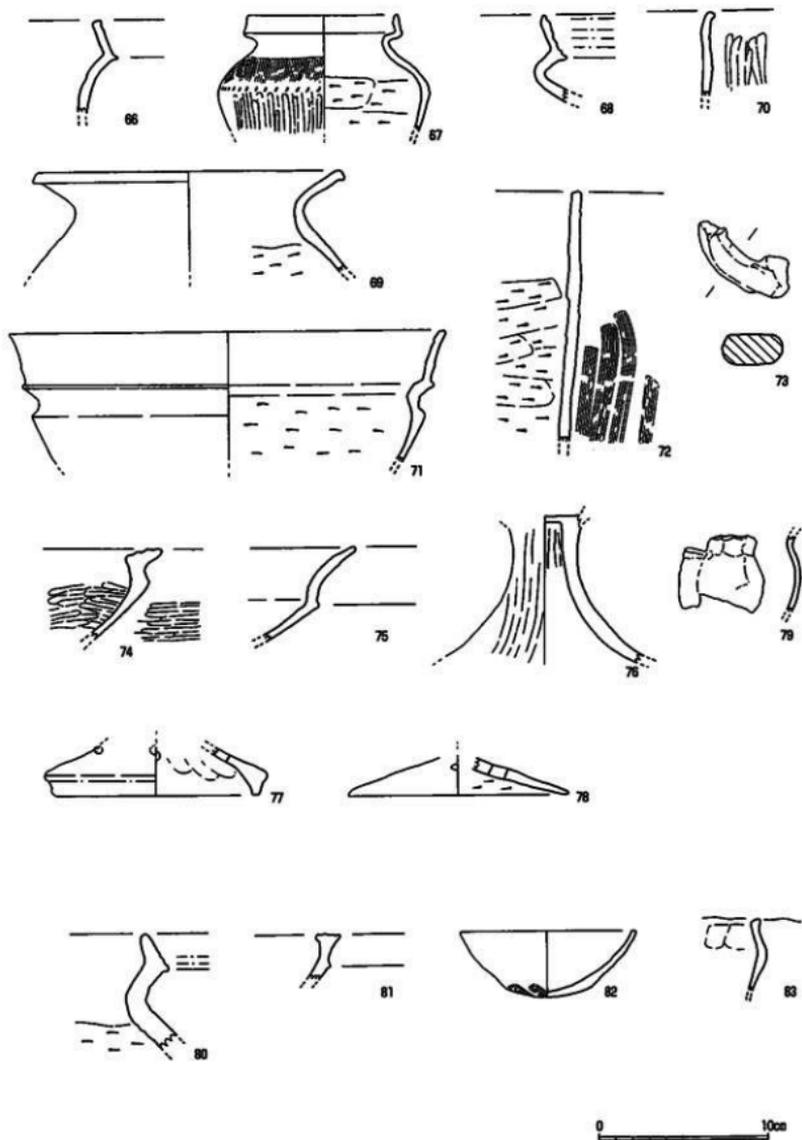
第15图 出土器物实测图3(1:3)



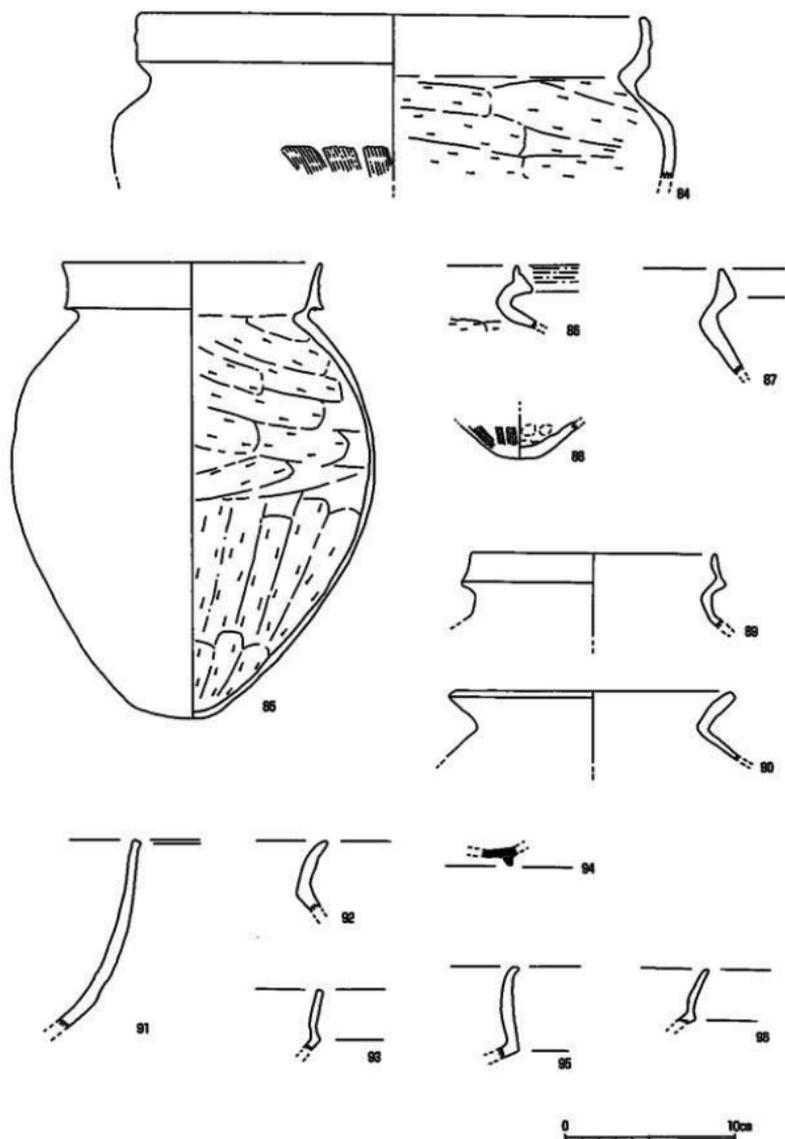
第16图 出土遗物实测图4(1:3)



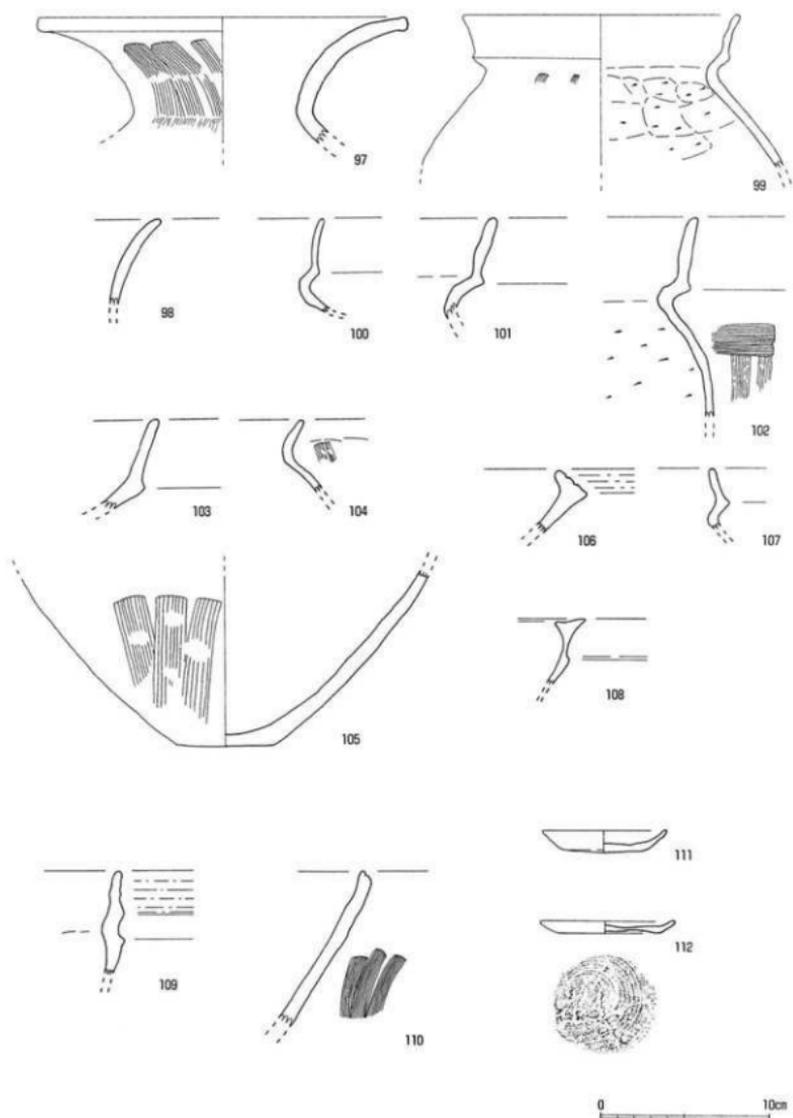
第17圖 出土遺物実測図5(1:3)



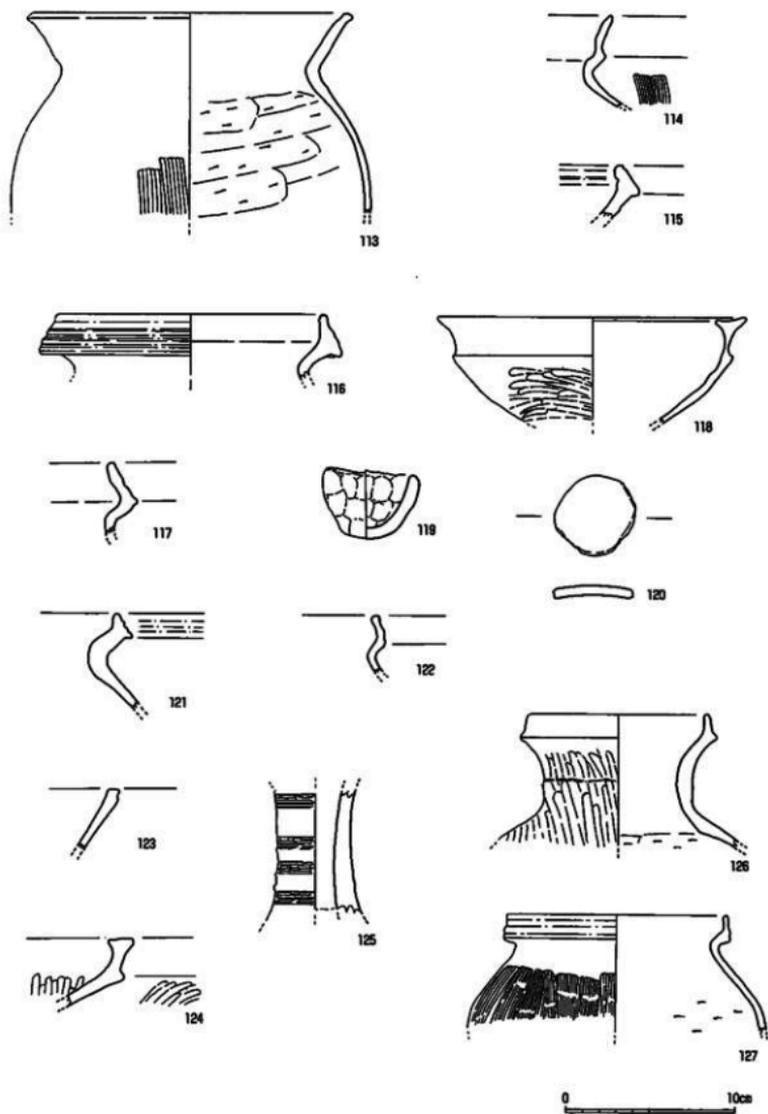
第18圖 出土遺物実測図6(1:3)



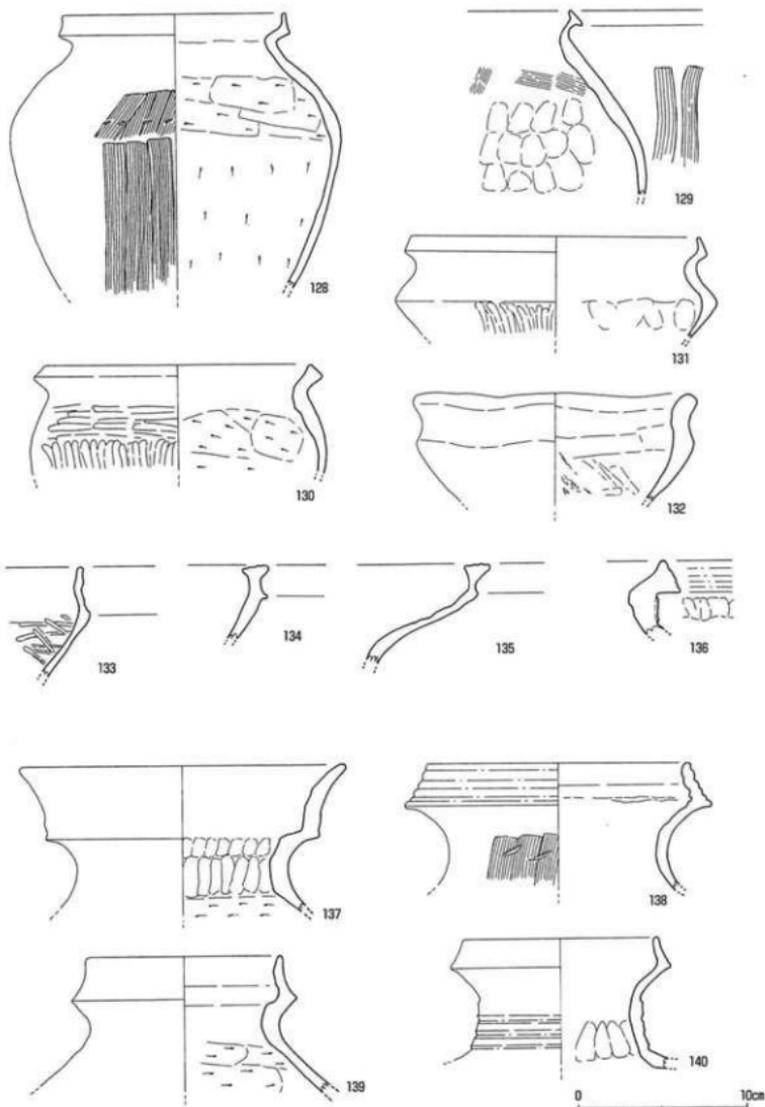
第19图 出土器物实测图7(1:3)



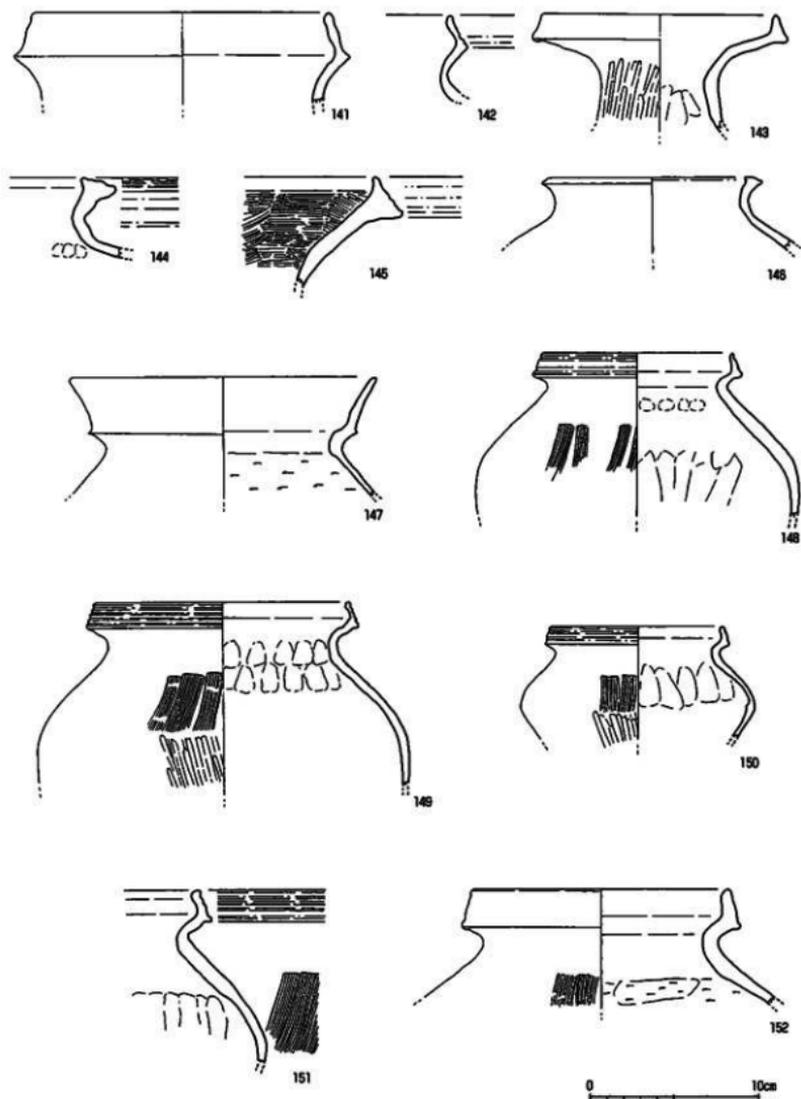
第20图 出土遺物実測図8(1:3)



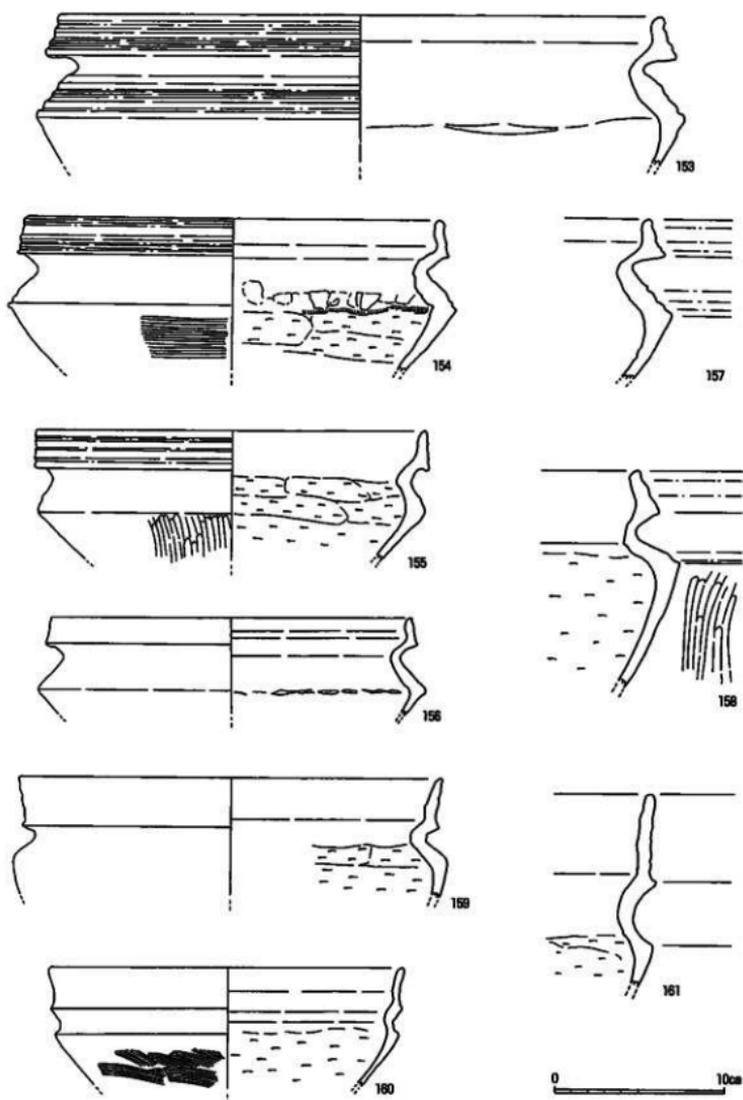
第21圖 出土遺物実測図9(1:3)



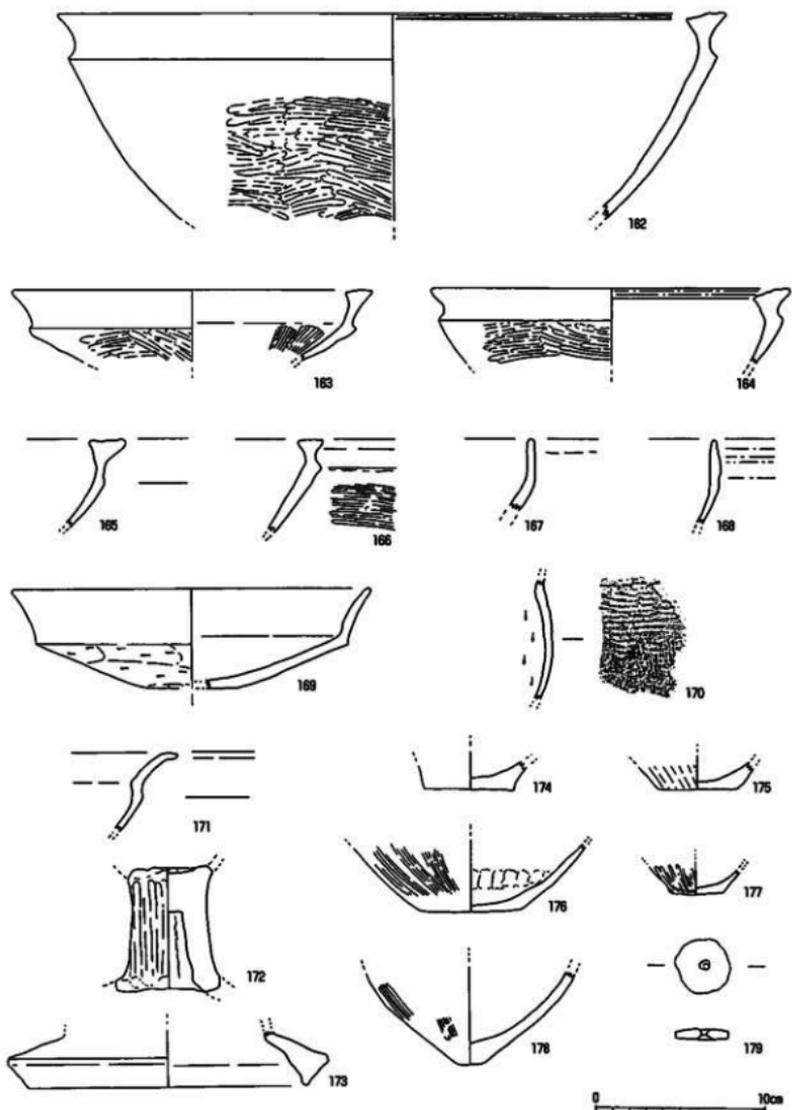
第22图 出土物実測図10(1:3)



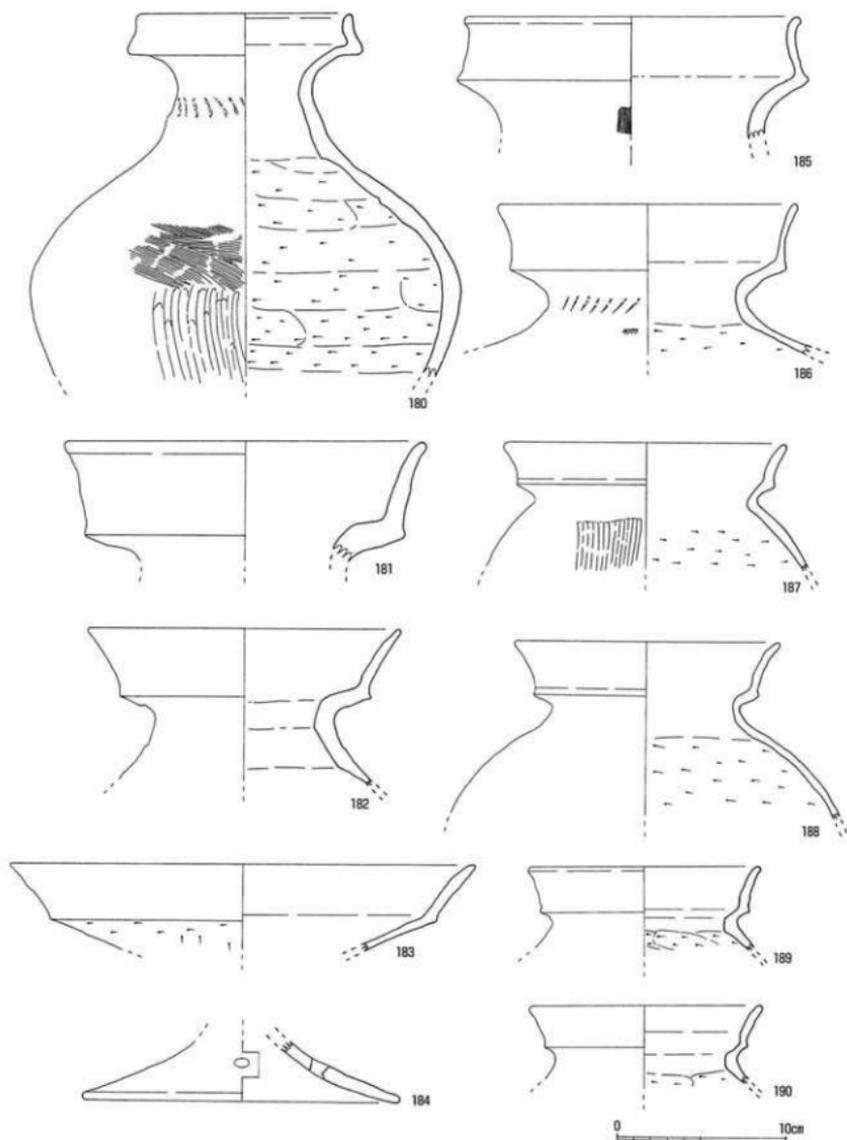
第23图 出土器物夹图II(1:3)



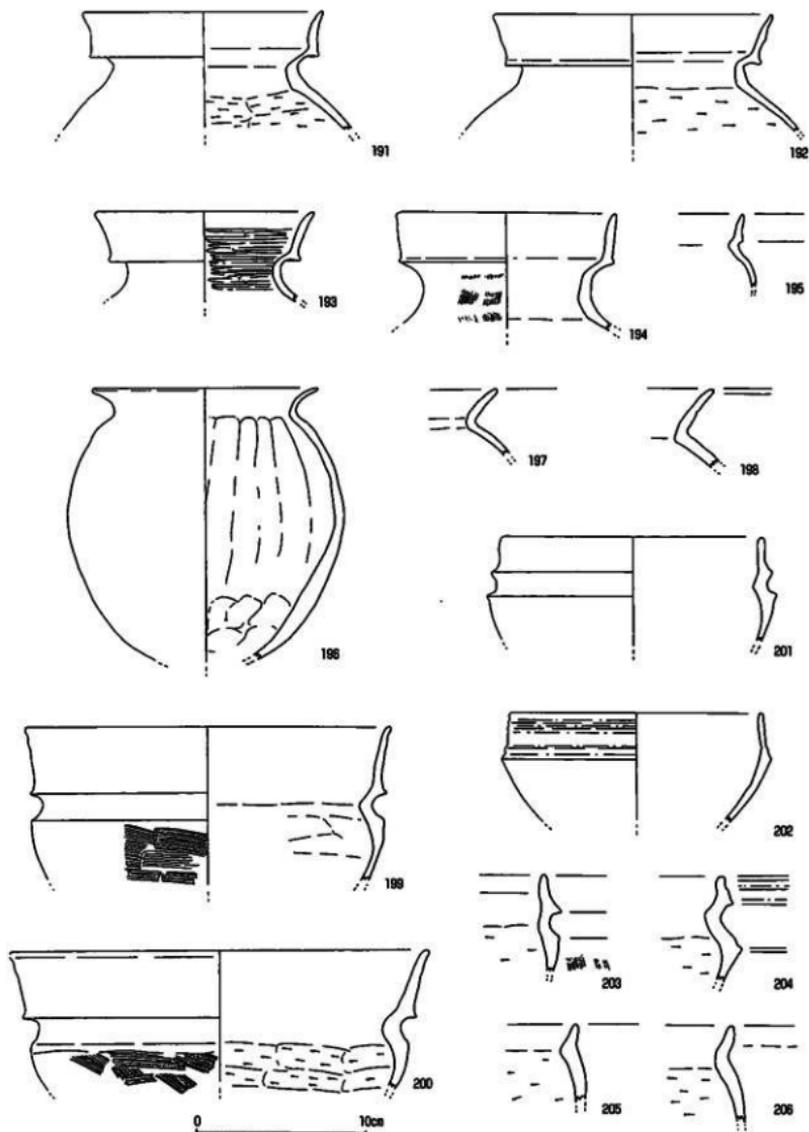
第24圖 出土遺物実測図12(1:3)



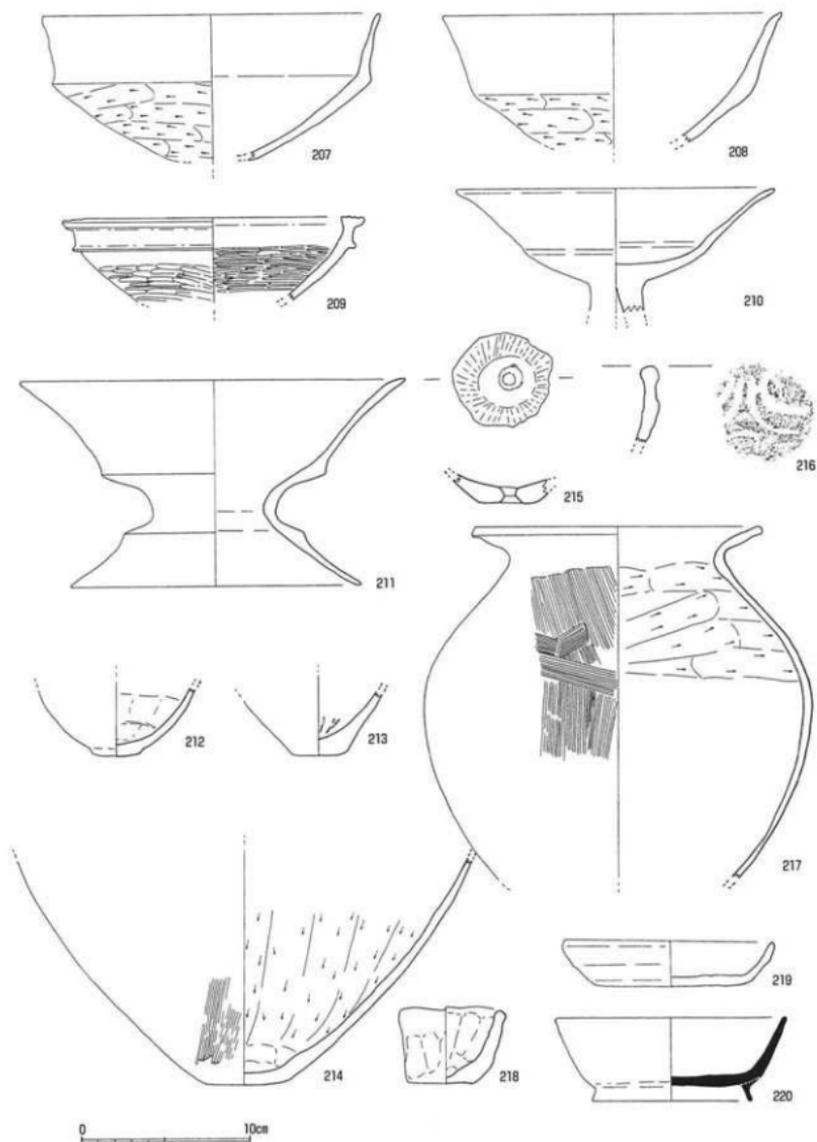
第25图 出土器物实例图13(1:3)



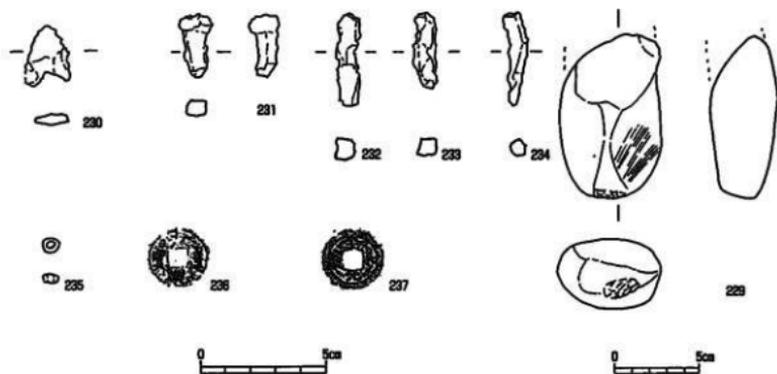
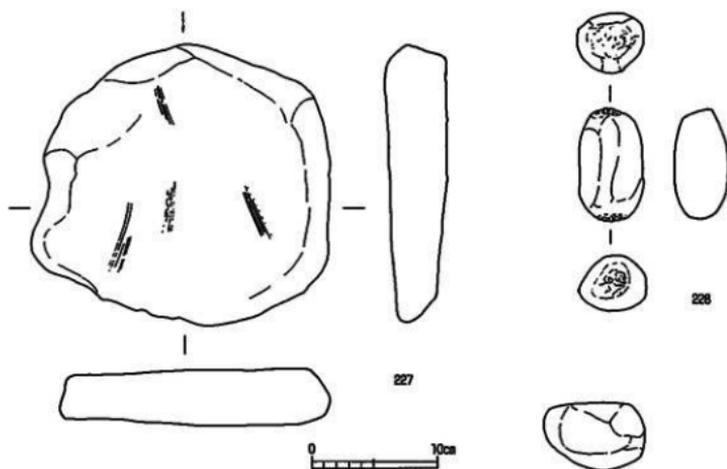
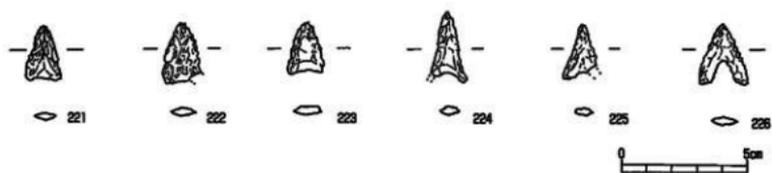
第26图 出土文物实测图14(1:3)



第27图 出土器物实测图15(1:3)



第28回 出土遺物実測図16(1:3)



第29图 出土文物实测图17(1:2, 1:3, 1:4)

第3表 曾川1号遺跡 (G~J地区) 出土遺物 (土器) 観察表

遺物番号	類別	種類 番号	口径	直径 (cm)			調査	色調 (外側)	胎土	備考
				高さ	最大径	底径				
SB11	弥生土器	1	甕	13.2	23.2	17.7	外底:ヨコナデ ハケ 内底:ヨコナデ ケズリ	褐色	細砂粒多含	
		2	甕	11.7	-	-	外底:ヨコナデ ハケ 内底:ヨコナデ ケズリ	褐色	細砂粒多含	
		3	甕	13.4	-	-	外底:ヨコナデ 内底:ケズリ	褐色	細砂粒多含	
		4	甕	-	-	-	外底:不明 内底:不明	褐色	細砂粒含	
		5	甕	-	-	-	外底:不明 内底:不明	褐色	細砂粒多含	胴部に粘付け発帯
		6	甕	-	-	-	外底:不明 内底:不明	褐色	砂粒多含	
		7	甕	-	-	-	外底:ヨコナデ 内底:ヨコナデ ケズリ	褐色	砂粒少含	
		8	甕	-	-	-	外底:不明 内底:不明	褐色	細砂粒含	
		9	甕	-	-	-	外底:不明 内底:不明	褐色	細砂粒含	口縁部に3本の浅い凹線
		10	甕	-	-	-	外底:ヨコナデ ハケ 内底:ヨコナデ ミヅキ	明褐色	粘土	
		11	甕	-	-	-	外底:不明 内底:不明	褐色	砂粒多含	矢形底
		12	甕	-	-	-	外底:ミヅキ 内底:ハラナデ	淡褐色	砂粒多含	外面にタタキ目
		13	甕	-	-	-	外底:ヨコナデ 内底:ヨコナデ	赤褐色	細砂粒多含	底部上底
		14	ミニチュア	6.9	1.2	-	外底:不明 内底:不明	褐色	細砂粒少含	
SB12	弥生土器	15	鉢	16.1	-	13.0	外底:ヨコナデ ミヅキ 内底:ヨコナデ ケズリ	淡褐色	砂粒多含	口縁部に3本の浅い凹線
		16	鉢	-	-	-	外底:ヨコナデ 内底:ヨコナデ 指頭磨色	褐色	砂粒少含	口縁部に3本の浅い凹線
		17	甕	-	-	-	外底:ヨコナデ ミヅキ 内底:ヨコナデ ナデ	茶褐色	粘土	口縁部に5本の浅い凹線
		18	甕	-	-	-	外底:不明 内底:ケズリ	淡褐色	砂粒多含	
		19	甕	-	-	-	外底:不明 内底:不明	褐色	砂粒含	
		20	甕	-	-	-	外底:ヨコナデ 内底:ヨコナデ	褐色	砂粒少含	口縁部に3本の浅い凹線
		21	高杯	-	-	-	外底:ヨコナデ ミヅキ 内底:ヨコナデ ミヅキ	褐色	細砂粒少含	口縁部平ら面に1本の浅い凹線
		22	高杯	-	-	-	外底:ヨコナデ 内底:ヨコナデ	淡褐色	砂粒少含	口縁有り
		23	甕	-	-	-	外底:ナデ 内底:不明	褐色	砂粒多含	
		24	甕	-	-	-	外底:ヘラ板工具による押痕 内底:指頭磨色	褐色	粘土	
SB13	弥生土器	25	甕	13.4	-	20.0	外底:ヨコナデ ハケ 内底:ヨコナデ ミヅキ	淡褐色	砂粒多含	
SB17	弥生土器	26	甕	11.2	-	-	外底:ヨコナデ 内底:ヨコナデ ナデ	褐色	細砂粒多含	口縁部縁文
		27	甕	11.0	10.3	13.1	外底:ヨコナデ ミヅキ 内底:ヨコナデ ケズリ	褐色	砂粒多含	
		28	甕	11.9	-	22.7	外底:ヨコナデ ハケ 内底:ヨコナデ ケズリ	淡褐色	細砂粒多含	胴部外面に刺突文
		29	甕	12.7	-	18.0	外底:ヨコナデ ハケ 内底:ヨコナデ ミヅキ	褐色	砂粒多含	
		30	甕	17.1	-	31.0	外底:ヨコナデ ハケ ナデ 内底:ヨコナデ ナデ ナデツケ	明褐色	細砂粒多含	口縁部外面に4本の浅い凹線 胴部外面に刺突文
		31	甕	8.3	-	10.8	外底:ヨコナデ ハケ ミヅキ 内底:ヨコナデ ケズリ	淡褐色	砂粒含	胴部外面に刺突文
		32	甕	13.1	-	-	外底:ヨコナデ ハケ 内底:ヨコナデ ナデ ケズリ	茶褐色	砂粒多含	
		33	甕	11.7	-	-	外底:ヨコナデ ハケ 内底:ヨコナデ ケズリ	淡褐色	砂粒多含	
		34	鉢	-	-	-	外底:ヨコナデ ハケ 内底:ヨコナデ ケズリ	淡褐色	砂粒多含	口縁部外面に墨具
		35	鉢	-	-	-	外底:不明 内底:不明	褐色	細砂粒含	
		36	鉢	22.6	-	22.6	外底:ヨコナデ ミヅキ 内底:ヨコナデ ミヅキ	褐色	砂粒多含	
		37	鉢	18.2	-	18.0	外底:ヨコナデ ミヅキ 内底:ヨコナデ ケズリ	褐色	砂粒少含	
		38	鉢	18.2	-	18.8	外底:ヨコナデ ミヅキ 内底:ヨコナデ ケズリ	褐色	砂粒多含	
		39	高杯	21.1	-	23.0	外底:ヨコナデ ミヅキ 内底:ヨコナデ ミヅキ	淡褐色	細砂粒多含	蓋付含
		40	高杯	21.6	-	22.3	外底:ヨコナデ ミヅキ 内底:ヨコナデ ミヅキ	褐色	細砂粒含	
		41	高杯	-	-	-	外底:不明 内底:不明	褐色	砂粒多含	胴部外面に浅い凹線
		42	ミニチュア	8.6	1.8	-	外底:指頭磨色 内底:指頭磨色	淡褐色	細砂粒少含	
43	甕	-	-	-	外底:ヨコナデ 内底:ケズリ	淡褐色	砂粒多含	平底		
44	甕	-	-	-	外底:ミヅキ 内底:ケズリ	淡褐色	砂粒多含	小型平底		
45	甕	-	-	-	外底:不明 内底:不明	茶褐色	砂粒含			
46	甕	-	-	-	外底:ヨコナデ 内底:ヨコナデ ナデ	褐色	細砂粒少含			

SA25	養生上蓋	47	貫	11.6	-	-	外面：不明 内面：ケズリ	淡緑褐色	砂粒多含	口縁部外面に1条の浅い凹線
		48	鉢	-	-	-	外面：不明 内面：不明	灰褐色	砂粒含	
		49	高杯	-	-	-	外面：不明 内面：不明	灰褐色	細砂粒含	
		50	高杯	-	-	-	外面：不明 内面：不明	灰褐色	砂粒多含	円孔あり
		51	高杯	-	-	-	外面：ハケテ 内面：不明	淡緑褐色	砂粒含	2個・1対の円孔あり
SA33	養生上蓋	52	貫	-	-	-	外面：ヨコナデ、ハケ 内面：ヨコナデ	灰褐色	砂粒多含	口縁部外面に4条の浅い凹線
		53	高杯	18.0	-	18.3	外面：ヨコナデ、ミガキ 内面：不明	黄褐色	砂粒多含	口縁部に3条の浅い凹線
		54	高杯	-	-	-	外面：ヘラ状工具によるナデ 内面：不明	明褐色	砂粒多含	
SA37	養生上蓋	55	貫	17.0	-	21.8	外面：ヨコナデ、ハケ 内面：ヨコナデ、ナデ	灰褐色	砂粒少含	胴部外面に黒斑あり、見取敷線文
		56	貫	-	-	-	外面：ヨコナデ、ミガキ 内面：不明	淡緑褐色	砂粒多含	胴部外面に線状刺突文
		57	高杯	-	-	-	外面：不明 内面：不明	黄褐色	砂粒多含	胴部外面に線状刺突文
SA38	養生上蓋	58	高杯	-	-	-	外面：不明 内面：不明	黄褐色	砂粒多含	胴部外面に線状刺突文
		59	貫	16.3	-	-	外面：ヨコナデ、ハケ 内面：ヨコナデ、ナデ、ケズリ	淡黄褐色	砂粒多含	
		60	貫	12.0	-	-	外面：不明 内面：ヨコナデ	暗赤褐色	砂粒含	
SA39	上蓋	61	鉢	-	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	淡灰褐色	砂粒多含	
		62	鉢	-	-	-	外面：ヨコナデ、ミガキ 内面：ヨコナデ、ケズリ	黄褐色	砂粒含	
		63	高杯	23.8	-	-	外面：ナデ、浅いヨコナデ 内面：不明	黄褐色	砂粒多含	
		64	底蓋	-	-	-	外面：ハケ 内面：ヘラ状工具によるナデ	黄褐色	砂粒少含	
SA39	養生上蓋	65	皿	19.1	-	32.1	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ヨコナデ、ナデ	淡黄褐色	砂粒含	胴部外面に4條にヘラ状工具の線状刺突文
		66	底	-	-	-	外面：不明 内面：不明	淡緑褐色	細砂粒含	
		67	貫	8.8	-	12.0	外面：ヨコナデ、ハケ、ミガキ 内面：ヨコナデ、ナデ、ケズリ	灰褐色	砂粒含	胴部外面に刺突文
	養生上蓋	68	貫	-	-	-	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ヨコナデ、ナデ	灰褐色	細砂粒少含	口縁部外面に4条の浅い凹線
		69	貫	18.0	-	-	外面：ヨコナデ、ケズリ 内面：ヨコナデ	淡黄褐色	砂粒含	
		70	鉢	-	-	-	外面：ヨコナデ、ミガキ 内面：ヨコナデ、ナデ	黄褐色	結核	
		71	鉢	23.8	-	23.8	外面：ヨコナデ、ハケ 内面：ヨコナデ、ケズリ	黄褐色	細砂粒多含	
	上蓋	72	皿	-	-	-	外面：ヨコナデ、ハケ 内面：ヨコナデ、ケズリ	淡緑褐色	砂粒多含	
		73	皿	-	-	-	外面：指頭押圧 内面：不明	灰褐色	砂粒少含	
	養生上蓋	74	高杯	-	-	-	外面：ヨコナデ、ミガキ 内面：ヨコナデ、ミガキ	淡緑褐色	結核	口縁部に3条の浅い凹線
75		高杯	-	-	-	外面：不明 内面：不明	黄褐色	砂粒含		
養生上蓋	上蓋	76	高杯	-	-	-	外面：ミガキ 内面：不明	赤褐色	細砂粒多含	
		77	高杯	-	-	-	外面：ナデ、ヨコナデ 内面：ナデ	黄褐色	結核	胴部面に円孔6か所?
	上蓋	78	高杯	-	-	-	外面：ナデ 内面：ナデ	淡緑褐色	細砂粒少含	胴部面に円孔3か所?
		79	ミニチュア	-	-	-	外面：指頭押圧 内面：指頭押圧	黄褐色	砂粒含	
SA39	養生上蓋	80	貫	-	-	-	外面：ヨコナデ、ケズリ 内面：ヨコナデ	灰褐色	砂粒多含	
		81	高杯	-	-	-	外面：不明 内面：不明	淡緑褐色	砂粒含	口縁部に3条の浅い凹線
SA33	養生上蓋	82	鉢	10.3	1.1	-	外面：ハケ 内面：不明	淡緑褐色	細砂粒多含	
		83	ミニチュア	-	-	-	外面：指頭押圧 内面：指頭押圧	黄褐色	細砂粒少含	
		84	貫	28.8	-	33.3	外面：ヨコナデ、ケズリ 内面：ヨコナデ	淡灰褐色	砂粒含	
		85	貫	13.1	27.1	21.6	外面：ヨコナデ、ハケ 内面：ヨコナデ、ナデ、ケズリ	淡緑褐色	砂粒多含	胴部外面に線状刺突文
		86	貫	-	-	-	外面：不明 内面：不明	淡緑褐色	砂粒多含	口縁部外面に4条の浅い凹線
SA36	養生上蓋	87	貫	-	-	-	外面：ヨコナデ、ナデ、ケズリ 内面：ヨコナデ	黄褐色	砂粒多含	
		88	底蓋	-	-	-	外面：ハケ、ナデ 内面：指頭押圧	黄褐色	細砂粒少含	
		89	貫	11.1	-	-	外面：不明 内面：不明	淡黄褐色	細砂粒含	
SA36	上蓋	90	貫	16.1	-	-	外面：ヨコナデ、ハケ 内面：ヨコナデ	灰褐色	砂粒含	
		91	鉢	-	-	-	外面：ナデ 内面：ナデ	淡黄褐色	結核	
SD18	上蓋	92	貫	-	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	灰褐色	砂粒少含	
		93	貫	-	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	黄褐色	細砂粒含	
SA09	取手	94	杯	-	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ロクロナデ	灰褐色	結核	高台付

SK70	I.師器	95	黄	-	-	-	外面：本明 内面：本明	淡緑褐色	砂状多含	
		96	黄	-	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	黄褐色	砂状含	
SK71	I.師器	97	赤	21.9	-	-	外面：ヨコナデ 内面：本明	黄褐色	砂状多含	
		98	赤	-	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	黄褐色	砂状少含	
	弥生土器	99	黄	16.5	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	淡緑褐色	砂状多含	
		100	黄	-	-	-	外面：本明 内面：本明	赤色	砂状少含	
		101	黄	-	-	-	外面：本明 内面：ヨコナデ	淡緑褐色	砂状多含	
		102	黄	-	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	赤色	砂状多含	
		103	黄	-	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	黄褐色	砂状少含	
	I.師器	104	黄	-	-	-	外面：ケズリ 内面：本明	灰白色	砂状少含	
弥生土器	105	黄褐色	-	-	-	外面：ハケ、ナデ 内面：本明	淡褐色	砂状含		
SK81	弥生土器	106	黄	-	-	-	外面：本明 内面：本明	淡緑褐色	細砂状少含	内外面に朱塗り痕跡 口縁部外面に凹線
		107	黄赤	-	-	-	外面：本明 内面：ヨコナデ	淡緑褐色	細砂状少含	
		108	黄赤	-	-	-	外面：本明 内面：ヨコナデ	黄褐色	結核	
		109	赤	-	-	-	外面：本明 内面：本明	黄褐色	細砂状少含	口縁部外面に凹線
SK81	原始土器	110	赤	-	-	-	外面：ヨコナデ、ハケ 内面：本明	淡灰褐色	細砂状少含	
	I.師器土器	111	黒	7.5	1.1	-	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	淡茶褐色	結核	底部回転ヘラ切り
112		黒	8.0	0.7	-	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	黄褐色	結核	底部回転ヘラ切り	
SK87	I.師器	113	黄	18.8	-	-	外面：ヨコナデ、ナデ、ハケ 内面：ヨコナデ	黄褐色	細砂状含	
	I.師器?	114	黄	-	-	-	外面：ヨコナデ、ハケ 内面：ヨコナデ	黄褐色	細砂状少含	
SK89	弥生土器	115	赤?	-	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	黄褐色	砂状含	
		116	黄	13.7	-	-	外面：本明 内面：本明	黄褐色	砂状多含	口縁部外面に3本の浅い凹線
		117	黄	-	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	黄褐色	結核	
		118	赤	18.3	-	18.6	外面：ミガキ 内面：本明	淡黄褐色	砂状含	
		119	ミグニヤア	3.0	4.2	-	外面：表面修正 内面：表面修正	黒褐色	砂状含	
		120	内面に土製品	付 L.8	-	-	外面：本明 内面：本明	黄褐色	砂状含	土製品用品
SK97	弥生土器	121	黄	-	-	-	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ヨコナデ	黄褐色	結核	口縁部外面に凹線
		122	黄	-	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	黄褐色	結核	
		123	赤?	-	-	-	外面：ナデ 内面：ナデ	黄褐色	砂状含	
		124	黄赤	-	-	-	外面：ヨコナデ、ミガキ 内面：ヨコナデ、ミガキ	淡黄褐色	砂状含	
		125	黄赤	-	-	-	外面：本明 内面：本明	淡黄褐色	細砂状少含	頸部に磨蝕状痕
		126	赤	18.0	-	-	外面：ヨコナデ、ミガキ 内面：ヨコナデ、ナデ	暗黄褐色	砂状含	
SK98	弥生土器	127	黄	13.0	-	-	外面：ヨコナデ、ハケ 内面：ヨコナデ、ナデ、ケズリ	黄褐色	砂状多含	
		128	黄	13.0	-	19.3	外面：ヨコナデ、ナデ、ケズリ 内面：ヨコナデ、ナデ、ケズリ	黄褐色	砂状多含	頸部外面に刺突文
		129	黄	-	-	-	外面：ヨコナデ、ハケ 内面：ヨコナデ、ハケ、表面調整	黄褐色	砂状少含	
		130	黄	13.5	-	17.6	外面：ヨコナデ、ミガキ 内面：ヨコナデ、ケズリ	淡黄褐色	砂状含	
		131	赤	17.1	-	19.3	外面：ヨコナデ、ミガキ 内面：ヨコナデ、ミガキ	黄褐色	細砂状含	
		132	赤	13.5	-	16.3	外面：ナデ 内面：ナデ、ケズリ	黄褐色	砂状多含	
		133	赤	-	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	黄褐色	結核	
		134	黄赤	-	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	黄褐色	細砂状少含	口縁部に3本の浅い凹線
		135	黄赤	-	-	-	外面：本明 内面：本明	黄褐色	砂状多含	口縁部に3本の浅い凹線
		136	黄	-	-	-	外面：本明 内面：本明	淡黄褐色	砂状多含	口縁部に4本の浅い凹線、底部に刺突文
SK19	弥生土器	137	赤	18.1	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、表面調整、ケズリ	淡黄褐色	砂状多含	
		138	赤	15.7	-	-	外面：ヨコナデ、ハケ 内面：ヨコナデ	黄褐色	細砂状含	口縁部に5本の浅い凹線
		139	赤	11.3	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、ケズリ	黄褐色	砂状多含	
		140	赤	11.3	-	-	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ヨコナデ、表面調整	黄褐色	細砂状含	底部外面に3本の凹線
		141	赤	17.3	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	黄褐色	砂状含	
		142	赤	-	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	淡黄褐色	結核	口縁部に4本の浅い凹線

M1 グリッド  
付道工器部

養生土留	143	杓	13.8	-	-	外周: ヨコナデ、ミガキ 内周: 絞リ目	茶褐色	砂粒含	
	144	杓	-	-	-	外周: ヨコナデ 内周: ヨコナデ 附道押圧	茶褐色	細砂粒多含	口縁部に3本の浅い凹線
	145	杓	-	-	-	外周: ヨコナデ 内周: ヨコナデ、ミガキ	茶褐色	砂粒含	口縁部に3本の浅い凹線
	146	杓	11.8	-	-	外周: 不明 内周: 不明	褐色	細砂粒含	
	147	杓	15.0	-	-	外周: 不明 内周: ケズリ	褐色	砂粒多含	
	148	杓	11.2	-	-	外周: ハケ 内周: 附道押圧、ケズリ	褐色	砂粒多含	口縁部に2本の浅い凹線
	149	杓	13.0	-	23.0	外周: ヨコナデ、ハケ、ミガキ 内周: ヨコナデ、附道押圧、ナデ	褐色	砂粒少含	口縁部に4本の凹線
	150	杓	16.0	-	11.0	外周: ヨコナデ、ハケ、ミガキ 内周: ヨコナデ、附道押圧、ケズリ	褐色褐色	結核	口縁部に2本の凹線
	151	杓	-	-	-	外周: ヨコナデ、ハケ 内周: ヨコナデ、ナデ、ケズリ	褐色	細砂粒含	口縁部に4本の浅い凹線
	152	杓	15.1	-	-	外周: ヨコナデ、ハケ 内周: ヨコナデ、ケズリ	褐色褐色	砂粒多含	
	153	鉢	33.7	-	38.7	外周: ヨコナデ、ナデ 内周: 不明	濃褐色	砂粒多含	口縁部に3本の浅い凹線
	154	鉢	21.3	-	38.7	外周: ヨコナデ、ハケ 内周: ヨコナデ、附道押圧、ケズリ	濃褐色	砂粒多含	口縁部に3本の浅い凹線
	155	鉢	23.7	-	33.7	外周: ヨコナデ、ミガキ 内周: ヨコナデ、ケズリ	褐色	砂粒多含	口縁部に3本の浅い凹線
	156	鉢	21.1	-	23.7	外周: ヨコナデ 内周: ヨコナデ	褐色褐色	砂粒少含	
	157	鉢	-	-	-	外周: ヨコナデ 内周: 不明	褐色	砂粒多含	口縁部に3本の浅い凹線
	158	鉢	-	-	-	外周: ヨコナデ、ミガキ 内周: ヨコナデ、ケズリ	濃褐色	砂粒多含	口縁部に3本の浅い凹線
	159	鉢	23.0	-	26.0	外周: ヨコナデ、ケズリ 内周: ヨコナデ、ケズリ	濃褐色	砂粒多含	
	160	鉢	21.0	-	26.5	外周: ヨコナデ、ハケ 内周: ヨコナデ、ケズリ	濃茶褐色	細砂粒多含	
	161	鉢	-	-	-	外周: ヨコナデ 内周: ヨコナデ、ケズリ	褐色	砂粒多含	
162	鉢	38.8	-	-	外周: ヨコナデ、ミガキ 内周: ヨコナデ	褐色	砂粒多含	口縁部に3本の凹線	
163	鉢	21.5	-	-	外周: ヨコナデ、ミガキ 内周: ヨコナデ、ハケ	濃褐色	細砂粒含	口縁部に4本の浅い凹線	
164	鉢	21.5	-	-	外周: ミガキ 内周: ヨコナデ	濃褐色	砂粒少含	口縁部に3本の浅い凹線	
165	鉢	-	-	-	外周: ヨコナデ、ミガキ 内周: ヨコナデ、ミガキ	褐色	細砂粒含	口縁部に2本の浅い凹線	
166	鉢	-	-	-	外周: ヨコナデ、ミガキ 内周: ヨコナデ、ミガキ	濃褐色	砂粒少含	口縁部に3本の浅い凹線	
167	筒	-	-	-	外周: ヨコナデ 内周: ヨコナデ	茶褐色	砂粒少含		
168	筒	-	-	-	外周: 不明 内周: 不明	濃褐色	細砂粒含		
上留部	169	筒	21.3	6.0	-	外周: ケズリ 内周: 不明	濃褐色	砂粒多含	
養生土留	170	筒	-	-	-	外周: ナデ、ハケ 内周: ナデ、ケズリ	褐色褐色	砂粒含	
上留部	171	高杯	-	-	-	外周: 不明 内周: 不明	濃褐色	砂粒多含	
養生土留	172	高杯	-	-	-	外周: ミガキ? 内周: 絞リ目	褐色	砂粒多含	
	173	高杯	-	-	-	外周: ヨコナデ 内周: ヨコナデ	褐色	砂粒含	
	174	底部	-	-	-	外周: 不明 内周: 不明	濃黄褐色	細砂粒多含	
	175	底部	-	-	-	外周: ミガキ 内周: ナデ	茶褐色	結核	
	176	底部	-	-	-	外周: ハケ、ナデ 内周: 附道押圧	濃褐色	細砂粒少含	
	177	底部	-	-	-	外周: ミガキ、ナデ 内周: ナデ	濃黄褐色	結核	
	178	底部	-	-	-	外周: ハケ 内周: 不明	茶褐色	砂粒多含	
上製品	179	給餌車?	附 3.2	-	-	外周: 不明 内周: 不明	褐色	細砂粒含	穿孔
養生土留	180	杓	12.3	-	23.7	外周: ヨコナデ、ナデ、ハケ、ミガキ 内周: ヨコナデ、ナデ、ケズリ	濃褐色	砂粒多含	側部外面に貝殻殻縁の刺突文
	181	杓	21.0	-	-	外周: ヨコナデ 内周: ヨコナデ	濃褐色	細砂粒含	
	182	杓	18.3	-	-	外周: ヨコナデ 内周: ヨコナデ	明褐色	砂粒含	
	183	鉢	27.7	-	-	外周: ヨコナデ、ケズリ 内周: ヨコナデ	褐色	細砂粒多含	
	184	高杯	-	-	-	外周: 不明 内周: 不明	濃褐色	細砂粒多含	凹孔あり
	185	杓	19.7	-	-	外周: ヨコナデ、ハケ 内周: ヨコナデ	濃褐色	細砂粒含	
養生土留	186	杓	17.7	-	-	外周: ハケ 内周: ケズリ	濃褐色	砂粒含	側部外面にへう状工具の刺突文
	187	杓	16.3	-	-	外周: ヨコナデ、ハケ 内周: ヨコナデ、ケズリ	濃褐色	砂粒含	
	188	杓	13.7	-	-	外周: ヨコナデ 内周: ヨコナデ、ケズリ	明褐色	砂粒多含	
	189	杓	13.7	-	-	外周: ヨコナデ 内周: ヨコナデ、ケズリ	褐色	砂粒含	
	190	杓	13.3	-	-	外周: ヨコナデ 内周: ヨコナデ、ケズリ	濃褐色	砂粒少含	

K1クワッド  
付添上脚部

191	袋	11.3	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	ケズリ	炭粉褐色	砂状多含	
192	袋	16.8	-	-	外面：不明 内面：ケズリ		炭粉褐色	砂状多含	
193	袋	12.6	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	ミガキ	褐色	細砂状多含	
194	袋	12.7	-	-	外面：ハケ 内面：不明		炭粉褐色	細砂状少含	
195	袋	-	-	-	外面：不明 内面：不明		炭粉褐色	砂状少含	
196	袋	13.2	-	16.8	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	脂質ナデ、脂質存在	明褐色	細砂状少含	
197	袋	-	-	-	外面：不明 内面：不明		褐色	砂状少含	
198	袋	-	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	タタキ	褐色	砂状少含	
199	鉢	21.7	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	ハケ	茶褐色	細砂状多含	
200	鉢	21.8	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	ケズリ	褐色	砂状	
201	鉢	15.2	-	-	外面：不明 内面：不明		炭粉褐色	細砂状多含	
202	鉢	11.8	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	ナデ	褐色	細砂状	
203	鉢	-	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	ハケ	茶褐色	細砂状	
204	鉢	-	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	ナデ	炭粉褐色	細砂状	
205	鉢	-	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	ナデ	炭粉褐色	砂状	
206	鉢	-	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ケズリ	ミガキ	炭粉褐色	砂状	
207	鉢	20.6	-	-	外面：ケズリ 内面：不明		炭粉褐色	砂状	
208	鉢	20.6	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	ケズリ	炭粉褐色	砂状	
209	高杯	18.9	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	ミガキ	炭粉褐色	細砂状少含	口縁部平位置に3本の浅い凹線
210	高杯	18.8	-	-	外面：ヨコナデ 内面：不明		炭粉褐色	砂状多含	
211	舞台	22.8	12.1	(底径)17.2	外面：不明 内面：不明		炭粉褐色	砂状	
212	底版	-	-	-	外面：ナデ 内面：ハケナデ		炭粉褐色	細砂状多含	
213	底版	-	-	-	外面：不明 内面：不明		褐色	細砂状多含	
214	底版	-	-	-	外面：ハケ 内面：ケズリ		褐色	砂状多含	
215	底版	-	-	-	外面：ミガキ、ナデ 内面：不明		炭粉褐色	砂状多含	穿孔
216	鉢	-	-	-	外面：ナデ 内面：ナデ		茶褐色	砂状多含	外面縦文 太形比類
217	袋	16.8	-	23.2	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	ハケ	茶褐色	砂状	
218	ミニチュア	5.8	1.6	-	外面：脂質存在 内面：不明		褐色	砂状多含	
219	土師器土器	12.1	2.8	-	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ		褐色	結核	底面凹陥糸切り
220	杯	13.7	3.0	-	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ		炭粉褐色	砂状少含	底面凹陥へう切り

南西区出土

## VI まとめ

今回の発掘調査を実施した曾川1号遺跡G～J地区の位置は、平成14・15年度に調査を行ったA～D地区の北側にあたる。また、平成15年度に調査を行ったE地区からみると、G・H・J地区は南側、I地区は東側に位置する。

ここでは、検出遺構と出土遺物について若干の検討を加えまとめとする。

### 1 検出遺構について

G・H・J地区は、近世から現代において宅地やその付属施設として利用されていた部分が多く、遺構の残存状態が必ずしも良好でなかったが、弥生時代後期の竪穴住居跡2軒や掘立柱建物跡1棟、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土坑、中世後期の土坑1基、近世～現代の土坑と溝状遺構などを検出した。

このうち、竪穴住居跡2軒と掘立柱建物跡1棟はいずれもG地区で検出した。

S B 11は弥生時代後期後半の円形の竪穴住居跡で、大半が調査区外に広がることから、全体像は明確ではないものの、炭化材が残存していたことから焼失家屋と考えられる。また、住居跡の北側壁沿いが一段高くなっており、この部分がベッド状遺構となる可能性も考えられる。

S B 12も弥生時代後期後半の竪穴住居跡であるが、隅丸方形で主柱穴は2本であった。2本柱の住居についてはD地区検出のS B 3が同様な構造で、弥生時代後期後半に属しており、隅丸方形の住居の出現とともに2本柱の住居構造をとる住居が当該地域に出現したことを表している。ただしS B 3の場合、床面に赤変した部分があったことから工房的な機能を有していた可能性が考えられており、そのような機能を有する住居構造である可能性も考えられる。

このように平面形態の異なる住居跡が弥生時代後期後半に並存しており、古墳時代に一般化すると考えられている方形住居跡の出現過程を明らかにする資料となろう。さらに、S B 12からは石鏃とともに鉄鏃が出土しており、石器から鉄器への移行期の当該地域の様相を示す事例としても注目される。

なお、S B 13は弥生時代後期の掘立柱建物跡で、

- ①規 模：桁行3間(4.75m)×梁行2間(2.75～2.95m)である。
- ②柱 径：柱穴の底径は30～40cmで、柱径は細かったと推測される。
- ③柱間隔：不揃いである。
- ④棟持柱：片方の妻側にあり、側柱より掘方が浅い。

の内容を有していることから、通例の平屋建物であったと考えられる<sup>(1)</sup>。ただ、A～J地区内での弥生時代の掘立柱建物跡はこの1棟だけで、さらに、広島県内での弥生時代の掘立柱建物跡は、梁行1間のものが大半<sup>(2)</sup>で、S B 13は特異な例である。そうしたことからS B 13は、集落の中で特別な役割を担っていた建物といえよう。

一方、土坑は時期を明らかにできるものは少なかったが、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土器を出土するもの（SK13・17・25・45・47～49・51・52・55・56・68・70・71・81・87・89）のほか、古代の土器を出土するもの（SK69）、中世後期の土器を出土するもの（SK84）、近世～現代に作られた漆喰土坑（SK16・37・38）や埋桶土坑（SK15・29）も見られた。古墳時代初頭と考えられるSK48・49は、一般的なフラスコ状の貯蔵穴とは異なる形態をとるが、規模や、底面がほぼ水平な円形と楕円形で、壁面に垂直ないしやや内傾していることなどから、貯蔵穴と考えることが妥当と思われる。なお、時期は明確でないが、素掘りの井戸と考えられるSK26も検出した。

E・I地区では、遺物包含層が確認されたものの、遺構は確認されず、湧水が認められることから、この付近は遺跡の北側を西から東に流れる御調川の氾濫原になると考えられ、G・H・J地区が背後の牛の皮城跡から延びる低丘陵最先端にあたり、遺跡の北限である。

A～J地区を一つの集落と考えた場合、住居跡を検出したA～D地区とG地区との間のH・J地区では、住居に関連する遺構が確認されておらず、この間には未調査地もあるが、住居の集積度は決して高いものではない。ただ、時期ごとの住居跡をみると弥生時代後期から古墳時代初頭のものが多いとされており、この時期に集落としての最盛期を迎えたものと考えられよう。

## 2 出土遺物について

今回の調査において出土した遺物としては弥生時代及び古墳時代の土器類をはじめとし、現代までの遺物が多数出土した。ここでは弥生時代・古墳時代の土器類について記述する<sup>(3)</sup>。

出土した壺や甕類のうち、口縁部が直立ないし内傾する形態のものは、弥生時代後期後半に備後地域に広く分布するものである。しかし口縁部外面の凹縁はきわめて不明瞭なものである。また鉢については体部で強く屈曲する形態で、これもこの地域特有の形態のものである。

一方、弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけては、引き続き備後地域の固有のものが残るとともに、単純口縁の変などに特徴を有する庄内・布留式に分類される畿内系のものや、複合口縁に特徴を有する山陰系のものなどが含まれてくる。

このように本地域では地域特有の形態を有する土器群が継続して使用されるとともに、弥生時代末から古墳時代初頭にかけて他地域から流入する土器群が存在する。このような傾向は県内の他地域においても認められることであり、古墳時代の開始期とともに他地域の影響を広く受けたことが伺えよう。

## 註

- (1) 宮本長二郎「掘立柱建物の出現と展開」『奈良国立文化財研究所シンポジウム 先史日本の住居とその周辺』同成社 1998年
- (2) 埋蔵文化財研究会第29回研究会実行委員会事務局編「広島県」『弥生時代の掘立柱建物』資料（西日本・本州）編 1991年

※本書の「広島県」例には、梁行2間の掘立柱建物跡はない。

- (3) 本遺跡出土土器のうち、弥生時代後期後半ごろの詳細については次の報告に詳述されている。ただ、本報告書で土師器と記載したものの多くはその報告の庄内期に位置付けられている土器群に相当する。

伊藤実「備後南部の弥生後周土器における曾川1号遺跡SK1出土土器の位置」『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2) 曾川1号遺跡(A～D地区)』財団法人広島県教育事業団  
2006年



a G区調査前近景  
(南東から)



b G区調査前近景  
(北西から)



c G区調査後全景  
(南東から)

a H区調査後全景  
(南東から)



b I区調査後全景  
(南東から)



c J区調査後全景  
(南東から)



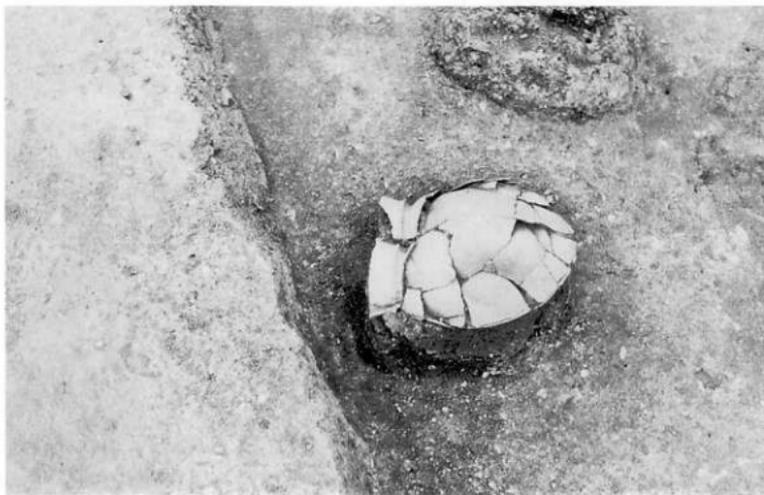
a SB11 炭化物検出状況  
(北から)



b SB11 床面検出状況  
(東から)



c SB11 遺物出土状況





a SB12 床面検出状況  
(北西から)



b SB12 床面検出状況  
(南東から)



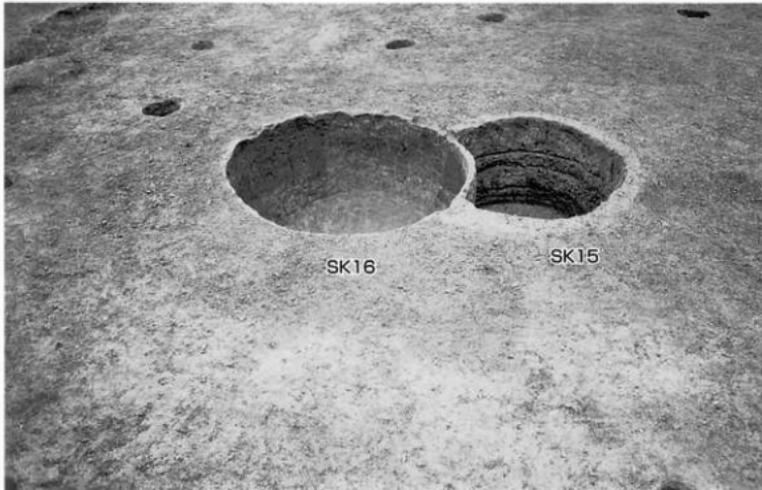
c SB13 検出状況  
(南西から)



a SK13・柱穴群検出状況  
(北から)

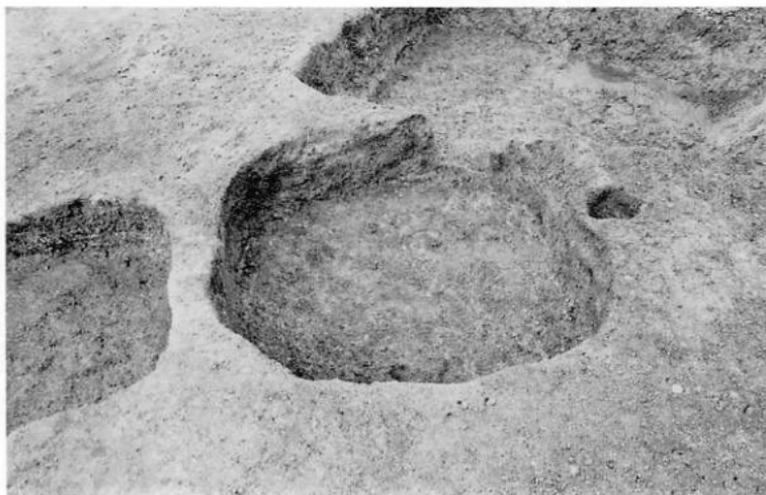


b SK13 遺物出土状況



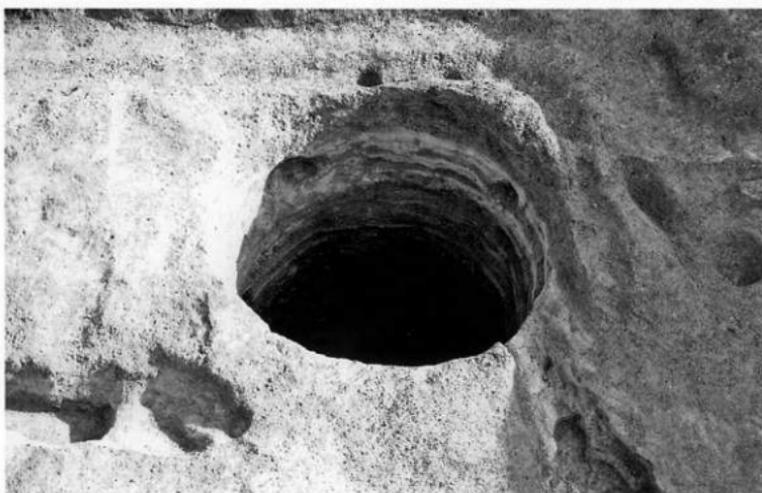
c SK15・16 完掘状況  
(南東から)

a SK17 遺物出土状況

b SK17 掘り下げ状況  
(北西から)c SK17 完掘状況  
(北西から)



a SK26・28～30完掘状況  
(南東から)



b SK26 完掘状況  
(南西から)



c SK29・30 完掘状況  
(南西から)



a SK37・38 完掘状況  
(北西から)



b SK37 完掘状況  
(東から)



c SK38 完掘状況  
(西から)

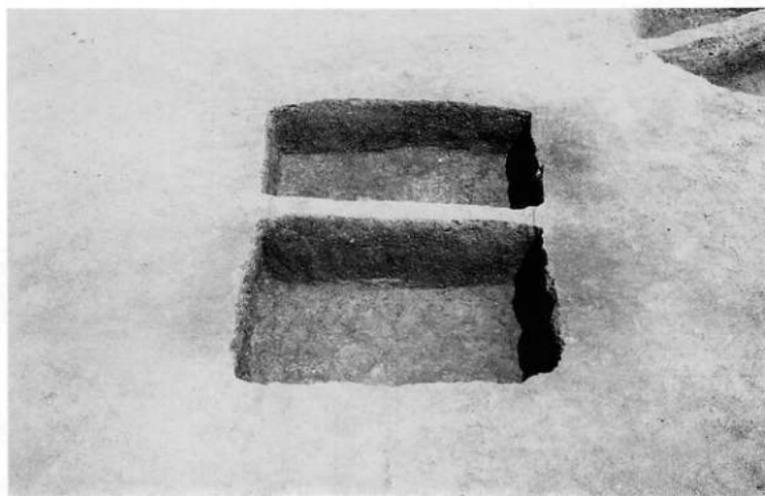
a SK25 完掘状況  
(北から)

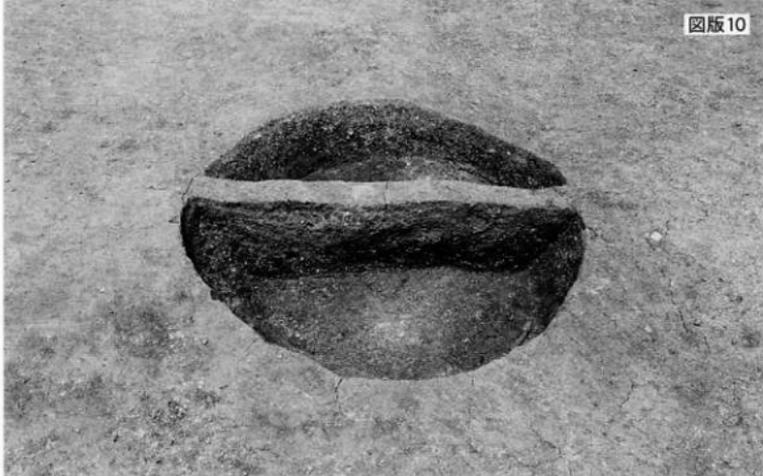


b SK45 完掘状況  
(北西から)



c SK50 完掘状況  
(南から)





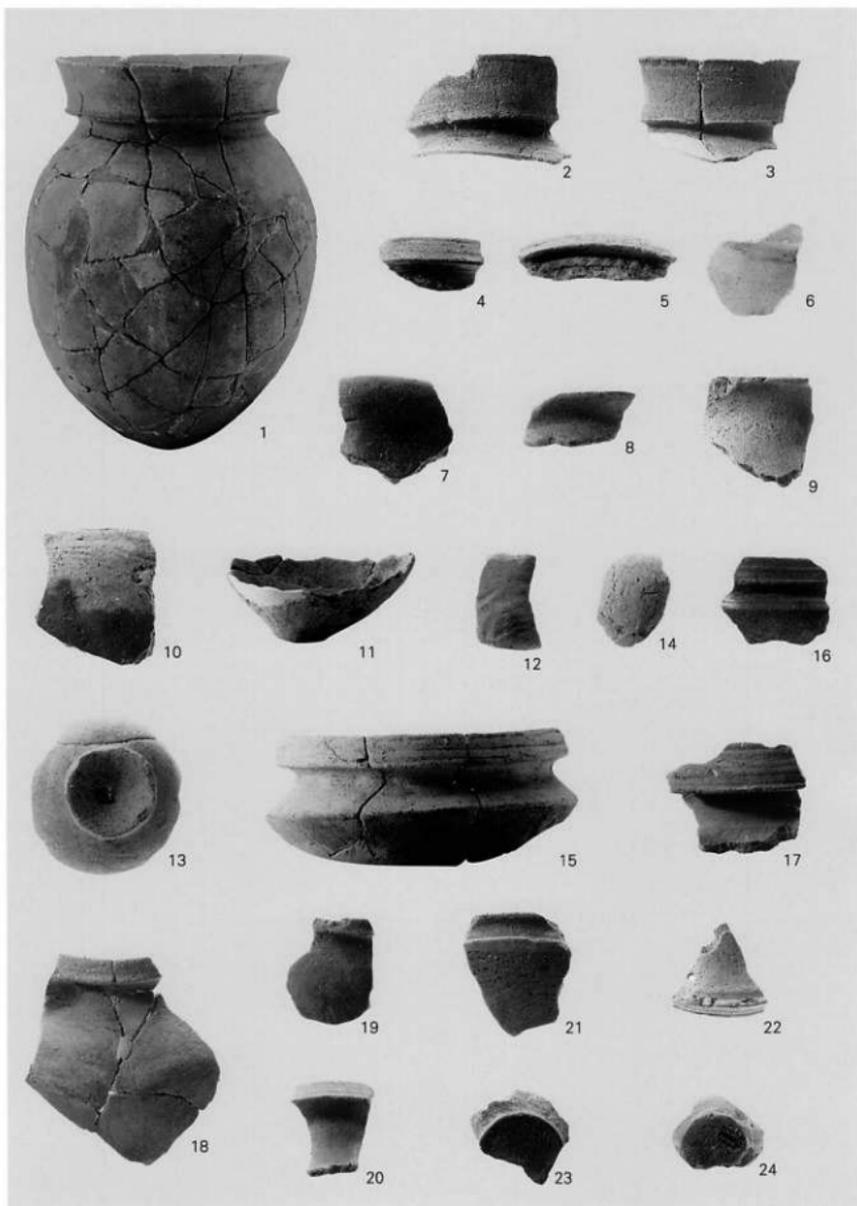
a SK51 完掘状況  
(南から)



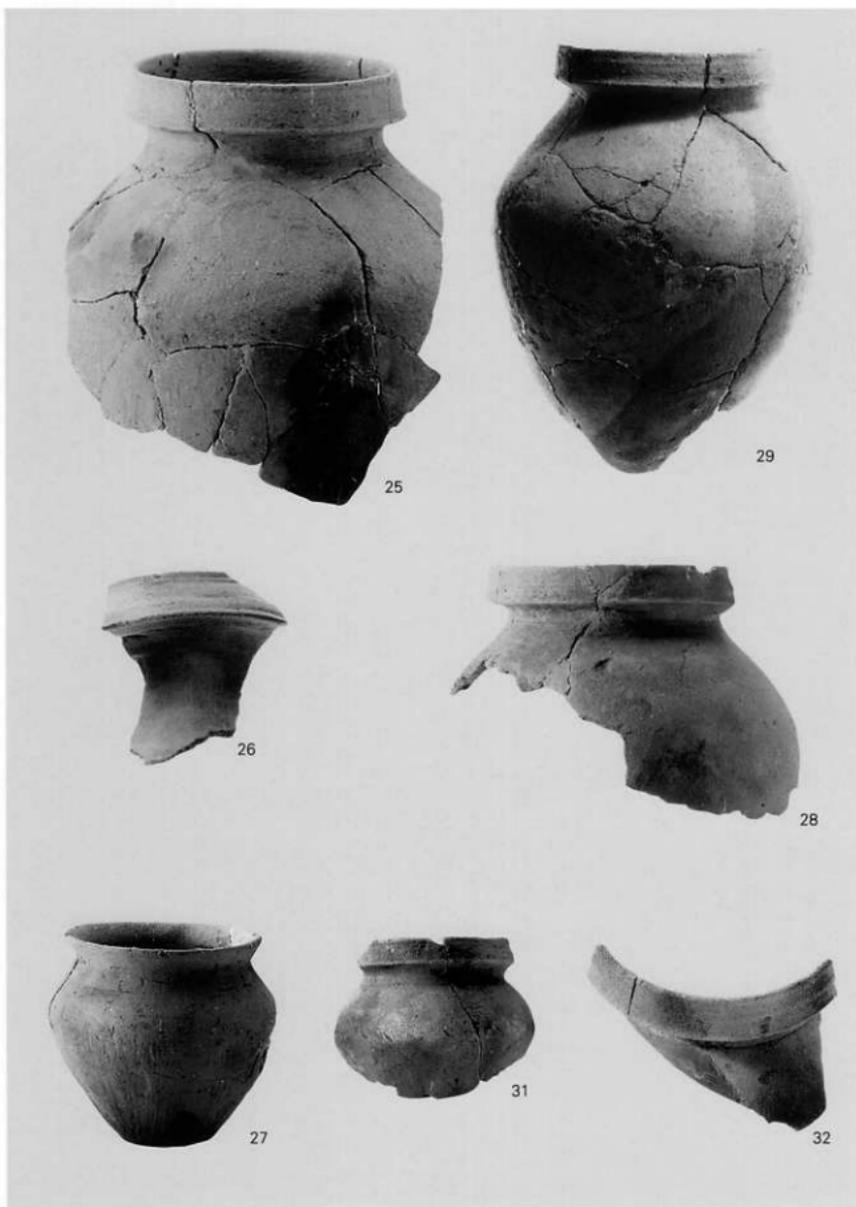
b SK71 遺物出土状況



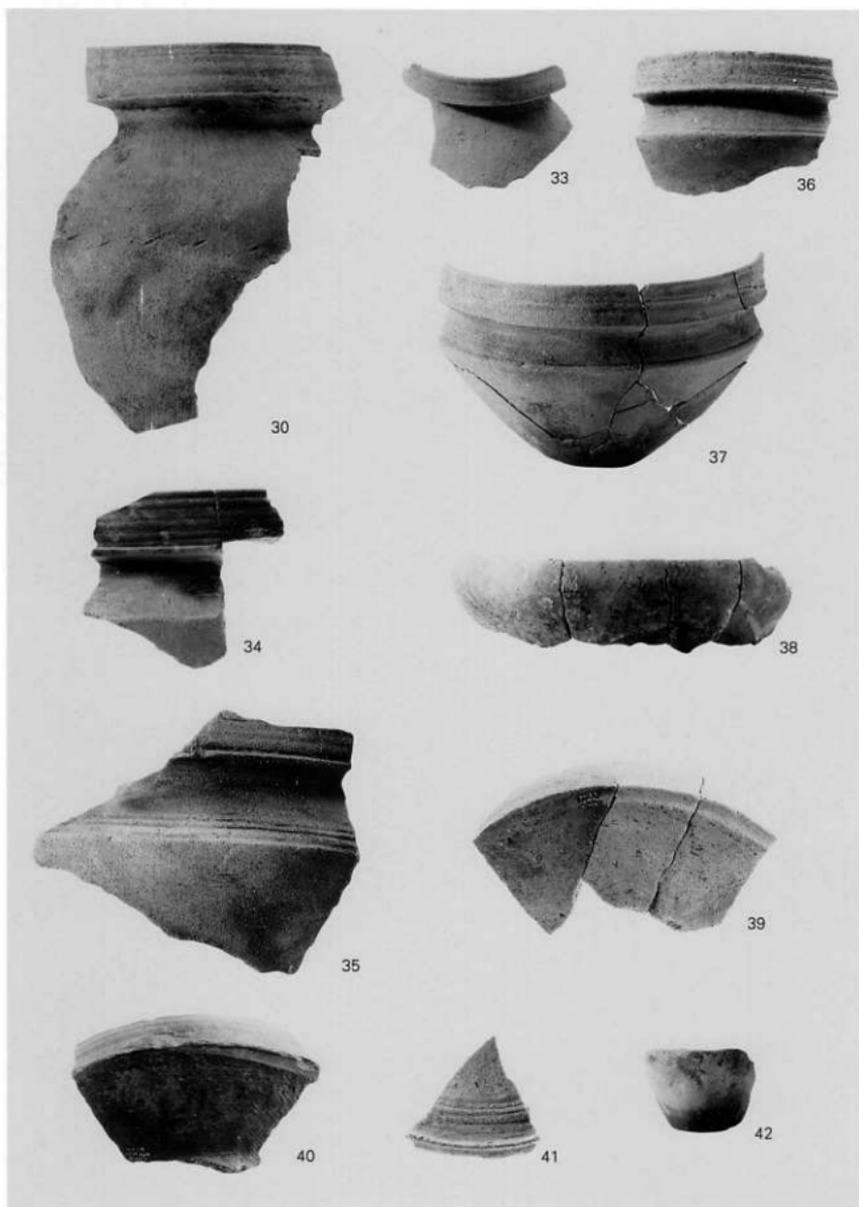
c SK87 遺物出土状況



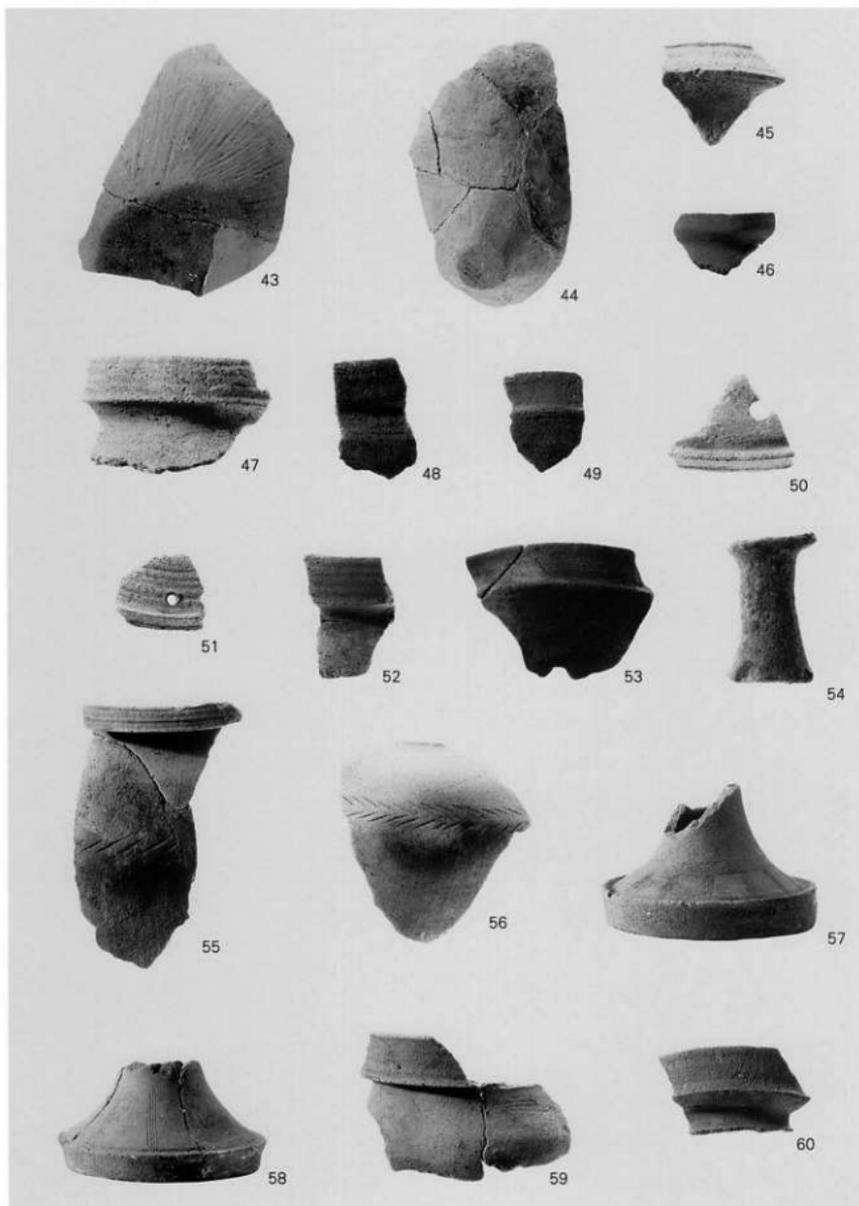
出土遺物 1



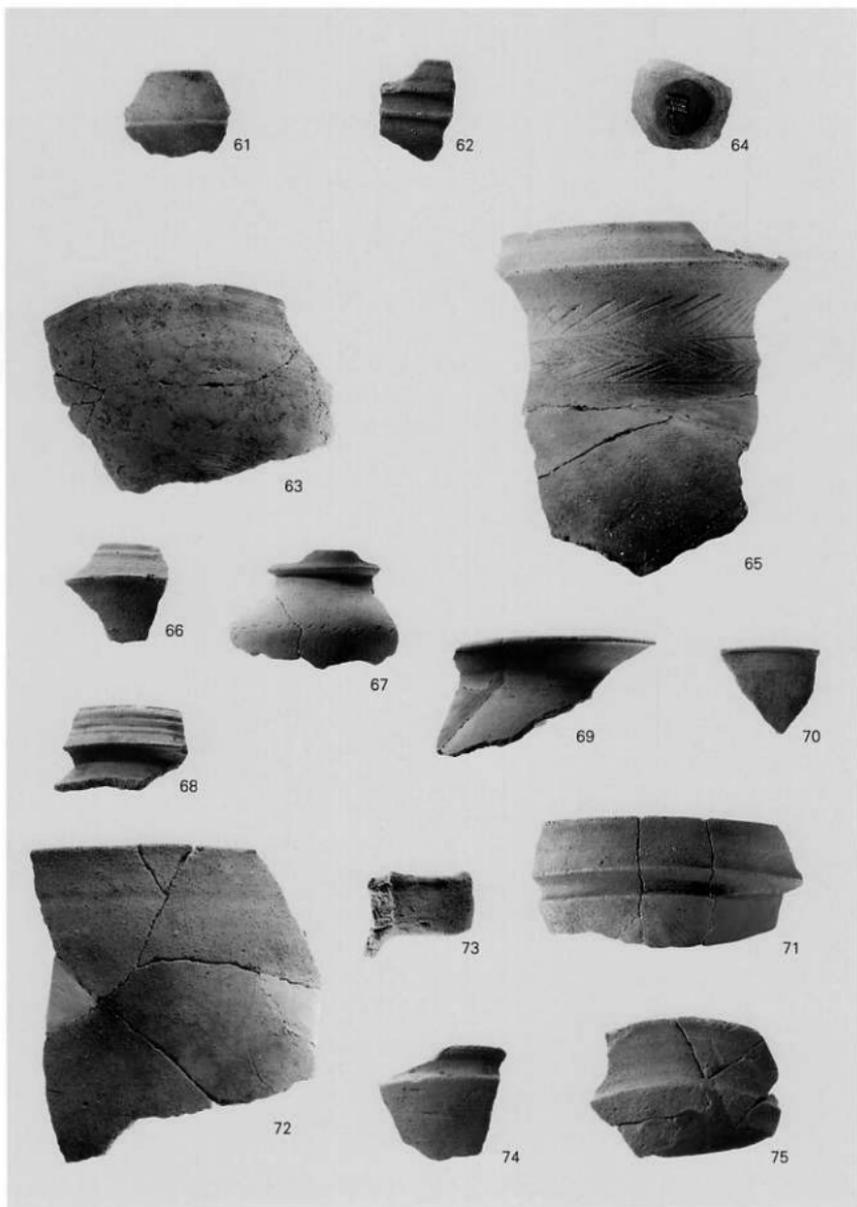
出土遺物 2



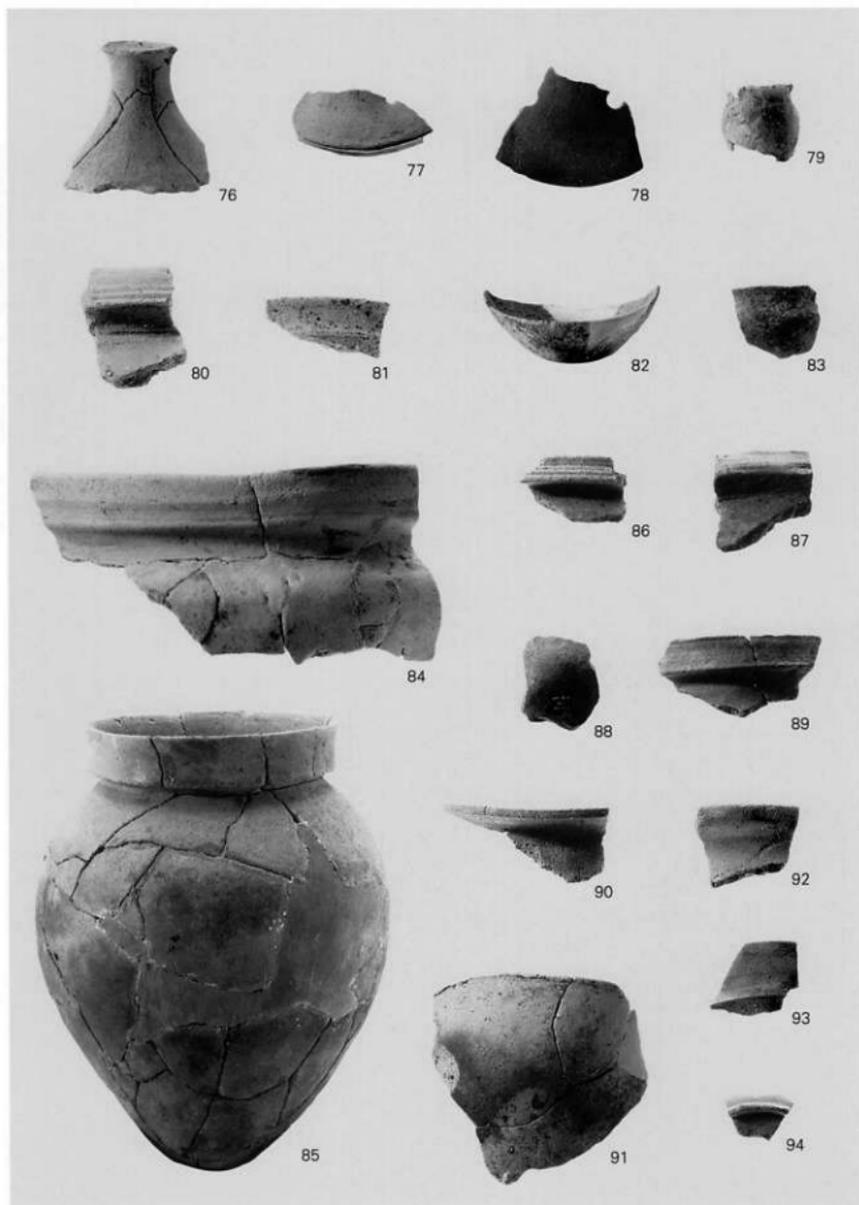
出土遺物 3



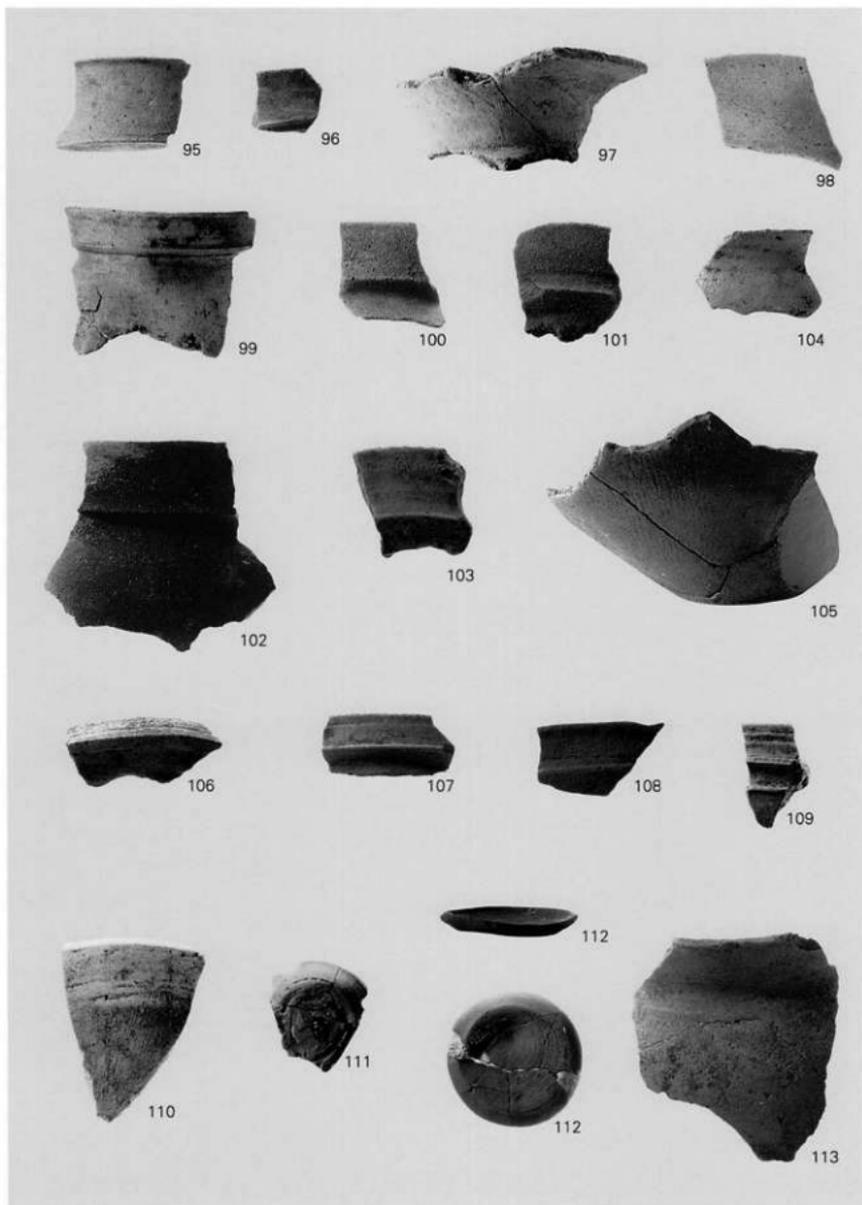
出土遺物 4



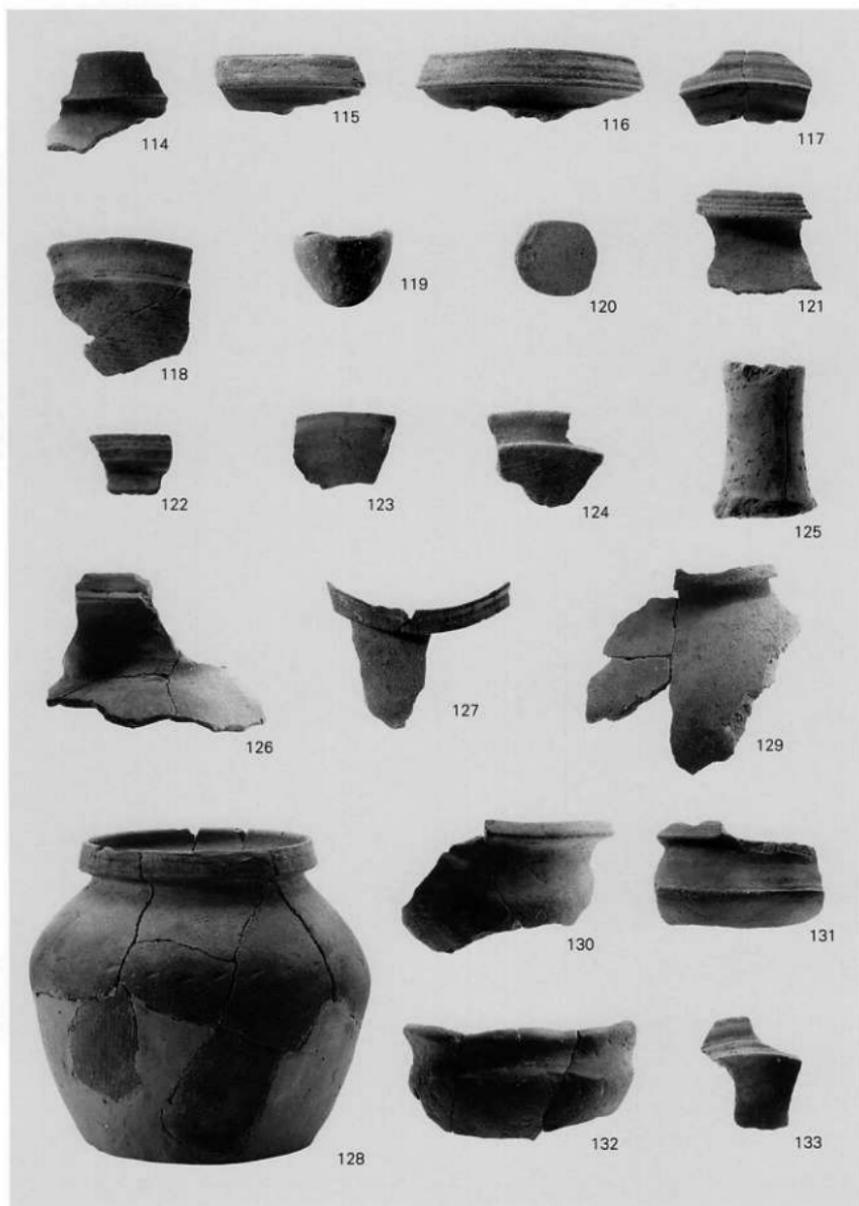
出土遺物 5



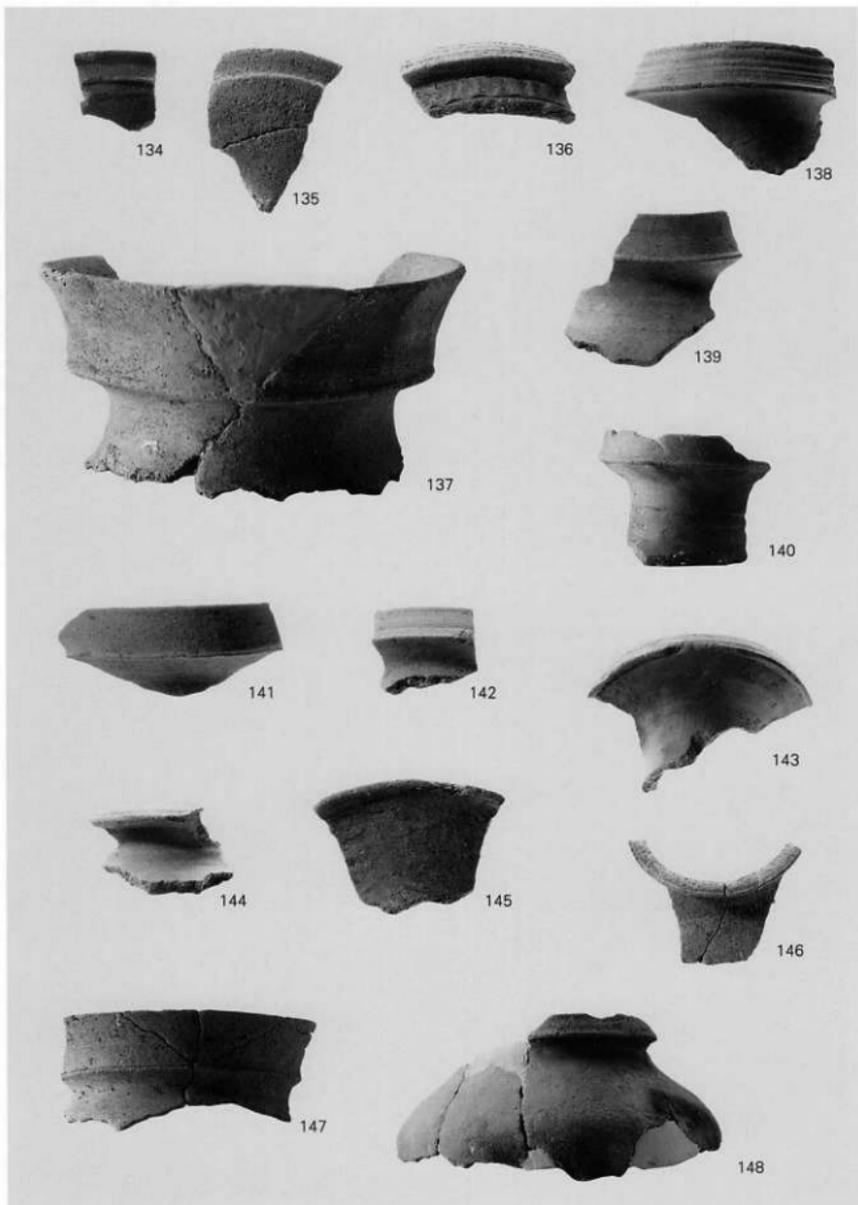
出土遺物 6



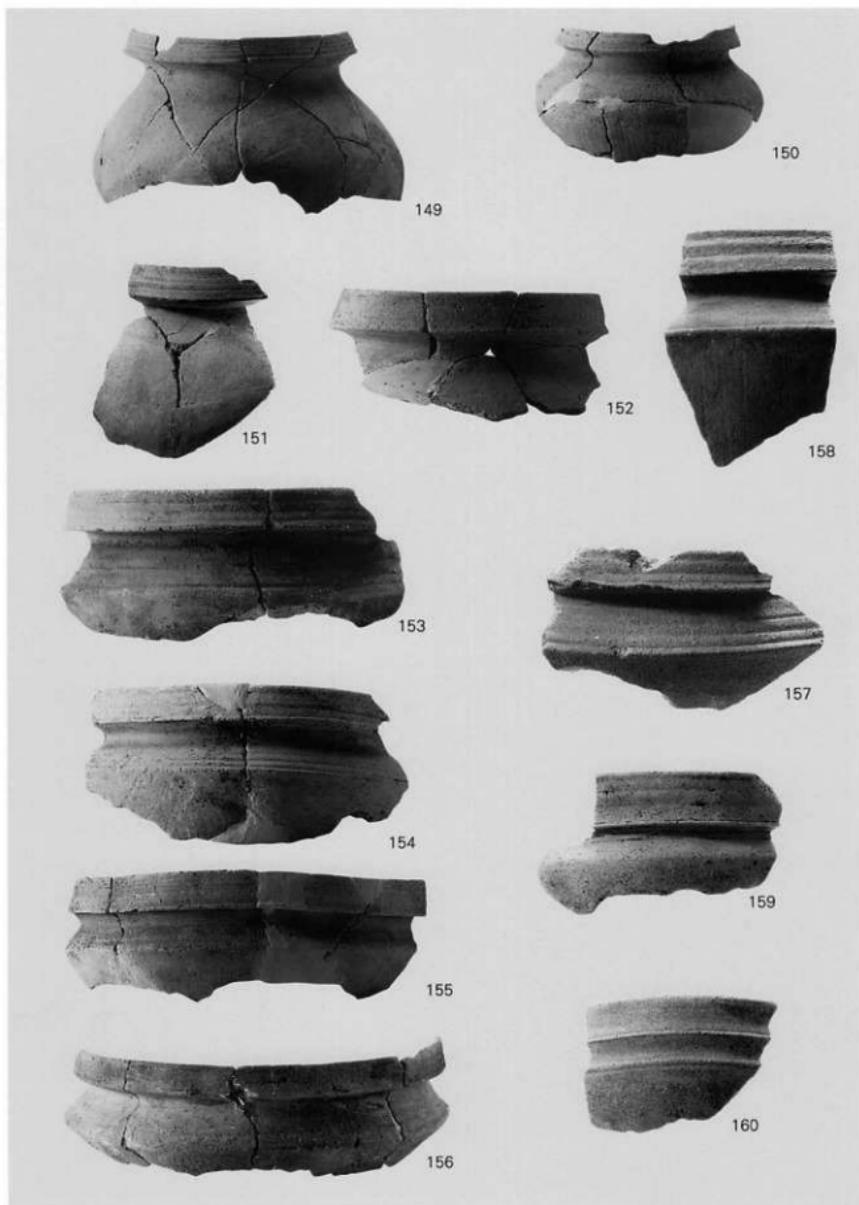
出土遺物 7



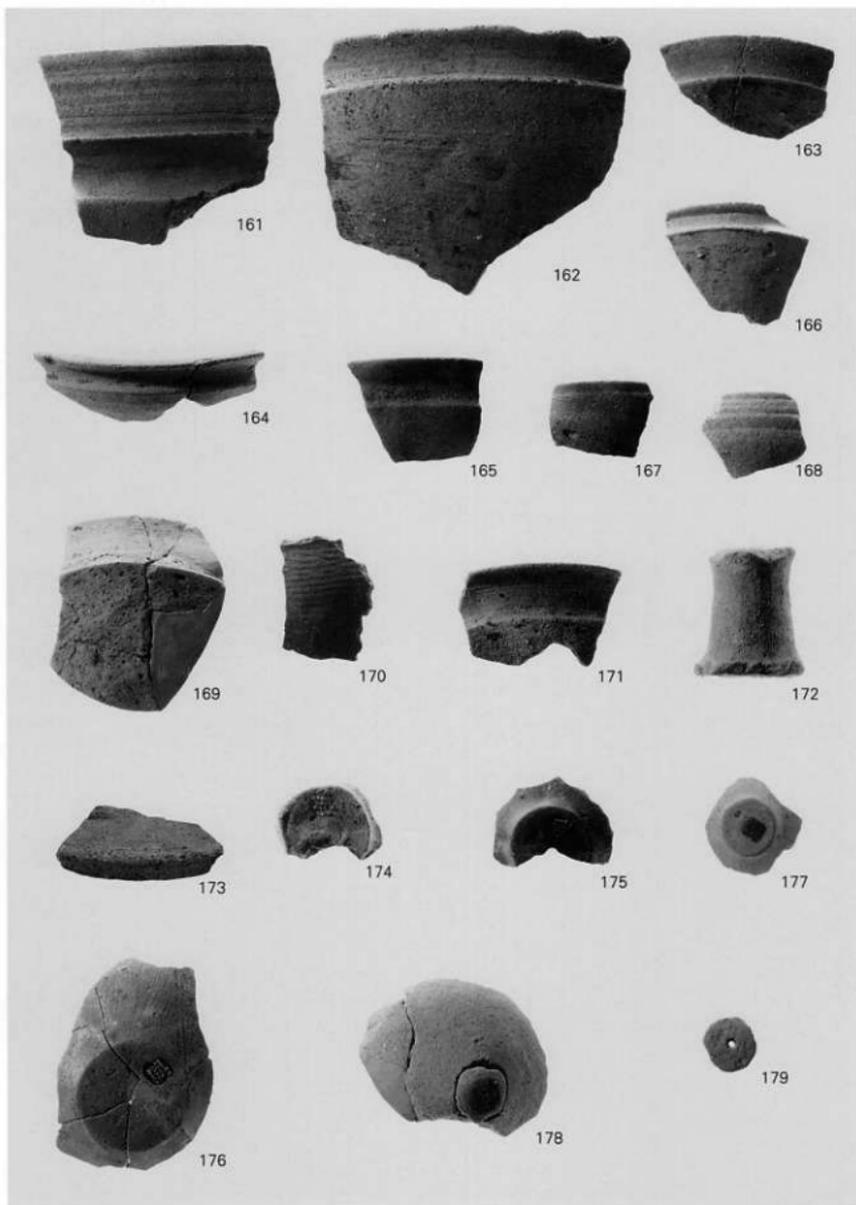
出土遺物 8



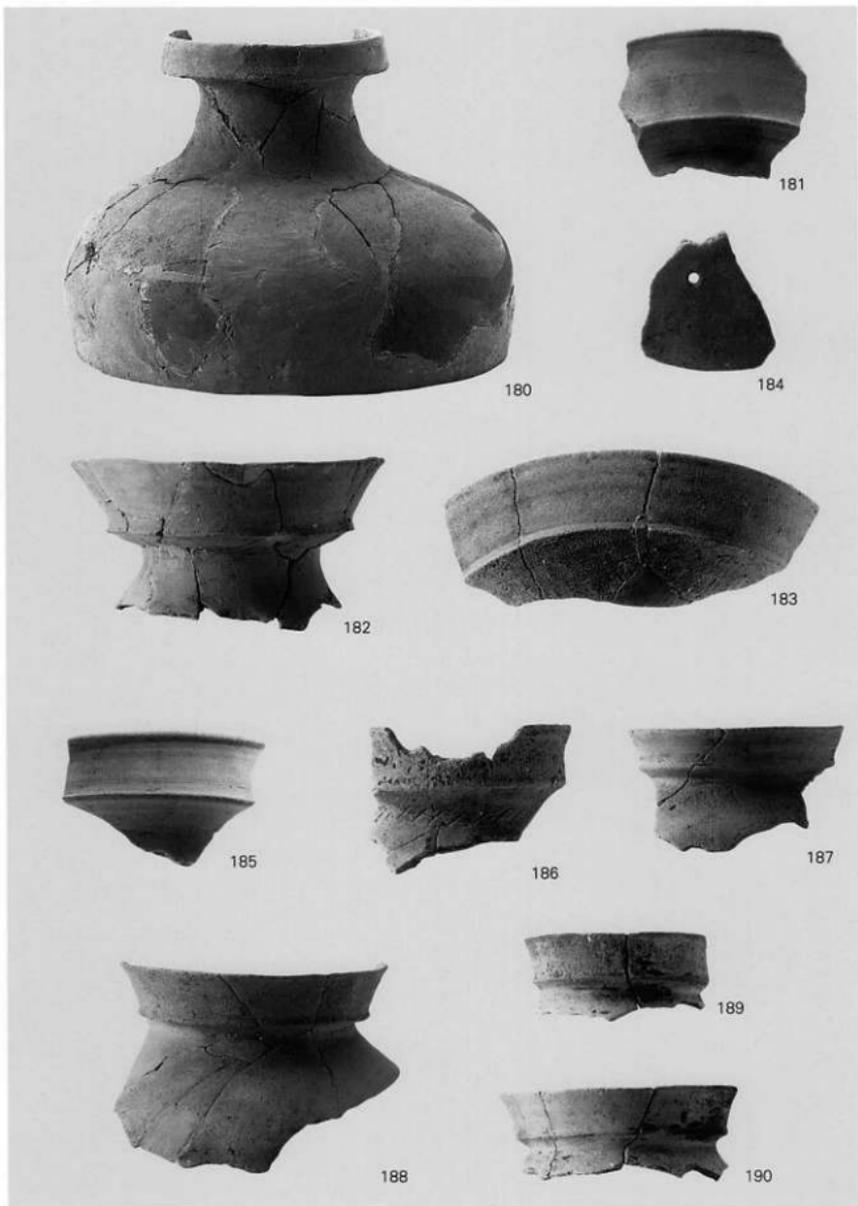
出土遺物 9



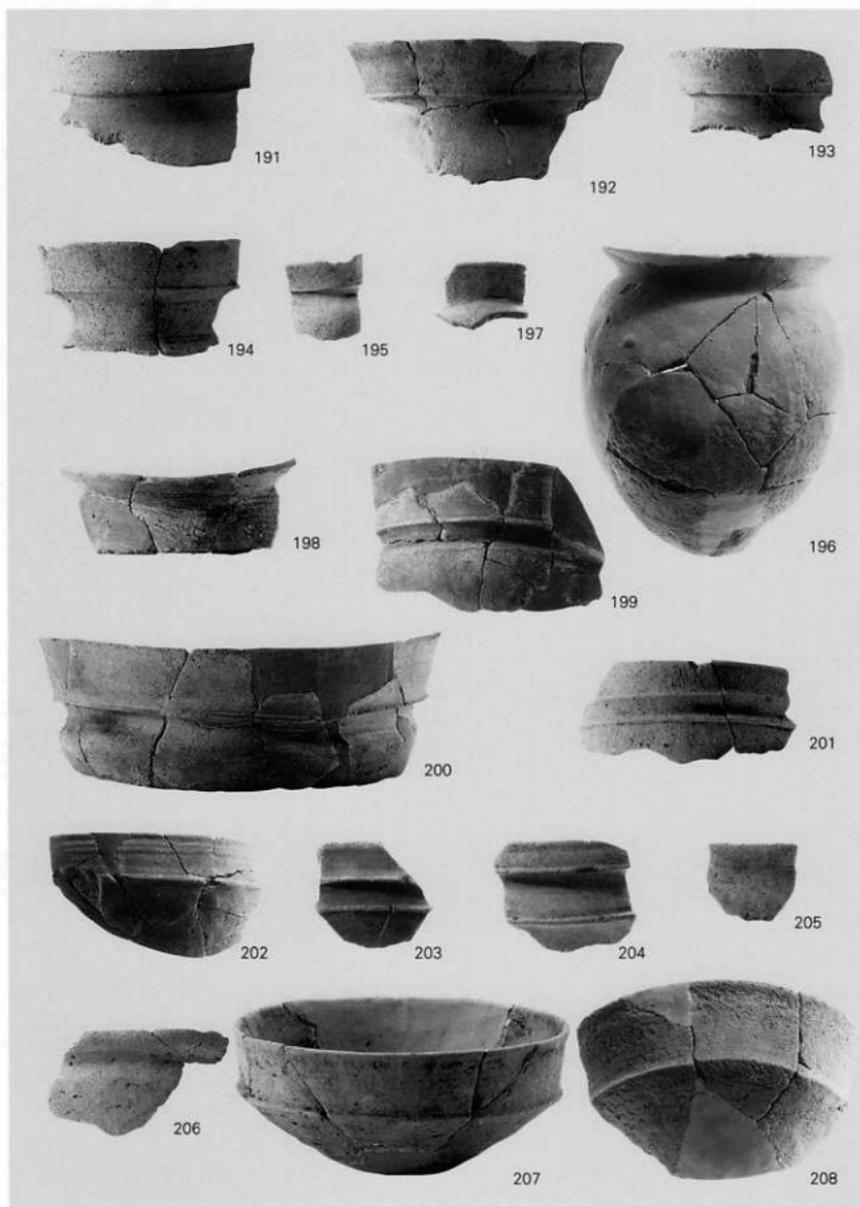
出土遺物 10



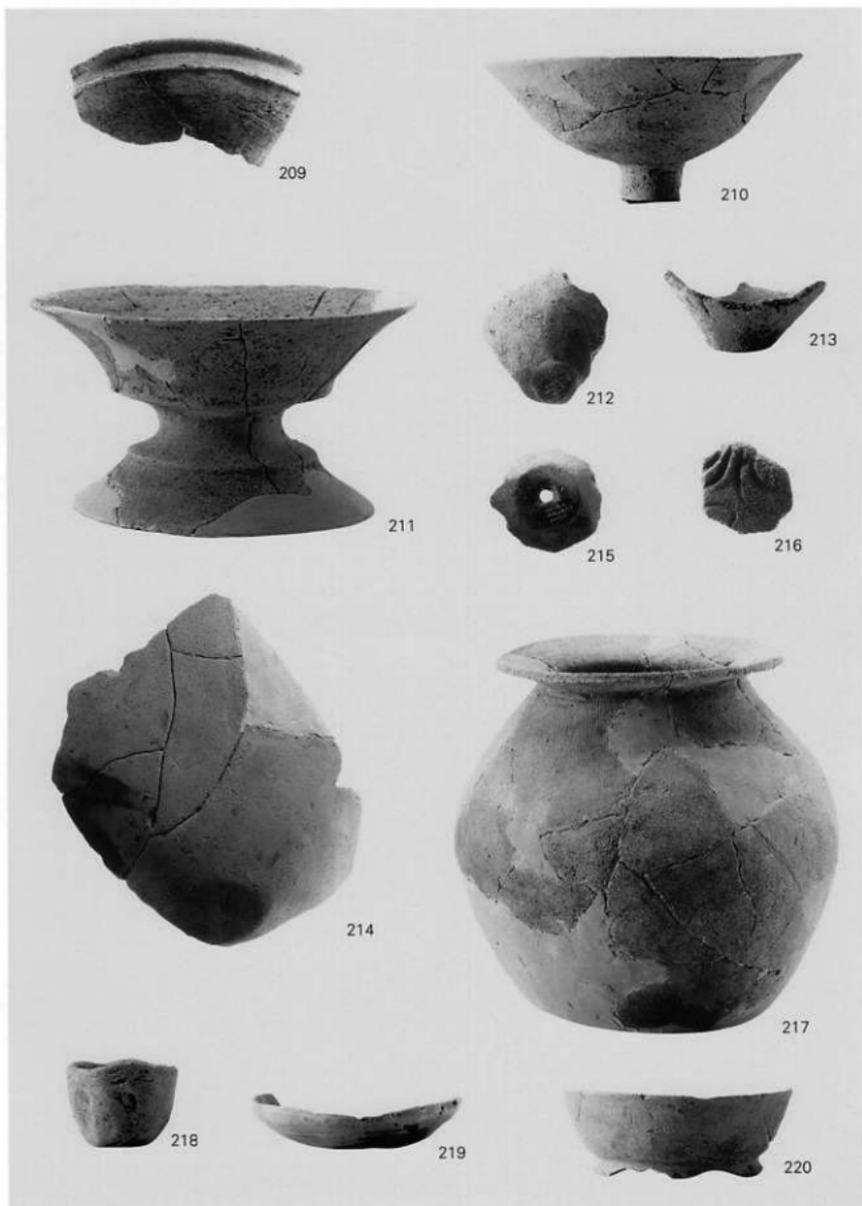
出土遺物 11



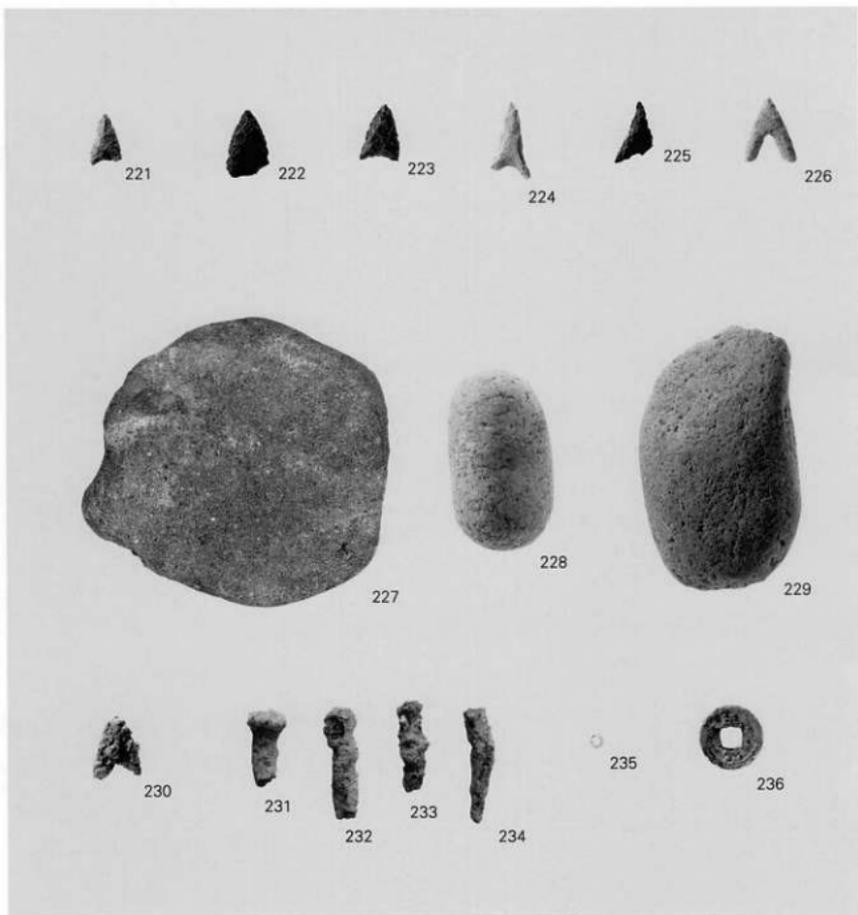
出土遺物 12



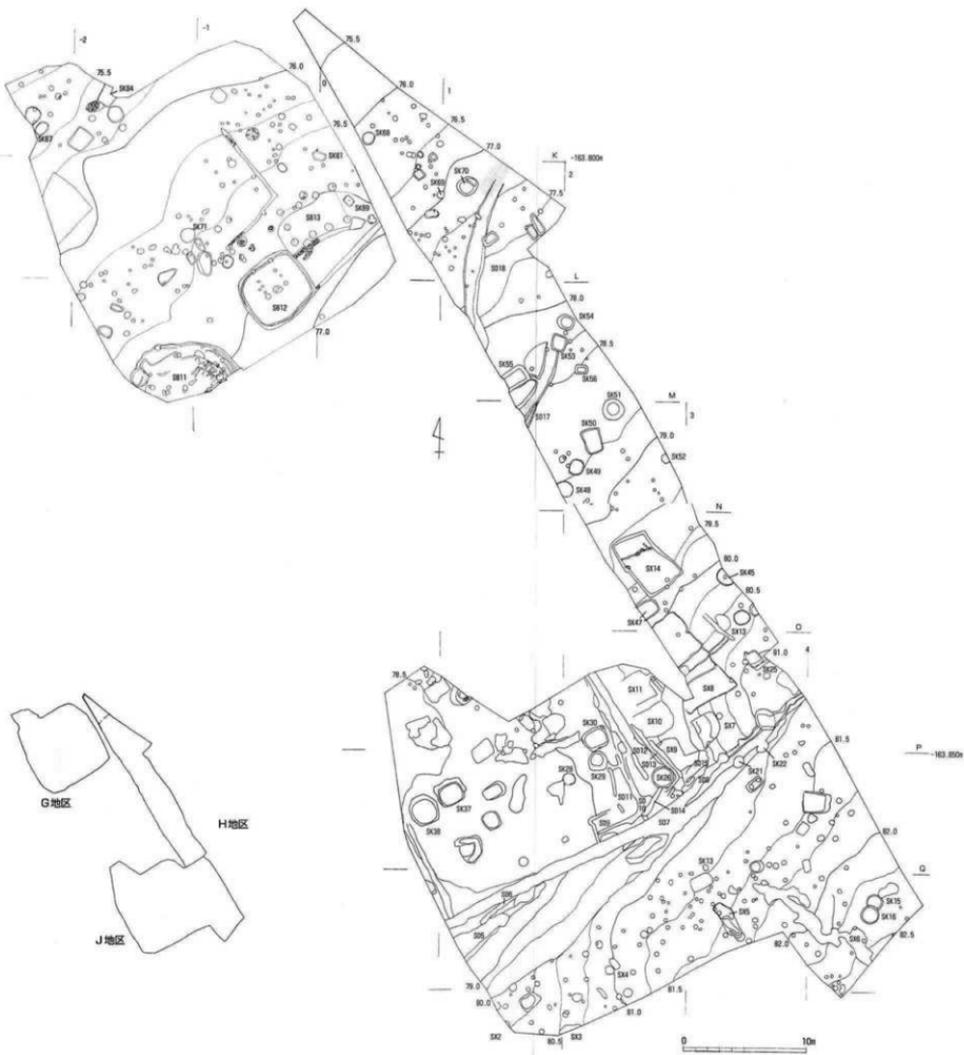
出土遺物 13



出土遺物 14



出土遺物 15



付 図 曾川 1 号遺跡地区及び遺構配置図 (1 : 300) (アミ目 : 土器割り)

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	ちゅうごくおうだんじどうしゃどうおのみちまつえせんけんせつにともなうまいぞうぶんかざいはつくつちょうさほうこく							
書名	中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(5)							
副書名	曾川1号遺跡(G~J地区)							
巻次	5							
シリーズ名	財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書							
シリーズ番号	第23集							
編著者名	鍛冶益生							
編集機関	財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室							
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区観音新町四丁目8番49号 TEL 082-295-5751							
発行年月日	西暦2008年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
曾川1号遺跡	広島県 尾道市 御調町大町	34205	34441-150	34° 31' 19"	133° 09' 49"	20040607 ~ 20040806 20050111 ~ 20050304	1002 730	中国横断自動車道尾道松江線建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
曾川1号遺跡	集落跡	弥生 古墳 近世	竪穴住居跡 土坑 溝状遺構	弥生土器 土師器 石鏃、台石、殿石、鉄鏃、 鉄釘、ガラス小玉、古銭				
要約	曾川1号遺跡	曾川1号遺跡は背後にある牛の皮城跡から伸びる低丘陵上に立地し、前面には御調川が形成した氾濫原が広がっている。今回の調査においても従来の調査成果と同様に弥生時代から古墳時代にかけての集落跡を主体とした遺構を検出した。確認した遺構としては竪穴住居跡2軒、圓立柱建物跡1棟、貯蔵穴などの土坑、溝状遺構などである。このうち1軒の竪穴住居跡から石鏃と鉄鏃が共存して出土しており、石器から鉄器への移行期の状況を表していると考えられる。						

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第23集  
中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告(5)  
曾川1号遺跡(G~J地区)

発行日 平成20(2008)年2月28日  
編 集 財団法人 広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室  
〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号  
TEL(082)295-5751 FAX(082)291-3951  
ホームページ <http://www.harc.or.jp/>  
発 行 財団法人 広島県教育事業団  
〒730-0011 広島市中区基町4番1号  
TEL(082)228-8451 FAX(082)228-8441  
印刷所 朝日精版印刷 株式会社  
TEL(082)277-5588 FAX(082)277-1143